

現はせり。

彼は暴悪なるアポロ神等の迫害に對して如何なる哀願も最早其の甲斐無きことを認めたり。其顔には失望と美の結合を示し、更に進でかよはき人間の悲哀が如何に崇高なる情趣を表はし得べきかを示したり。彼れの面上には今や恐怖なるもの無し、只悲哀深酷にして助けなき悲哀あるのみ。彼女の面上には今や憤怒なるものなし。彼女は人軀の弱少を觀じて逃れ難き運命の手に甘じて自己と自己の愛兒とを委ねたるなり。彼女は憤怒なるものゝまことに力無きことを悟りたるなり。彼女の面上にはラオコンに見る如き身軀の苦痛を解脱せむとする我愆の片影だも見ることに無し。廣大なる神の威力と甚深なる慈母の悲哀とは斯の如き劣情に心を苦むを容さざりければ也。

彼女にありては事すべて悲哀の中に埋没せり。彼女の満身只涙あるのみ。怒無く怨無く身は避くべからざる運命の中にありて只愛兒の爲に涙ぐべき萬斛の涙を餘すのみ。彼女を苦めむとする暴神は却て彼女の爲に嘲けられたり。運命は一度び彼女を陥れて今や彼女は翻て運命を凌駕せり。迫らす忿らす亂れず、

れず、毅然として逆運の渦心に立ち却て愛兒を懷て慈母の涙を拭ぐ。天落ち地陥るもニオベが是心を如何にすべきや。花よりも美はしく星よりも清らかに滴るが如き慈愛の露によりて洗はれたる高雅端麗の顔容を以て滔天の魔力に面して毫も其の累す所とならざるに至ては天下の大なるもの何物か是れに如かむや。ニオベが悲哀の爲に石となれりと云へるいみじき傳説も未だ這般の情事を盡して憾無きこと能はず。

是の如きものをスコパス若くはブラキシテレスの手に成れりと云へるを、後人が其遺型を傳へたるニオベ像となす。

(二十九年七月)

三、フキデアスのツォイス像

古より一宗一教の始祖開基となり衆生百世の爲に救済慈悲の明燈を掲げたるもの、大聖に非ざれば則ち鴻徳豫言者に非ざれば則ち英雄。若し夫れ一把の斧鑿と一塊の牙石とを以て能く一代生靈の信仰を動かすものに至りては寧ろ偉とすべきに非ずや。フキデアスは實に是の如き人なりき。

こゝにはフヂアスの傳記を語るの違なし。唯希臘美術の第二期としてヘラス半島が萬世に誇るに足るべきペリクレス時代の精華を一身に萃め、其の不朽なる大名の下に、あらゆる時と處との嘆美と渴仰とを擔ひ、其の世にありし時、讒姦、妬賊の爲に遂げたりし非業の最後を跡無き流に洗ひ落し、今は山嶽に、空長閑なる亞典の古丘に靜臥して、美術百代の汚隆を觀じ居ることを一言すれば、則ち足りなむ。

ツォイス、即ち羅馬人のジビテルはオリムプ神山に於ける至大至高の神にして、あらゆる神と人との父、希臘羅馬の神話の中心なり。天を支へ、地を配し、雲を飛ばし、雷を驅り、人生と其運命とを指導する、其威力の高絶無限なるはもとより言ふまでも無し。

是の如きフヂアスは、是の如きツォイスを像れり、成る所果して何物なりしぞ。

フヂアスが造りしツォイスの像は、紀元五世の頃まで、凡そ八百年の間は、事も無く其殿堂に安置せられありしが、惜しや、祝融氏の手にかゝりて壞られ畢む。而も流風餘韻はさすがに幾多後人の擬作にあらはれ、今尙人をして其髣髴を想はしむ。擬作中の尤も美はしきものは、現にワチカノにあり。嚴かに亂れ、かゝりて豊かに

左右の肩にゆりかけたる頭髮、半かに廣き額の下に、鋭く、きざまれたる、双の眉毛、大なる眼は活と見開きて、大千世界に照臨するが如く、端正に高き廣き鼻隆は、正義の師表を示すが如し。稍々開かれたる唇は、凜然たる威嚴の中に、言ひがたき無量の慈悲を宿し、其の穩かに巻き縮まれる鬚髯と、共に希望と愛情を現はすが如し。凡て是れ、全希臘人が勇氣、威容、知慧、愛情に對する、理想的、完美を表現するものに外ならず。擬作によりてフヂアスの故型を想像すれば、全希臘人が、中世の耶穌教徒がパレスチナに於けるが如く、巡禮趨拜、後るゝことを是れ恐れたることの洵に當に然るべきものあるを想はずむばあらず。何となれば、彼等は、彼等のホメロスに於て、彼等の祖先が、中央亞細亞より齋らし、來り、幾百千年の間、山、明水、媚のヘラス半島に於て、漸く作り成したる、彼等の神話に於て、渴仰讚美する所のものを、今や見得べく、觸れ得べき塊然たる形體の中に、於て、眉睫の間に、實現せられたるを、認め、たればなり。希臘羅馬の民は、是像の前に、一種の魔術を感じたり。憂ふるものは、喜を得、悲める者は、望を得、あらゆる地上の、不満足は、天上、無限の光榮によりて、解散せらるなり。獨り是を觀るものゝみならず、是を作りたるのフヂアス自らも、實に是

魔術の爲に打たれたることは、次の傳説によりて知らるべし。曰く、ツォイスの像成りて是を安置するや、フキデアス其前に立らて凝眸多時、以て其作の巧拙如何を檢案せむとせり。俄然彼は敬畏感激の情に堪へず、覺えず像前に跪き、祈りて曰く、賤匠の作よく神意に副ふことを得たりや、乞ふ靈驗を得て其左右を知らむと。言未だ了らず、霹靂一聲、晴天に震ひ、電光閃々、堂中に落ちたりと。

是の如きものをフキデアスのツォイス像となす。嗚呼、フキデアス彼れ眇乎たる一介の工匠のみ、而して能く是の如きを得たる所以のものは何ぞや。神は不信の胸に宿らず。神に非ざるよりは何物か能く神を作らむや。大なる美術家は多く自己よりも大なるの製作をなすもの、豈他の故あらむや。

フキデアスがツォイス像を表はして遺憾無きもの、實にホメロスが左の句にありと傳ふ。フキデアス自身も恐らくは是に憑りて其の想像を構へしものならむと云ふ。録して讀者に示す。

“Also sprach und winkte mit schwärzlichen Brauen Kronion,

Und die ambrosischen Locken des Königes walten vorwärts

Von dem unsterblichen Haupt; es erheben die Höh'n des Olympos.”

(是れテゝリス神の哀願を聞きての語なり、クロニオンはツォイスの又の名の一なり、クロニオンの子なればなり。)

(二十九年七月)

ナポレオン三世

ナポレオン三世は何人ぞ。英雄か、英雄にあらざ、愚物か、愚物にあらざ、策士か、策士にあらざ、痴人か、痴人にあらざ。然は則ち彼れは何者ぞ。或る史家は彼れを評して、險怪隱密なる狡兒なりと云ひ、或る評者は彼れを稱して、器識超卓の敏才なりと言ふ。彼れを頌するものは、彼れに許すに靜穩謹直の政治家を以てし、彼れを譏るものは、彼れを攻むるに奸佞陰險の偽善家を以てし、或るものは彼れを崇んで英敏俊偉の傑物となし、或るものは彼れを蔑りて巧黠便巧取るに足らぬ小人となし、譏譽褒貶紛々として歸着する所なし。そも、彼れは何人ぞや。余の見る所を以てすれば、彼れは憐むべく而かも、惡むべき野心家たるに過ぎざるのみ。

彼れが一生五十餘年の歴史は奇譎變幻、開闔出沒、殆んど端倪すべからざる程不規則にして、廻轉曲折多しと雖ども、終始一貫して淪らざるものは一の野心なり。其の起るや野心を以て起り、其の倒るゝや野心を以て倒れ、出づるや野心を以てし、没するや又野心を以てす。而して彼れは此野心あるが爲に兵士となり、捕虜とな

り、放客となり、幽囚となり、暴徒となり、新聞屋となり、帝王となり、策士となり、偽善家となり、政治家となり、殆んど有らゆる人間の境遇を涉獵して、趣味多き一部の小説的歴史を此浮世に貢獻せり。彼れの資質品性は決して左程雄猜陰狠なるにあらざ、寧ろ或點に於ては天真爛漫として愛すべきものあり。彼れの精神氣象はしかく峭嚴辣酷なるにあらざ、却て靜穩親しむべきものあるにも係らず、一種の野心の爲めに蒼生を欺罔し、憲法を蹂躪し、恐ろしき大罪を犯したり。彼れの意思はそれ程迄健剛なるにあらざ、彼れの忍耐は又それ迄立派なるものにあらざ。然れども彼は此一種の野心の爲に能く百敗の辱に屈せずして一家を立て、一國を興し、能く一代の偉勳を奏せり。野心又野心、鬱勃胸中に燃ゆる野心こそ實に彼れの生命心髓なれ。彼は之が爲に失敗し、之が爲に成功し、之が爲に生き、又之が爲に死せり。彼れ亦憐むべく、惡むべき野心家にあらざや。

然りと雖ども如何なる野心家も、風雲に際會するにあらずんば、蹉跎蹉跎徒らに憂悶の裡に一生を送らざるを得ず。僥倖にも彼は時勢の好運に乗じて、其力量以上の仕事をなしたり。即ち彼れの如きは能く時勢を作るの英雄に非ずして、寧ろ

時勢に乗ずるに巧なる使兒たるなからんか。敢て奇變縱横の才あるにあらず、雄偉卓犖の略あるにあらず、將又乾坤一擲、危局を争ふ大ナポレオンの魂膽あるにあらず、怪腕辣手、詭變百出、能く人を翻弄するビスマルクの權數あるにあらず。而かも一たび蹴起するに及んでは、巧に人心を收攬して、大統領となり、恣に群雄を凌駕して皇帝となり、クリミアに戦ひ、以太利に闘ひ、普と争ひ、露と競ひ、殆ど英雄豪傑にあざればなし、能はざる底の破天荒の大活劇を、十九世紀の舞臺に演じたるを見れば、彼は豈時勢に乗ずるに巧なる青雲の寵兒にあらずして何ぞや。

世間或は彼れの事業の宏大なるに眩惑し、佛國が一時彼れの治下に未曾有の旺盛を致したるに驚嘆し、英雄又は大政治家を以て、彼に許すものありと雖も、彼れ畢竟カールイルの所謂る撰ばるゝに巧に、知らるゝに巧なるもの、若し夫れ青蠅も驥尾に附して千里を致すことあるを悟らば、尤爵榮位、必しも技倆にあらず、大業偉勳、亦必ずしも手腕にあらざるを了知するに足らんか。ナポレオン三世が衆人の推舉する所となり、匹夫より身を挺して佛國の帝位を踐み、割合に目覺しき事業を成し、遂げたるものは世人の想像するが如く、雄才大略の致す處にあらずして、能く時

運を迎へ、巧に人心に投じたるによるのみ。然りと雖ども、彼れ亦一個の可憐なる野心兒、豈尋常凡庸の品儔を以て目すべきものならんや。請ふ先づ彼れが歴史を讀め。

ルイ・ナポレオンの家系並に其家庭

蓋世の英雄ナポレオン皇帝の皇后として歴史に名高きジ・セファンの一女、ホルタンスはナポレオン皇帝の弟ルイ・ボナパルト(舊和蘭王)と結婚して、同棲五歳、既に一子を設けしも、夫妻琴瑟の交睦しからざるより風波常に絶ゆることなく、ホルタンスは遂に一千八百〇七年十二月、夫を捨て、巴里に赴き、交際場裏に驅逐して愉快なる生活を送るうち、翌年四月廿日に至りて一男兒を擧げぬ。是なん他日風雲に際會して佛國皇帝の金冠を戴くべき好運兒、ルイ・ナポレオンにてありき。當時ナポレオン一世の勢威は殆んど其極點に達して、ジ・セファンの光寵未だ衰へざる頃なりしを以て、此孫兒小甥は優渥なる餘榮に浴せり。殊に一千八百十年フォンテンブローにて舉行せられたる彼れの洗禮式の如きは、當時稀有の壯觀にして、ナポレオン皇

帝は皇后と共に神前に此嬰兒を抱き、恭しく其儀式を行へりと云ふ。

ルイ・ナポレオンの幼時に關しては吾人の知る所多からず。唯彼は其幼時摯戻頑固にして往々非を遂げ、決して共に親しく群兒と嬉遊するとなかりしが、穎悟敏達の稟性は能く此缺點を補綴して、家庭の愛兒たるを失はざりき。口碑の傳ふる所によれば叔父ナポレオンが最後の戰場に臨むに方り、ルイは慇懃帝の袖を叩へ戦争の不可を述べて其出陣を止めたりと。然れども小ルイが母に隨伴して叔父の宮殿を見舞しは、搖籃の中にある頃にして、少しく事理を辨ずるの時代に至りては、ナポレオンは兵馬倥傯諸國に轉戦して、巴里宮殿席暖なるに暇なく、ルイは後年叔父の狀貌さへも記憶せざりしと云へば、是れ全く無根の事實、附會の説にして、疑て信を措くに足らざるなり。

偶然の出來事は、此好運兒をして端なくも流離顛沛の苦楚艱難を嘗めしむるに至れり。あらゆる人生の榮華を盡して、權威飛ぶ鳥を墜落せしめし、ボナパルト一族も、其主人公たるナポレオン皇帝が、運拙く一夜の賭博に打負けて、セント・ヘレナの孤島に嘯き、ボルボン王朝代り立つに及んては、昔日の豪奢一沫の夢と空し、老幼相

携へて他國に奔遁せざるを得ざるの悲運に遭遇しぬ。ホルタンスも已むなく遂にルイを伴ひて禍をバ、リヤに避けしが、此處にも永住する能はず、道を轉じて瑞西に逃れ、アレネルベルグに高壯なる邸宅を購ひ、母子孳々、此所に拾有五年の生涯を送れり。

ホルタンスは温厚貞淑の賢母にあらざりしも、優雅脱俗の婦人にして、頗る坐談に長じ、一たび會心の友と談するに及んては、歎嗚洋々、夜を徹して倦まざるものあり。殊に文筆に長じ、其手に成れる抒情詩の如きは流麗暢達、字句の間自ら才華の煥發して、金鱗の潑刺たるを認む。他日ルイが其著作にて發表したる才藻は母の薰陶感化によるもの多しと云ふ。然れどもホルタンスは獨り彼が彫花鏤葉の師たるに止らずして、又實に彼れが野心の煽動者たりしなり。ホルタンスが爐邊其家系を説明し、悲憤今昔の感を述ぶるとき、傍らに黙聽するルイの、頑是なき頭腦は是が爲に刺戟せられて、厥の如き掌を握ること、幾回なるを知らざりき。

ルイ軍籍に入る

如何にしてボルボン王朝を倒さんか、如何にしてボナパルト家を起さんか、是れルイが造次、顛沛、忘るべからざる宿志なり。此宿志を達するには文官たらんか、武人たらんか、將た又政客たらんか。亂世の文官は唾手功名の地にあらず、專制政府の下にある政黨亦驥足を伸ぶるの局にあらず、當時の如き時世にありては、干城武夫こそ實に他年の宿望を達するの好地位なれ。是に於てルイは遂に意を決して瑞西の騎兵隊に身を投じぬ。

時に一千八百三十年佛國に空湧せる七月革命の影響として、一時地下に潜伏せる自由思想の暗潮は、決裂して迸出し、自由平等の聲歐洲の各地に響き亘り、神聖同盟國の惰眠を警戒す。而して其先鋒は以太利に於けるカーボナリ黨の反亂なりき。是より先き以太利の志士相會して秘密結社を建て、羅馬法皇を放逐し、澳太利の干渉を退けんとて經營慘澹怠るなかりしが、佛國國民がシャル十世を追放して立憲政體を建立せしを聞くや、彼等は直に奮起して以太利の獨立を宣言し、以太利人民は、四方響應し、其勢頗る猖獗なり。日夜南天を睥睨して天下事なきを嘆せしルイ何ぞ黙々起たざるの理あらんや、彼は忽ち奔馳星走ナポリに至りて獨立軍に加

擔す。獨立軍の總督ツツキ喜び迎へ、ルイ兄弟を推して各一部隊の將となす。羅馬法皇、反黨の銳鋒當り難きを見るや、カデナル、ベンベストを遣りて反民を和解訓諭せしも、反民間かず、ベンベストを縛して、驀然直ちに羅馬を襲撃す。羅馬法皇恐懼救を澳太利に請ふ。澳太利皇帝フランシス、將軍ラヂスキに大軍を授けて來り援けしむ。反黨の衆、其數多しと雖ども千餘に過ぎず、其勢盛なりと雖ども皆是れ烏合の兵、何ぞ能く澳國精銳の師に敵するを得ん、一戰忽ち敗れて四方に潰亂す。此戰爭にてルイの兄は傷きて屍を山野に曝らし、ルイ亦疲憊困頓歩行する能はずして遂に敵に捕はる。ホルタンス變を聞きて馳せ至り、辛うじて途にルイを奪ふことを得、間道より迂迴して佛國巴里に逃る。始め母子此地を奔竄せしより茲に至るまで十六年なりと云ふ。然れども當時佛國政府は猶ほボナパルト家放謫の法令を維持してルイ母子の巴里に逗留するを許さず、遂に母子を捕へて英國に追放す。ホルタンスは永く英國にあるを欲せず、暫くロンドンの客舎に呻吟したる後再び逃れて瑞西のアレチルベルグに歸る。

ルイ操觚者となる

ルイ博浪の一撃其功を奏せず、捐膺搏髀、今に至りて無益の悔をなすも亦及ぶべからず。彼は乃ち干戈を抛ち筆硯を取りて、國民の思想を鼓舞挑發し、徐ろに回天の事業を企てんとし、一千八百三十二年に、政治評論を著はし、翌年又瑞西の政治上軍事上に關する意見を公にし、盛に大ナポレオン時代の善政を頌し、當時佛國の弊竇を指摘攻撃す。共に是れ雄篇巨作を以て許すを得ざるも、其思想の富麗にして文章の流麗なる、大に瑞西人の賞賛を博し、ルイの名は國內に籍々としてアレネルベルグの邸宅は訪問者の踵を集めぬ。殊に一千八百三十六年、ナポレオンの嫡子ライヒスタット侯の夭死は端なくもルイをして一層其頭を擡ぐるに至らしめ、ポナバート黨は隱に彼に意を寄せ望を屬しぬ。一篇の著述巧に案外の聲望を博し、ベルヌの知事より陸軍大尉の官職を授かりてより、ルイの心漸く誇大となり、自ら謂らく我大事を成す此時にありと。力を計らず、機を察せず、其の親炙せる少佐ボドレ、と密議し、一千八百三十六年十月廿八日、ストラスブルヒに反旗を擧ぐ。ストラス

ルイ・ナポレオンの放謫

ブルヒの民數奇志を得ざるもの、骯髒奇を喜ぶもの、相率ゐて來り應じ、勢頗る盛なりしが、軍中の一將校テ、ランドなるもの、ルイの狀貌を瞻視し冷笑して曰く、我れ豎子の欺く所となる、汝はナポレオンにあらず、ナポレオンの甥にあらず、我はナポレオン皇帝を記憶せり、皇帝と汝と何の肖たる所ある、汝はボドレの甥なるのみ、豎子何ぞ能く我を欺罔するを得んやと。三軍の將士之を聞て彼を眞のルイ・ナポレオンにあらずとなし、未だ戦はざるに散亂し、却て戈を倒にしてルイに抗するものあるに至る。ルイ遂にボドレと共に敵軍の爲に捕はれ、檻車巴里に護送せらる。佛王ルイ・フィリップ之を死刑に處せんとせしが、偶々ルイの爲に命を請ふものあり、死一等を減じて亞米利加に放謫せられぬ。

一舉して當らず、再舉亦其志を得ず、僅かに餘命を保ちて天涯萬里の異郷に放謫の怨を吞む。是れ蓋し天の我を亡すにあらずして、自ら招ける禍なり、敵の強きが爲にあらずして、我が弱きが爲なり。天を怨みず人を咎めず、いでや加餐修養、會稽

の耻を雪がんと、ルイは是より獨り戸を閉ぢ客を謝して、法律政治の學を研鑽するもの數月、略々其堂門を伺ふを得たり。然れどもルイ又謂らく、机上の學は概ね空理空論たるに過ぎずと、更に中央亞米利加を旅行して審に習俗人情を探り、農工殖産の有様を察し、自家の藥籠少なからざるの美果を收取して歸る。ルイが實際政治の手腕なきに拘はらず、他日佛國の内治に於て比較的に好結果を呈したるは、實に此旅行中の經驗によれるもの多しと云ふ。

時に天外飛鴻あり、來り報じて曰く、ホルタンス疾篤しと。ルイ蒼皇旅裝を整へ、亞米利加より佛國を經、晝夜兼行、瑞西の自邸に着すれば、悲むべし、母は既に不歸の人となりぬ。獨り千歳の憂を抱きて東西に漂零し、空しく大業を企圖して幾回か放謫の命に遭ひ、卅餘年叔水の歎を盡す能はざりしもの、誰か斜陽原頭一片の苔石に對して無限の感慨なからんや。ルイは此が爲めに慟哭其度を超へ、殆んど狂せんとしたりき。

ホルタンスは瑞西にて巨萬の富と、立派なる邸宅を有せしを以て若しルイをして一たび政治的野心を抛却し、田野の間に放浪せしめなば、素封家として紳士とし

て偷安暖飽の裡に一生涯を送り得しならん。然れども彼れの功名に急なるや、再び政治雜誌を發行し、爲めに他國零遊の人となるに至りぬ。ルイは母の喪後未だ幾くもならざるに舊友レテ(陸軍士官)をして、一の政論雜誌を發せしめ、自ら筆を取りて、ストラスブルヒ事變の真相を展盡し、佛國政府の暴情を攻難す。佛王フョリッブは彼が其誓約に背き、再び歐洲大陸に入りて佛政府の非を鳴らすを怒り、瑞西政府に命じてルイを國境外に放逐せしむ。然るに瑞西政府は、却て佛王の不法なる干渉を憤り、ルイを庇保せんとせしが、ルイは自個一人の爲めに兩國の親和を害し、不測の事變を引起さんことを恐れ、自ら瑞西を脱して英國に走る。

英國に於けるルイの生活

ルイ英國に留寓すること二歳、其間多く英國の權門貴族と往來して、時に或は談論を上下して其抱負を吐露し、又時には競馬場裏に驅馳して筋骨を鍊磨し、舞踏、夜會、奏樂、演劇等ありとあらゆる公會に出入して、社交的生活を送りぬ。花月多く人を墮落せしめ、遊治屢々一生を誤らしむる媒介たれども、ルイの大望は之が爲に障

得せられざりき。彼は此際に於て、ナポレオンの理想と題する一書を公にして、一世ナポレオンは平和の攪亂者に非ず、自由の壓服者に非ず、却て自由平和の爲めに歐洲の各國と衝突を來せる者なることを論斷し、ルイ・フィリップの如き專横の君主は一日も自由平和を愛する國民に君臨すべからざるを唱道せり。

當時佛國の民心は一變しぬ。天下昇平日久きに亘るの結果、偷安姑息の政治に満足して敢て他を知らざるフィリップの如き庸主を厭惡して、豪宕邁往世界の耳目を聳動せしナポレオンの英雄を渴仰景慕し初めぬ。或は國民相議してナポリの女皇ナポレオンの妹に養老金を送るあり、或は有志相謀りてナポレオンの紀念碑を建つるあり、ボナパード黨の勢力日に月に増長しぬ。佛國の宰相チエール亦民心の傾向を察し、務めて其を政府と和解せしめんと欲し、其手段として英國のバ・マストン侯に諮りナポレオンの遺骸を佛國に轉葬せむとを決しぬ。ルイ・ナポレオン謂らく、一鞭直ちに佛國に至らば、叔父ナポレオンの功名に隨喜せる國民は必ず能く我を推戴して、フィリップを倒さんと。知人モンヌロンと五十餘の同士を語らい、一千餘の英兵を帥ひて不意にブロンニに上陸し、税關を襲ひ、檻獄を奪ひ、專制政府を倒し

て共和の新政を布くを宣言す。豈圖らんや佛國民一人の來りて其軍に加ふるものなからんとは。此時佛王フィリップはオイにありしが報を聞て、星馳巴里に還り、一撃直ちに暴徒を破りルイを虜にするを得たり。ルイ胸に成算なく、兵に訓練を缺き、突如として此輕舉妄動を逞うす。假令心を寄するの黨徒多しと雖も、未だ氣脈を通ずるなくして何を俄に好結果を奏するを得んや。其の敗るゝや固より自明の數なり、佛民の應ぜざるや又宜なりと云ふべし。斯くの如くにしてルイは獄舎に送られ、貴族院にて審問せられたる後、僅に一命を助けられてハムの城砦に幽せらる。

ルイ・ナポレオンの幽囚

ルイ・ナポレオンがハムの獄舎に投ぜられて憂愁遣るなかりし頃しも、セント・ヘレナの寂寞たる棕櫚樹の下に冷夢結びあへざりし英雄の棺柩は新に發掘せられて佛國に持來され、センヌ河を溯りてインバリの寺院に改葬せらる。招魂の砲聲は天地に轟き、一代の王侯貴族は擧げて此葬儀に列し、莊麗偉觀云ふばかりなし。

巴里の市民は度仰の念と追慕の情に打たれて、思はず感慨の涙に暮れぬ。幽闇蕭條たる鐵窓の下に呻吟して此を聞きしルイの心中果して如何ぞや。叔父は死して能く萬民の仰瞻を受け、我れは生きて却て獄吏の凌辱に遇ふ。仰て叔父が威烈の大なるを想ひ、俯して我が宿望の蹉跎たるを察すれば、何人が能く懷抱鬱結、心腸九廻するなからんや。若し彼をして急性進越の野心家ならしめば、憂憤悶絶の極、自頸して死せしならんのみ。然れどもルイは非常の野心家たるに拘はらず、極めて冷靜沈着の特性を有せり。彼は囹圄の裡にありて毫も怨懟苦悶の色なく、委靡衰颯の風なく、冷然として自適し、耿たる一點の希望は猶ほ蝮蛇の如き彼れの眼中に閃きぬ。

彼れ嘗て此獄中より諸友に書を與へて曰く、人生の幸福は實質界よりは寧ろ理想界に存す、身今囹圄にありて日月を觀るを得ざるも、沈思默坐、恍然として一たび理想の世界に遊べば一切の世榮又顧るに足らざるなりと。亦以て彼が此幽囚中の襟度を知るべきなり。彼れ又人に語りて曰く、ハムの城砦は余が一生涯にとりて、少なからざる智能と學識を與へたる大學校なりと。四壁蕭條、側に人なきのと

き、枯淡靜寂思を幽境に馳せ、眼を讀書に曝らす、豈渾然自得する所なからむや。ハムの囹圄はルイに取りては實に大學校にして、彼が半生の學識は、概ね此裡に獲得したるものなり。而して其の蘊蓄する所、砂糖問題となり、自由貿易論となり、南米殖民論となり、パナマ地峽開鑿論となり、英國革命の歴史論となり、其才華は混々として、筆端より横進せり。

如斯にしてルイは勤學依然、此獄舎に六裘葛を送りぬ。然るに嚴父の凶報は又突如として至れり、ルイは再次其喪に臨まんとことを請へども許されず。ルイ乃ち謂へらく、如斯んば自由の身となるの期、其れ何の日にあるを知るべからずと、脱檻の念漸く芽す。獄吏コンノ、なるもの、朝夕過訪しルイの爲に慰撫懇切到らざるなし。ルイ乃ちコンノに謀り、ハムの獄舎に工事あるを機とし、服裝を變じて職工に擬し、夜に乗じてハムを脱出し、困厄疲憊の餘英國に遁走す。

佛國に於ける二月革命、

ルイ・ナポレオン大統領となる

ルイ・フィリップの治世の下に、佛蘭西は前代未聞の昇平を到せり。曩日跋扈して控御を受けざりし共和黨も、今は聲を飲むて王の治政に黙し、平素檢束を肯ぜざる過激論者も、遂に首を俛して其事に従ひ、國會は唯々として政府案に賛成し、新聞は又諾々として王政を賛助するに止まり、野に危言なく朝に諫官なし。而して人口は次第に繁殖し、商業は日を逐ふて隆盛に赴き、歳入歳出の増加、又殆んど英國を凌駕せんとするに至る。人皆謂らく、太平長く期すべく、旺盛久く樂しむべしと、然れども此れ革命後一時人心の銷磨沈滞せし結果のみ。風雲一たび地を捲きて來らば、基礎鞏固ならず、根底充實ならざる、ルイの政府何ぞ久しきを保たんや。況や中葉以後ルイの弊政其極に達し、紀綱弛み、風俗紊れ、自由共和の思想亦隱約冥々の間に形成せられつゝありしに於てをや。

蓋し十有餘年の太平は經濟の機關を膨脹せしめ、生活の程度を高尙ならしめ、爲に奢逸の風漸く萌し、富豪跳梁の弊は上下貧富を離隔して細民休養の途全く絶へ、國會の議員は收斂の吏となり、内閣の有司は惡貨を濫造するに到る。國用多端、誅求酷く、社會の腐敗と人民の困難は殆んど其極端に達せり。フィリップは民に重税を

課して盛に工事を營み、貴族は花柳の巷に徘徊して歌舞燕安に耽り、綱紀廢頽して又濟ふべからざるに至れり。是に於て一時政府の威力に壓服せられて、伸びんとするも伸ぶる能はざりし、社會黨共和黨は、宛も地下に潛みたる積水の、罅隙を得たるが如く、決然として迸射し來れり。加るに一千八百四十五年と四十六年との二度に於ける水旱飢饉は、ルイ・フィリップの逆政と共に暴威を逞し、遂に巴里市中王の馬車に爆烈彈を投ぜし暴徒あるに至る。或は又テュリの宮殿に荆軻を學んでヒ首玉躰を危ふせんとする狂人あり、刺客彷徨、盜賊横行、人其生を安せざるに至りては、ルイ・フィリップの政府も亦岌々乎として危し。一千八百四十八年十一月廿八日、國會の開始せらるゝや、アラゴ、オデヨン、パロ、ルイ・ブラン、テュル、ラマルテン等共和黨の首領は相共に立て政府を攻撃し、痛快淋漓を極め、劈頭第一議員選舉法の改良を以て政府に迫る。而して政府は之に従はず。是に於て共和黨、社會黨は相共に連合して呼喚合撃せんと欲し、翌年二月廿二日を以て巴里に大會を開き、大に協議する所あらんとせしかば、政府は兵を遣りて之を解散せり。是に於て巴里の市民大に激昂し、市中壘を築きて王兵と格闘し、彈丸飛び劍火閃き、巴里は忽ちにして修

羅の巷となるに至れり。フキップは暴徒の勢猖獗にして容易に鎮壓すべからざるを見るや、直ちにギョー等を免職して罪を謝せしも、時期既に遅く、暴徒は王宮に闖入し王を放逐す。是れ實に佛國に於ける二月革命なり。是に於てラマルテン等は假政府を設けて社會黨の紛擾を抑制し、カベンタは軍を督して労働者の暴亂を鎮壓し、僅に一時の小康を致すを得たり。

二月革命は天實に青雲の寵兒に幸するのときなりき。寵兒豈黙々、此千歳一遇の好機會を看却するものならんや。ルイは王の遁走するを聞くや、直ちに英國より巴里に入り、假政府を助けて自ら其難局に當り、戦後の經營に執掌せんことを請ふ。共和黨の領袖等、ルイ政府に入らば、徒らにボナパルト黨の強大を致し、或は再び共和政府の轉覆を來さんことを恐れ、ルイの請を許さず。ルイは空しく志を齎らして英國に歸る。然るに國會の開始せらるゝや、ルイは巴里及び外四選舉區より議員候補者に選出せられ、ルイナポレオンの聲名漸く佛國內に高し。然れどもルイは時機の未だ到らざるを察し、反對黨の勢力盛なるの故を以て一時議員を辭せしが、選舉區民の好意捨て難きより遂に議院に列す。ルイは大ナポレオン皇帝の

甥として、故和蘭王の子として高く自ら標置し、謹直敬虔、溫柔、滑脱、勉めて國民の奸尙に投ず。此に於て、昇年ならずしてルイの名聲は國內を震動し、輕佻なる佛國民は、卓眼明識の士の反對せしにも拘らず、殆んど一世ナポレオンを渴仰せるの情を移して、此一野心家を迎へ、一千八百四十八年十二月二十日、五百四十三萬票の大多數を以て佛國の大統領となす。ルイナポレオンは時運に際會し、乃に颯らずして多年の宿願を達す。乃ち欣々然として神前に國民と誓て曰く、永く憲法を遵奉し、忠良なる國民の寄托に答へむと。何ぞ計らん、其舌未だ燥かざるに、彼は盟を易へ約を破りて、專制の君主とならんとは。

ルイ佛國の皇帝となる、並に其内治。

ルイナポレオン佛國國民の人望を得て大統領となるも、國會の多數は概ねルイに反對し、殊に其の偽善を看破せる憂國の徒は、飽までルイを排斥せんとして、辯難甚だ力む。然れどもこの攻撃は常に國民の翼賛する所とならずして、ルイが大統領としての勢望隆々たること依然たり。ルイの狡猾警奇なる、民望の離反するあ

らんことを恐れ、特に寛厚謹直の風を装ひ、戦々兢兢々として穩和の政を布き、銳意國利民福を増進するの方針に出づ。即ち彼は先づ國民の救助、孤獨の保護を始とし、必需品の課税を輕減し、兵士の俸給を増加し、地方官に權力を賦與して、中央政府に隸屬するの弊習を匡正し、溝渠を穿ち、電信を布き、鐵道を通じ、博物館を興し、學校を建て、病院を設け、會堂を置き、殖産工業の振興を計畫し、航海貿易の發達を獎勵し、佛國をして忽ち文化燦爛、歐洲第一等の國たらしめ、其熾盛旺運一時の人心を隨喜せしむ。故に反對黨如何に口を極め、手を盡してルイを誹謗中傷するも、民心の歸する所又如何ともする能はず、手を拱してルイの爲すに任するのみ。是に於てルイが欲する所得ざる無く、請ふ所滿たされざるなし。之を策すること累年にして之を今日に獲たり、眞に其期する所に負かずと云ふべし。若しルイにして期至り任滿つるに及んで、勇退高踏、田野の間に退隱し、琴書詩酒、里閭姻族と共に團樂和樂の裡に餘生を送りしならば、ルイは平和の恩人、共和政府の創設者として、百世に廟食し、千歳に景仰せられたらんを、惜むべし、望蜀の情と、功名の念は、再たびルイを驅つて、野心の奴隸とはなしぬ。

當時佛國の憲法は、大統領の在職年限を四ヶ年とし、退職後四年を経過するに非ざれば同一人を再選する能はずと規定せり。然るにルイ其勢威の赫灼として欲するところ意の如くならざるなきより、遂に爵位に戀々し、四年の在職を以て満足する能はず、之を子孫に傳へて長く佛國に君臨せんと欲し、議會に迫りて憲法の改變を督促す。議會容れず。是に於てルイは其腹心ド・モルニ、伯及びアルイ將軍等と合同し、先づ私恩を賣り、軍隊の歡心を求め、一千八百五十一年十二月一日、大ナポレオン皇帝の戴冠式に當るを機とし、ゾルセイユの宮殿に盛宴を張り、悉く國內の政友論客を招聘して、自ら其間に周旋し、深夜宴終り客散するに及んで、兵を遣りて反對黨の邸宅に亂入し、悉く反對黨の名士領袖を捕縛し、之を獄中に下す。シャンガルニエ、カベニツク、チエール、ビクトル、ユゴ等は、唯一片のクーデターの下に、罪なくして縲繼の辱に遇ふ。

ルイは直ちに國民議會を召集し、自ら傲然として之に臨み、殊更に辭を飾り、泣て國民に訴て曰く、

吾れ謬りて國民の推舉選擇する所となり、大統領の重職に當る。自ら罷らる、罷

驚に策ちて、奮勵盡瘁、民望に協ふを得んと。然るに計らざりき、吾の不似なる、議會の信憑する所とならず、爲す所行ふ所、皆其圖に反す。議會は我が議案に反對し、我が施政に反對し、我が方針に反對し、我が政綱に反對し、我が精神に反對し、吾れ右すれば議員左し、吾れ東すれば議會西し、萬事悉く皆支吾して、柄鑿相容れず。吾れと議會とは到底兩立併存する能はざるなり。吾れ去りて議員留らんか、抑も又吾れ進んで議員退かんか。我が忠厚義烈なる國民、幸に反覆訂議して、吾が去就を決せよ。

と。ルイ・ナポレオン萬歳、大統領萬歳の聲は天地を震撼して、國民は皆ルイに左袒す。中にはルイの暴狀に憤昂して、義周の粟を食むを屑とせざる高傑廉直の志士なきにあらざりしも、勢敵せず力抗せざるより、皆命をルイに請ふ。ルイ乃ち令を出して憲法を變更し、大統領の年期を十年とし、國務大臣は大統領に對して責任を負ふこととし、樞密院を設け、元老院を置き、悉く大統領の配下に隸屬せしむ。而して其歳の十月、儼然南面して自ら佛國皇帝ナポレオン三世と稱し、西班牙の皇女ユージェヌを擧げて皇后となす。是れ實に一千八百五十二年なり。ルイ謂らく、自由

主義は帝權を維持し、家名を盛大ならしむるの道にあらずと、故に皇帝となるや、極めて自由を束縛し、言論を箝制し、專制獨斷以て其政治を行へり。今其憲法を見るに立法部は議案提出の權なくして、唯帝の提案を討議するに止まり、元老院は帝の諮詢に應答し、樞密院は帝の命令を遵奉するに過ぎず。佛國は是に至りて又全く專制政治の下に屈服するに至りぬ。何となればナポレオン三世の政府は、立憲制度の假面を被れる純然たる君主獨裁政治なればなり。

ナポレオン三世の外交

ナポレオン三世は幸にルイ・フィリップの弊政を受け、能く一時を彌縫したるも、勢極まれば必ず變ず、昇平日久しきに及んては亂焉んぞ生ぜざるを得ん。況んや劉轉羸蹶朝を易へ、代を革むるは、佛國の常態なるに於てをや。然らば則ち如何にして將に背馳せんとしつゝある人心を收攬せんか、又如何にして將に離反せんとしつゝある衆望を結束せんか。之を結束し之を收攬するものは、實に外交問題に如くものなし。故にナポレオンは國民が漸く己れの治政に厭惡の色あり、社會亦不平

の聲あるを察知するや、外國と齟齬を開き、事難を外に構へて内部の齟齬を國外に發洩せしめたり。

第一クリミア戦争。歐洲の天地は、自由主義と專制主義との衝突によりて震蕩激搖せられたる間に、露西亞が獨り東方に僻在して三年鳴かず飛ばず、武を練り食を充たし、陰に其勢を養ふて扶桑萬里の風を待つもの年あり。野心燃ゆる如きニコラス皇帝の即位するや、ペトロ、エカテリナの遺圖を承ぎ、不治の病人なる土耳其を分割して、圖南の翼を張らんと欲し、之を英國に謀る。英國其深意のある所を悟りて之に應ぜず。露帝は是に於て方を易へ、策を變じて、土耳其政府がエルサレム靈地に於ける基督教徒の特權を毀損したるを口實とし、一千八百五十三年メンシコフをコンスタンチノポリに遣り、土耳其國內の希臘教徒を露國保護の下に置かんことを求む。然るに土耳其政府斷然之を拒絶せしより、露國のゴルチャコフは直ちに兵を帥ゐて土耳其に侵入し、シノ、ブ港にて土耳其の艦隊を全滅し、土耳其の運命日に危殆なり。ナポレオン以て好機失ふべからずとなし、英國に説きて、土耳其を扶殖するに同意せしめ、兩國同盟艦隊を送りてクリミアに上陸し、激戰數次遂に

露國の強傲を挫き、一千八百五十六年三月卅日、露國をしてパリ條約に服従せしむ。此戦争にて財を費すもの二億、人を殺すもの三萬、而して佛國の得たる所を問ふは、負債のみ、困弊のみ。然れども戰捷の結果、ナポレオンの威名は世界に高く、始んど列國の盟主たるの觀ありき。而して佛國國民は一時の僞聲虚譽に眩惑して自ら知らざりしなり。

第二、以太利戦争。一難漸く排して一難來り、一亂僅かに除きて一亂生ずるは、是れ當時歐洲諸國に於ける趨勢なりき。而して間斷なく簇出空湧せる此等の一難一亂こそナポレオン三世の勢權を増大して、國民の滿心を扶育する好運とこそなりしなれ。是より先一千八百四十八年、以太利國內の志士、澳太利の羈絆を脱して共和の政府を建てんとし、羅馬法皇ビオ九世に迫りて、奧國に宣戰を宣告せしむ。然るにビオは法皇たるもの斯かる塵事に關係すべからずとなし、斷然之を拒絶せしより、過激なる共和黨は法皇を脅迫して、其意に従はしめんとし、隊伍を整へて羅馬に侵入し、法王の護衛兵を攻撃し、法王宮の前殿を擊碎す。法王狼狽蒼皇、ゲエ！ターに逃走す。時方にルイ、ナポレオンが大統領の地位より一躍して帝位に昇ら

んと欲する禍心を包蔵せる際なりしを以て、羅馬法皇を困阨の地に抜いて佛國に於ける舊教僧侶の歡心を買ひ、之と結托して、徐ろに事を謀らんと欲し、一千八百五十九年四月二十六日其將オ、デノ、に四萬五千の兵を授けて羅馬に入り、苦戰數回の末、漸く暴徒を鎮壓し、再び羅馬法皇を羅馬に奉還し、自ら熱心なる信徒と詐稱し、法王に師事せり。爾來歲月を閱する十星霜、星遷り物變りてノバラの一戰に肝腦地に塗れ、殆んど自立の見込なかりサルデニヤは、エマヌエレ、ガブル、二豪傑の下に大に其衰頹を挽回し、一たび兵をクリミヤに出して奇功を奏せしより、國威隆々、澳太利を蹴倒して沼吳の計をなす將に近きにあらんとす。時恰もナポレオン三世がクリミヤに成功して、雄心勃勃禁ずる能はず、再び佛國の軍旗を外國に翻へし、埃國の跋扈を抑へて武威を天下に輝かさんとするに會す。ナポレオン何ぞ袖手傍觀獨り以太利のなすに任ずる理あらんや。況んや英才勇邁のカブル、が銳意其間に奔走するありしに於てをや。是に於て佛以同盟は直ちに成り、サルデニヤは一千八百五十九年五月を以て澳國に向て宣戰を布告す。ナポレオン自ら其將マクマホンと三萬の兵を帥ゐて海路以太利に入り、六月四日、先づ澳太利の軍をマ

ゼンタに挫き、次で同月廿四日ソルフェッロの激戰にて大に澳軍を破る。若し此趨勢を利導し、長驅電撃、澳太利に進撃せば、ヴェネツヤを取り、匈牙利を略し、馬を下ナウ河畔に飲ましむる蓋し難きにあらざりしならんを、ナポレオンの愉快なる、十一月十日、チュリヒにて澳太利と不名譽なる條約を訂結し、空手何の齎らす所なくして佛國に凱旋す。

第三、シリア事件。澳太利と平和條約を結べる後、六ヶ月にしてシリアに反亂起り、耶蘇教國民の屠戮せらるゝもの數百人に及び、ダマスコにある佛國の領事館又爲めに禍難に陥る。而して土耳其の軍隊は暴徒を沈壓するの舉に出でず、却て暴徒に加擔し、益々其慘逆を逞うす。佛國の民心大に激昂し、帝に迫りてシリアに出師を促す。帝は元より願ふ所、直ちに遠征軍を派遣して容易に暴徒を壓倒するを得たり。帝は此機運に乗じ、シリアに鐵道を布設し、道路を平坦にし、港灣を開鑿し、以て東西の交通を敏活にし、佛國商業を旺盛ならしめんとせしが、英國の阻隔する所となりて果さず、空しく手を拱して止みぬ。

第四、メキシコ事件。シリアの反亂既に裁定し、佛國の天地平和の春を裝ひ、歐洲

の乾坤風波又靜かなり。是に於てナポレオンの夢魂は天涯の一角南米の地に向て飛びぬ。先是佛國革命の影響は太西洋を横ざりて、遠く南米諸國に波及し、自由共和の思想いたく州民の頭腦を刺戟し、或は西班牙の羈絆を脱して獨立を企つるあり、或は其國王を放逐して共和政府を建つるあり。一千八百十九年コロンビヤ獨立してより、四十餘年の間、南米諸州は混沌たる争亂の渦中に捲投せられ、天下一日の平穩を見るときなかりしが、一千八百六十一年に至りて又メキシコに紛亂生じ、共和黨相議して、國王を海外に放逐し、新に大統領を迎へて共和政府を建つ。ナポレオン謂らく南米の沃壤を略取して太西洋上の海權を掌握する此機にありと。英國に説き、西班牙に誇り、大軍を遣りてメキシコに上陸し、大統領を黜罰して反亂を平定し、澳帝の弟マキシミリアンを立て、世襲の帝王となし、自ら其保護者となる。是より數月の間、帝は兵をメキシコに屯在せしめてマキシミリアンの爲に盡す所ありしも、其後反揆屢々起り、費用亦巨大なりしより、帝は遂に屯兵を撤回するに至る。マキシミリアン勢孤弱、暴徒に抗するに足らず、其王妃をして歐洲に歸りて各國に援兵を乞はしめしも、果さず、一千八百六十七年、慄悍なる反民の手に陥り、

悲惨の最後を遂げぬ。此事件は歐洲の外交上其關連するところ少なしと雖ども、一たび其慘鼻酷薄なる死報の歐洲に傳播するや、大に歐洲人の同情を曳起し、ナポレオン三世の名聲益々落潮に傾く。

第五、普佛戦争。虎豹同じく棲むべからず、吳越共に存すべからず、利害を異にし、強弱を争ふ普佛、何ぞ能く長く對立するを得んや。一千八百六年、佛帝ナポレオン一世の馬蹄に蹂躪せられて、殆ど衰頹の境に沈淪せし普國は、後五十年間に漸く衰運を恢復し、殊にキルヘルム王于戈の際に即位するに及びて、臥薪嘗膽、士を禮し、銳を蓄へ、一千六百六十三年には丁抹を撃て之に捷ち、千八百六十六年には埃太利と戦ひて之を破り、北獨逸の諸邦を聯合して、儼然自ら盟主となり、其勢將さに佛國を凌駕せんとす。獨逸全國を打て一丸となし、佛國を挫きて、霸を歐洲に唱へんとす。然るに佛はライン左岸の地方を領し、南北獨逸の聯合を分離阻隔するを以て、普國にして佛を破るに非ずんば、到底其宿志を達するを得ざるなり。是を以てキルヘルムは十年生聚、十年訓練、一打撃を佛に加ふるの機を待つこと久し。

翻てナポレオンを顧みれば、一たびメキシコに失敗し、再び以太利に失敗してより、民望漸く落ち、自由の論、共和の説、又紛々擾々として其隙に乘じ、勢革命を誘起せずんば止まらざらんとす。ナポレオン此機を察し、國內の不平を國外に發し、以て内亂を杜絶せんと欲し、澳普戦争の起るや、澳太利に黨して普漏西を歴し、ライン河邊の地を略せんとす。ビスマルクの炯眼、其謀を知り、ナポレオンに啖はしむるに利を以てして曰く、若し貴國にして澳の外援たらずんば、則ち普はライン河畔の地を割て以て貴國の和好に酬むんと。ナポレオン乃ち手を束ねて、局外中立を守る。事平ぎ亂治るに及んで、使を遣はしてライン河上の地を求めしめしに、ビスマルク昂然として答て曰く、其地大國能く取らば、則ち自ら取れと。ナポレオン其の自らビスマルクに賣られたるを知り、大に憤慨すれども亦奈何ともするなく、切齒陰に一劍を磨す。是に至りてナポレオンの人望殆んど全く地に墮つ、此際衆望を恢復し、屈辱を洗滌するの法、唯普漏西に報ずるあるのみ。是を以て一千八百六十八年法令を出して常備軍の員數を増加し、國債を募集して新式の銃砲を購入し、糧食を貯蓄し、武庫を設置し、戰鬪の準備をさく／＼怠るなかりしが、西班牙相續問題は茲に

端なくも普佛戦争を挑發するの導火線とはなりぬ。

一千八百七十年、西班牙亂れ、國后エリサベス出奔せしを以て、改革黨の首領ブルム等相謀りて、其年の七月四日、ホーヘンツォルレルン家のレオボールドを迎立せんとす。ホーヘンツォルレルン家は普漏西王と縁戚たり。是に於て佛國の意に以爲らく、普西の二國合して一王家の配下に立つ、其勢遂に中古に於けるチャールス五世の時の如く、遂に南北より佛國を控制するに至らんと、佛國の人心大に動搖す。レオボールド亦自ら後難あらんことを恐れ、竟に西班牙王の候補者たるを辭す。然るに佛國政府は猶以て嫌らず、書を巴里駐劄の普公使に付し、普王は自後ホーヘンツォルレルン家の一族をして西班牙の王位に即かしめざるを保證せしめんとす。此の不法の要求何ぞ應答するの必要あらん、普王は斷然之を拒絶せり。是に於て佛使裝を束ねて本國に歸り、普使も亦巴里を辭して本國に歸り、一千七百七十年七月十九日を以て佛は普に向て開戦を布告せり。

此時に當りてナポレオン謂らく、埃太利は普漏西に破られて怨骨髄に徹す、必ず能く我に黨せん。南方獨逸諸邦、普國の強大を嫉視する久し、亦能く我を援けん。

以太利は我が恩恵によりて其獨立を致せり、必ず一臂我が舊交に報いん。以と結び、澳を束ね、南方獨逸と合して三面獨逸を合撃し、ベルリンを陥れ、ライン河上の地を略する易々たらんのみ。假令露西亞の普と提携するあるも、亦恐るゝに足らずと。是を以て先づ澳相ボイストと交渉して攻守同盟を結び、佛若し普と戦はば澳は佛を援けて側面より起り、澳若し普と争はば佛は背後より普に迫らんと。更に進んで伊太利に説き、南方獨逸諸邦に謀る。然るに伊國應せずして僅かに中立を約し、南方獨逸諸邦皆好を普魯西亞に通ず。ナポレオンの豫想宿計全く齟齬す。是れ實に普相ビスマルクが外交上の敏腕の致せる結果にして、ナポレオンが夢想せざりし所なり。且つ露西亞帝アレキサンダ、二世の母は普王キルヘルム一世の妹なるを以て、普露兩國は互に親族的關係あるのみならず、露國はクリミア戦争以來ナポレオンを怨むこと甚しく、澳人がポランド人を煽動して反亂を謀らしめたるより、澳人を悪むこと久し。故に露西亞は其間如何なる事情の存するも、普漏西と結托して、佛澳二國に當るべきは讒者を待たずして明かなり。

如斯ナポレオンは外交に於て既に普漏西に一籌を輸す、焉んぞ勝算あらんや。

況や其戰備又大に逕庭あるに於てをや。今兩軍の有様を對比するに、佛軍は概ね操練を缺き、部伍排列其の宜きを得ず、兵士は新式銃の用法を解せず、兵糧は一所に停滯して運搬其道を誤り、砲兵は險坂にありて迅速なる攻撃をなすを得ず、騎兵亦輕快の運動に出づる能はず。操縦の方、用兵の策、皆亦其度を失す。之を普軍が十年生聚、十年訓練、隊伍堂々規律整々たるに比すれば、勝敗の數未戰の前に決するものありしなり。

然れども歐洲の天地を震撼搖蕩したる龍驤虎踞の大活劇は、如斯にして千八百七十年八月四日普佛の境壤に於て演せられぬ。佛軍は別れて四となり、第一軍はマクマホン之に將としてストラスブルヒに向ひ、第二軍はドフネリ之を率ゐてピチに向ひ、第三、第四の兩軍はバゼヌイ、ラドラル二將軍の指揮の下に各路を分ちて各メッヅ、ティテムホーヘンに向ふ。總數卅三萬、ナポレオン皇帝自ら元帥たり。普軍は分れて三となり、右軍はスタインメッヅ之を帥ゐてコブレンツに向ひ、中軍はフリドリヒ、カルル親王之に將としてマインツに向ひ、左軍は皇太子之を率ゐてマンハイムに向ふ。總軍三十八萬國王キルヘルム一世元帥としてモルトケ將軍之に參謀

たり。而して普佛兩軍東西より各窘蹙接合して、茲に多年の怨憤を夷し、平素の力量を較せんとす。兩軍の過ぐる所旌旗空を掩ひ、三軍の士意氣斗牛を衝く。ナポレオンは獨逸軍の未だ其勢力を集注せざるに先ち、急に進みてライン河を涉り、南部獨逸に侵入し、以て北獨逸との聯絡を遮斷し、バイエルン、ウルトンブルヒの二王國バーテン、ヘッセの二王國を佛國に合從せしめんとせしが、佛軍の不整頓にして運動の遲緩なるより、其算籌全く豫想と反し、ラインの右岸は却て獨軍の先きに占領せる所となり、憤悶の極、空しくなすなくしてザールの谿間に滯留するもの二日、遂にメッツに退く。之に反し獨逸軍の進退敏活にして戰鬪に長せる戰初より常に攻撃的姿勢を取り、キッセンブルヒ、ウルト、ザレブルク等にて切りに佛軍を破り、長驅追撃ライン河を渡りて佛國に侵入し、將に國都に迫らんとするの勢あり。ナポレオン敗報の頻りに至り、大勢漸く決するに及で、鬱勃の情遣るなく、全佛軍を一處に會して、最後の決戰を試みんとせしも、普軍の防斷する所となりて成らず。又巴里に歸都して、再舉普軍に當らんとせしも、皇后ユゼンの諫止する所となりて果さず。策竭き術窮し、悵々焉として遂に元帥の職を轉し、バゼーヌをして己に代らしむ。

バゼーヌ孤軍奮鬪の益なきを知るや、シャーロンに於てマクマホンと會し、共に相輔けて獨軍と輸贏を決せんとせしが、敵の探知する所となりて又メッツに退陣す。マクマホンはツッメの危殆に陥るを聞くや、自ら手兵を携げて赴き援ひしも、是れ亦道にして普軍の爲めに襲撃せられ止むなく、セダンの城砦に入りて死力扞止す。ナポレオン深夜風雨に乘じ間道よりメッツを免れ、セダンに入る。是に於て日次勝ち誇れる普軍は恰も奔濤怒浪の如く寄せ來りて、呼噪砲撃止む時なく、マクマホン勇を鼓し兵を指揮して奮鬪すれども、間もなく傷を被りて退き、佛の砲兵健慄悍能く戰へども、衆寡敵せずして遂に潰散し、セダンは落々重圍の裡に陥る。佛將ウツベン、マクマホンに代りて軍を督し屢々普軍を撃却せしも、大厦一木の支ふる所にあらずして圍遂に解くべからず。セダンは硝烟慘愴孤城落日の非運を見るに至れり。ナポレオン陣頭に立ちて戰況を凝視すること多時、即ち喟然として歎じて曰く、嗚呼我れ一身の故を以て天下を誤る、願はくは一身を殺して億兆を毒するなけん」と。遂に親ら手書を裁して使を遣はし、之を普王に呈す。其書に曰く、寡人不佞にして三軍の前に死する能はず、願はくは劍を大王の脚下に置き腹心を布かん

と。是に於てセダン全く敵の手に落ち、ナポレオンは普軍に護送せられてカッセルのキルヘルスホエエに遷され、城兵八萬三千、皆虜となる。間もなくストラスブルヒ陥り、メッツ降り、巴里圍まれ、佛國は城下の盟をなすに及んで、ナポレオンは其妃ユゼンと共に英國に赴き、田野に退隱し、遠く政界と隔て、一千八百七十三年正月九日其地に逝く。

本篇は予の立案によりて小川市太郎君の執筆せる者なり

(高山林太郎)

(卅一年十二月)

古事記神代卷の神話及歴史

一 概論

古事記は、其編輯者たる太安萬侶の上表によりて知らるゝ如く、天武天皇の頃までは、全く口碑によりて傳はれる太古の傳説、及び歷朝の帝記也。凡て何れの邦にても、口碑傳説は正史として信憑し難きものなれば、我古事記の傳る所と雖も亦素より多少訛誤あらむ。然れども古事記其物にして本邦最古の史乘なる以上は、今日に於て何れの部分が正史の事實にして、又何れの部分が傳者の訛誤なるかを討覈せむは、殆ど爲し得べからざる事に屬す。是を以て予は是古事記を以て大體に於て古代の傳説を忠實に輯録せるものと假定し、是の如く假定したる古事記、殊に其神代卷が吾人に何事を訓ふるかを見むと欲す。

第一に起るは「神代卷は神話なる乎、又は歴史なる乎」てふ疑問なるべし。予は是に答へて神話歴史兩者の混淆なりと言はむ。而して如何なる方法によりて混淆せるかと言ふに、初めは純然たる神話に起り、漸次純然たる歴史に轉移せるものと

見む。兩者の分量に就いて言はゞ、須佐之男命の出雲行まで、即ち舊事本記の區劃に隨へば神祇本紀の終りまでは、神話の分量歴史よりも多く、其より以下は逐次歴史の分量多きを占め、遂に神武天皇に到りて純然たる歴史に遷れるを是る。而して是神話は如何なる種類の神話なるかと問はゞ、予は答て曰はむ、アリアン諸民族に見る如き天地開闢説に連れる太陽神話なりと。

然らば則ち須佐之男命以後の神代卷は、日本の紀元前史に關して何事を訓ふる乎、是れ次に來るべき最も重要な問題也。予は答へて、神代卷後半の訓ふる所は我日本民族の起原及び遷徙の状態なりと曰はむ。素よりは研究に大なる助力を與へたるは、前半に於ける神話及び傳説の比較研究也。是の比較研究の結果と後半に於ける歴史的事蹟とを結合せば、予は天孫降臨以前に於ける日本民族の消息略、推察するを得べきを想ふ。

予は本論に入るに先ちて、是推察の結果を提出せむ。曰く、出雲民族の祖先たる須佐之男命も、其後日向高千穂に降臨し給へる天孫民族も、其故郷を同じうす。而して是等民族が如何の土地を經由して是土に遷徙せりとするも、其最初の故郷は

南太平洋の多島洋中にあらむ。而して是民族が太平洋中に遷らざる前には、恐らくは東南亞細亞もしくは印度多島海に棲住せし事あらむと。

茲に一言を要する事あり、人種問題を規定するの預件は予が本論に於て關はれるもの以外にも是れあり、故に予は素より「然り」と斷言することを爲さざるべし。予は唯古事記の神話及び傳説の研究上より推度し得らるべき結論を述ぶるのみ。而して神話及び傳説の比較研究が、這般の問題を決定する上に於て最も重大なる價值を有することは、予の深く信する所也。

二 神代卷の神話

多くの國學者は、神代卷の前半をも其後半と等しく歴史として解釋せむと欲すと雖も、難解の極、牽強附會の臆説を以て相争ふに終るべく、所詮は徒勞に歸すべき也。若し是を神話として見むか、百疑立るに解けて、更に正史の考察上に幾多の有益なる資料を加へむ。蓋し古傳説中に於て歴史と神話と相混じて消長するの例は、何れの邦國に於ても普通に見る所也。此處に一個の嵐の神あり、彼處に一個の

勇士あらば、彼れの神話は此れの歴史に混同して、茲にそのづから半神話半歴史の傳説を形成するに到る。印度の吠陀にも是れあり、希臘のヘラクレウス、獨逸のグトルン、亦然り。東洋學者の或者は、釋迦の傳記も亦是種の傳説なりと説く。古事記神代卷も、亦須佐之男命に於て慥に是半神話半歴史の勇者を見る也。予を以て見れば、古事記の神話は伊弉諾伊弉册の二尊に到りて初めて其成形を具足せり。『天地初發の時高天原に成ませる』三神、國稚く浮脂の如くにして海月なす漂べる時、葦牙の如きものに因て成ませし二神、並に諸册二神以前の天神五代は、誰か得て是を知らむ。諸册二尊は天地の神なり。是れ後に到りて、伊弉册尊は黄泉國に到り、伊弉諾尊は御瀨によりて太陽の標號たる天照太神、太陰の標號たる月讀命、及び嵐の標號たる須佐之男命を生み給ひしにても知らるべし。然れども、能基呂島の降臨、及び大八洲諸島の循生の事を以て是を見れば、歴史的傳説既に初より神話中に混入せられし也。大八洲の循生、册尊の墓地を出雲伯岐の國境にありとせし事、並に黄泉比良坂の傳説の如きは、少くとも其地名は後人の附會せるものに相違無し。蓋し古事記の傳説を齎らしたるものは天孫民族なること勿論な

るを以て、是民族並に出雲民族の遷徙以前に於て、日本連島に關する是の如き知識の存すべき理由なければ也。

原始の二神を以て天地に配したるは、吾人希臘の神話に於て是を見る、即ちウラノス Uranos は天の神也、而して同時にガイア Gaia は地の神也。是二神の結婚によりて自餘の神を生ずるは、正に諸册二尊ありて後日月嵐の諸神生まれたると、其經行を等しうす。古事記によれば、伊弉册尊を追うて黄泉國に入りたる伊弉諾尊は、御瀨によりて多くの神を産みたり。而して最後に左の御目を洗ひて天照大御神を生み、右の御目を洗ひて月讀命を生み、御鼻を洗ひて須佐之男命を生み給へり。是時伊弉諾尊大に歎び、

吾れは御子生み、て生みの終りに三種の貴子得たりと詔給ひて、即がて其頸珠の玉の緒もゆらに取りゆらかして、天照大御神に賜ひて詔給はく、汝命は高天原を所知と事依し給ひき。次に、月讀命に詔給はく、汝命は夜の食國をしらせと事依し給ひき。次に、建速須佐之男命に詔給はく、汝命は海原をしらせと事依し給ひき。

御・藤によりて生み給へる多くの神にも優りて尊貴の子と稱へられしは即ち日月嵐の三者が自然現象中の最も著しく且勝れたるものなるが故なり。高天原を支配する天照大御神が日の神にして、夜の國を所知する月讀命が月の神なるは言を待たず。海原を國とする須佐之男命が嵐の神なることも暴風雨が凡て水に依りて成り立ち、且水に依りて最も明に現はるゝ事によりて知らるべし。

是の如く天地日月及び嵐を以て初まれるは神話の發達としては尤も自然の徑路なり。印度のデアウス *Dyaus*、是のデアウスと語原を同じうせる希臘のツィオス *Zeus* 及び是に父、即ちパテルを加へたる羅馬のジュピテル *Jupiter*、獨逸のチオ *Zeo* 又はチウ *Tiu*、匈奴のタングル *Tangeri*、蒙古のテングリ *Tengri*、支那の天、ホリネシアのタローア *Tarua*、是れ何れも初發の神にして而して何れも天の神也。而して是天の神に配して最高神の一對を成すものは、何れの神話に於ても地の神也。例せば印度のデアウシビタル *Dyaushitar* 即ち天父に配せらるゝものは、プリトキー *Prihivi* 即ち地の神也。希臘に於ては先に擧げたる如く、ウラノスに對するガイア、若しくはツィオスに對するデメテル *Demeter* 及びヘラ *Hera* (デメテルとヘラとは地母即ち

Ἡ γῆ μήτηρ の異名也) 亦何れも地の神也。其他の羅匈人のオプス *Ops* (又は *Terra mater*) 獨逸人のヘルター *Hertha*、フン人のウツカー *Ukka*、何れも天の神に對する地の神なること、猶ほ伊弉諾尊に對する伊弉册尊の如し。天地の神に次で最も崇敬せらるゝものは何れの國の神話にありても太陽なり。アポロン *Apollo* の希臘に於ける、ミトラ *Mithra* の波斯に於ける、バルドル *Baldur* の獨逸に於ける、ラ *Ra* 若しくはオシリス *Osiris* の埃及に於ける、又はインカ *Inka* のペルーに於ける、皆我が天照大神と均しく太陽の神也。

太陽の神に配せられて共に崇拜せらるゝものは月の神也。是二神は多く兄弟又は夫婦として思惟せらる。バビロニアに於てはパール *Paul* 日神に對するイシタル *Ishtar* (月神) あり。希臘に於てはヘリオス *Helios* (日神) に對するセレネ *Selene* (月神) あり。是れ何れも我邦に於ける天照大御神に對する月讀命に均しき也。天地日月に次で崇拜の對象となるものは嵐なり。是れ諸多の神話中、殊に印度の因陀羅に於て嵐神の著しきものを見る。是れ我邦の須佐之男命に相應する者也。太古の民族が擬人法によりて自然現象を説明せむとするに當り、先づ天地より日月

及び暴風雨に及びて、幾多の自然的神を想像するは、蓋し人性の本然に出づ。即ち是れ多くの民族に所謂神話の生起せる所以にして、我が諸冊二神及び其三貴子に關する傳説も、畢竟是神話に外ならざる也。勿論風土氣候の異なるに隨ひて、其の崇拜する所の神、及び其崇拜の程度のづから同じきを得ず。されば一の民族に於て重ぜらるゝもの、他の民族に於て必ずしも崇められず、各邦神話の特色畢竟是によりて生ずと雖も、其大體の性質に於ては略、相同じきを見る。殊に我邦に於ては、諸冊二尊の事、已に多少の歴史的事實によりて潤色せられたりと考へらるゝを以て、其形迹の詳細なるものに到ては、必ずしも神話を以て推測すべからざるものあるべし。已に述べたるが如く、於能基呂島に八尋殿を建て、美斗能麻具波比を爲し給ひし事、若しくは二尊の黄泉國に於ける會合の如きは、慥に歴史的事實の混入せるものなるべし。

然れども、伊弉諾尊の御瀬終りてより、天地の神話は、茲に其終りを告げ、太陽神話の眞面目は新に開發られぬ。即ち天照大御神と須佐男之命との軋轢は、神話として見れば、太陽と嵐との空中に其優劣を争ふなり。天照大御神が天岩戸に隠れ給

しひは、即ち嵐が一時天日を蔽へるなり。須佐之男命の「神夜良比」にやらはれ、天照御大神出生る時に高天原も葦原の中つ國も、のづから照明りたるは、是れ暴風退散して天日再び輝ける也。這般の事蹟、素より純然たる歴史的事實として附會し難きに非ず。然れども、是の如き歴史的事實が、太陽神話の中に調攝せられたるものとして見なば、尙ほ一層明白なるべき也。

日月の二神は、其天神伊弉諾尊の命に従ひて其位に就きぬ。獨り須佐男之命、其命に従はず、古事記是狀を叙して曰く

故各々依さし給へる命のまゝに、知ろしめす中に、速須佐男之命依さし給へる國を知らずて、八拳鬚胸前に至るまで啼きいさちき。其の泣き給ふ狀は、青山を枯山なす泣からし、河海は悉々に泣乾しき。是を以て、惡る神の音なひ、狹蠅なす皆湧きよるづの物の妖ひ、悉々に起りき。

是れ、風雨暴れすさびて、日星光を隠し、天地慘憺たる光景として見るべからざる乎。『青山を枯山なす泣からし』と云ひ、惡る神の音なひ、狹蠅なす皆湧く』と云へるもの人をして、狂飈四もに起りて、波濤洶湧せる状態を想起せしむること無き乎。伊弉

諾尊大に怒りて須佐男之命を放逐し給ふ。是に於て「然らば天照大御神に請ひて罷なむ」と言ひて、天に上る時、「山川悉に動み國土皆震ひし」と云ふもの即ち、一帯の黒雲、狂風に駕して、將に日座を犯さむとする狀に非ずや。是時天照大御神は是を見て大に驚き、

我那勢須佐之男命の上り來ます由は必ず善はしき心ならじ、我國を奪はむと欲するにこそと詔給ひて、即ち御髪を解き、御美豆羅に纏かして、左右の御美豆羅にも、右左の御手にも、各八尺勾瓊の五百津の美須麻流の珠を纏きもたして、曾比良には千入の鞆を負ひ、五百入の鞆を付け、また伊都の竹鞆を取佩かして、弓腹振立て、堅庭は向股に踏みなづみ、沫雪なす蹶散して、伊都の男建踏み建びて、待問ひ給はく、何故上りきませると問ひ給ひき。

是莊嚴偉大なる天照大御神の尊容は、即ち大日中天に赫灼として、將に襲來せむとする暴風黒雲に對するの狀に非ざる乎。「我那勢の上り來ます由は必ず善はしき心ならじ、我國を奪はむと欲するにこそ」と詔り給ひしは、暴風が高天原、即ち空中の主權を爭奪するの勢あるを示めせしものに非る乎。

天照大御神と須佐男之命と、互に其珠其劍とを交換し、「佐賀美にかみて吹き棄つる氣吹の狭霧」を以て交々幾多の神を生出せしは、即ち太陽と嵐と、互に其優勝を爭ひたる狀を形容したるものに非る乎。「氣吹の狭霧」とは、即ち雲霧茫茫として、天風に散し、日座容易に犯し難きの狀にあらざる乎。是の如くにして成れる神の名を見るに、天照大御神が「吹棄つる氣吹の狭霧」に成るものは、曰く天之苦卑能命、曰く天津日子根命、曰く活津日子根命、何れも日光に緣あり。是に反して須佐之男命の「吹棄つる氣吹の狭霧」に成れるものは、曰く多紀里毘賣命、又は奥津島比賣命、曰く市寸鳥比賣命、曰く多岐津比賣命、何れも嵐に緣あり。「タギリ」と云ひ、「タツキ」と云ひ、海波の荒るゝ狀ならずや。是の如くにして、須佐男之命は「我心清明故に我が生めりし子手弱女を得つ」と揚言し、「我勝ちぬ」と言ひて、「勝佐備に天照大御神の營田の阿離ち、溝埋め、又其大嘗聞しめす殿に屎まり散し、服屋の頂を穿ちて天の斑馬を剝き入れ、遂に天照大御神をして「見畏みて天の石屋戸を開て刺にせり坐」まさせめたるは、是れ嵐の神なる須佐男之命が、遂に太陽の神なる天照大御神を、其暴風黒雲の中に掩蔽したるの狀として見るべからざる乎。古事記是を叙して曰く

爾高天原皆暗く、葦原中つ國悉々に闇し。此に因て常夜往く、於是萬の神のおとなひは、狹蠅なす皆わきよるづの妖悉々に發りき。
是れ暴風雨の爲に、六合暗澹たるの狀にあらざる乎。而して天の安河原に於ける「神つどひ」の結果として、天照大御神再び岩屋戸を出てたる時、高天原も葦原の中つ國もおのづから照明られたるは、先にも言へる如く日光再び表はれて天地其明を回復したるの狀なると言ふまでも無し。

是の如きは太陽神話として見たる天照大御神と須佐男之命との争ひなり。是神話の内容となれる事柄の中には、歴史上の事實素より少からざるべし。其大躰に就いて見るも、例へば天照大御神に相當せる君主と、須佐男之命と相當せる一個の叛臣又は外敵との間に、權力上の争ありて、一時前者の敗北に歸せるを、其臣下の力にて遂に敵者を退けて流竄に處せりと云ふが如きは、極めて有り得べき事なるべし。然れども更に是の如き事實が當時は民族の間に流布せる神話と結合し、茲に殆ど完全なる一部の太陽神話を形成せりと見れば、太古傳説の解説法としては寧ろ遙に適切なるに非ずや。是の如き例は決して古事記にのみ存するにあらず、印

度希臘、獨逸等到處の古代史に存するを知らば、諸冊二尊及び天の岩戸の事蹟が、半神話半歴史の傳説なること、蓋し疑を容れざるべし。

遮莫予を以て見れば、天地及び日月及び最も重要なる自然現象に關する神話は、須佐之男命の出雲行に到りて茲に一段落を告げたり、高天原の神話は、轉じて葦原の中つ國の歴史となりぬ。是間の轉移の徑行、必ずしも劃一にして論すべからずと雖も、兎に角神話の分子漸く減退して、歴史の畛域に近けるは、最も明なる事實なりとす。然らば則ち、箇中日本民族の歴史に關して、微證べきもの果して如何。

三 日本民族の起原及び遷徙

今試に神代卷の後半より歴史上の事實として思惟し得べきものを擧ぐれば、概ね左の如くならむ。

須佐之男命流されて出雲の國に到り、其地の土豪を窮厄の中に救ひて其娘を納れ、茲に出雲民族の祖先となり給ひぬ。大國主命其後を享て威遠近に振ふ。是時須佐之男命の本國に於ける天照大御神は、豐葦原の瑞穂の國を以て天孫の司配す

べき國土となし、其御子天忍穗耳命を降臨せしめむとす。然れども瑞穗の國は、土豪到る處に割據し、殊に出雲には須佐之男命の一族威勢甚だ盛なるを見、先づ使を遣して招ぎ降らしむ。然れども其第一回の使者天の菩日神及び第二回の使者天若日子等、皆却て大國主命に従ひて復命せず。第三回の使者雉名鳴女は天若日子に射殺せらる。是に於て天照大御神は建御雷神をして大船に乗じて征討せしむ。大國主命及び其子弟皆是神の威風に恐れ、戰はずして、或は敗北し或は降服す。建御雷神乃ち豊葦原の瑞穗の國戡定の事を復命す。是に於てか天忍穗耳命の子日子番邇々藝命を將とし、天兒屋命等の「五伴緒」等を副とし、「天の石位を離れ、天の八重多那雲を押分て、伊都能知和岐和岐豆、天の浮橋に宇岐じまりとり立して、筑紫日向の高千穂の久土布流多氣に天降坐し」ぬ。是れ史に所謂天孫降臨の事蹟也。

日本民族の太古史に於ける最も重要な問題茲に横はる、即ち出雲民族及び天孫民族の故郷は何處なる乎是也。是れ古事記の讀者が當然提起すべき問題也。然るに從來我邦の國學者は、是書載する所を以て神聖犯すべからずとなし、吾人に向て其神話的傳説をも文字通りに信憑すべしと訓へたりと雖も、是の如きは我神

聖なる國跡に關する誤謬の思想に本ける者也。吾人の眼より見れば、是の如き淺薄なる根據の上に我神聖なる國跡を説かむとするものこそ却て大に不敬なりと云ふべけれ。

兎にも角にも出雲民族及び天孫民族の故郷は何處なる乎、是れ問題なり。高天原や、天の石位や、又は天の浮橋や、皆是れ神話上の名稱なるを以て、地理的に討究するの便無し。吾人は唯上來述べたる神話及び歴史によりて推察するの外無き也。乞ふ左に簡單に予が研究の結果を摘録せむ。

予が先づ肯定せむと欲するは、出雲民族も天孫民族も共に、其起原を海洋中に有すること、是也。夫れ古事記の神話は、淡能基呂島の成立と云ひ、伊弉諾尊の御滌と云ひ、菟と和邇の話と云ひ、海に關するもの甚だ多し。其神の名にも海に縁あるもの少からず、須佐之男命は海原を知らず神也。或は大綿津見神と云ひ、或は水戸神と云ひ、或は速那藝神、洙那美神と云ひ、或は天水分神、國水分神と云ひ、其他鳥の石楠船神、底津綿津見神、中津及び上津綿津見神、奥津宮、中津宮、邊津宮等、何れも島嶼海洋に關せざるは無し。是れ大陸民族の神話に有り得べからざる事なり。又其歴史

によれば、航海盛に行はれたるを以て見るも、是事益明なるべし。須佐之男命の出雲に到るや、海に航せしこと勿論なり。而して先にも述べたる如く其本國より出雲に使者の往復一再のみならず、最後に天孫降臨の時に舟師を用ひしこと疑無し。加ふるに神武東征以後、日本武の北征、仲哀神功の熊襲三韓の征伐等、何れも主として水路によりしを思はゞ、航海の術は已に太古より開けたりと見ざるべからず。航海の術は海洋民族に於て初めて其發達を見るべきなり。何れの點より見るも、出雲民族及び天孫民族は其起原を海洋中に有せしこと蓋し疑ふべからざる也。既に其故郷の海洋中にあることにして疑ふべからずとせば、そは何れの海洋中にある乎、是れ亦問題也。既に概論中に述べたるが如く、予の推察によれば、是最初の故郷は南太平洋に存せるが如し。今是推察の根據を擧ぐれば次の如し。

(一) 潮流 太古の民族は如何に航海術を知れりとて、潮流に逆行して植民もしくは征服すること無し。されば日本民族の遷徙も亦潮流を利用せりと見るを妥當とすべし。地誌を案するに、南方より日本に向へるもの、所謂日本海流あり。其起點をフィリピン群島の北部に發し、臺灣、琉球諸島の東部を経て北流し、琉球の南北緯

二十六度に到りて本流支流の二派に分る。本流は東北に轉向して日本の九州四國本土を洗ひ、支流は九州の西岸五島より對島の東に沿て日本海を東北に横ざる。所謂對島海流是れ也。想ふに日本民族の祖先が或は出雲に着し、或は九州に着せるものは日本海流に乗じたるに非ざる乎。

(二) 神代卷に北方の自然現象少き事。神代卷の傳説を持ち來れるもの、若し西は又は北方の人種ならば、必ず北方の自然現象を其中に包含せざるべからず。然れども古事記には天照大御神の須佐之男命の上天を待つ所に『沫雪』の一語あるの外、絶て是れ無し。却て和邇、海霧等の南方の物象多し。是れ亦日本民族の南方より來れるの一證にあらざる乎。

(三) ポリネシアの神話及び傳説と古事記と類似多き事。日本民族を以て、南方より日本海流に駕して是土に遷徙せるものなりとせば、其發足點は何處なる乎、是に於て神話及び傳説の比較研究の必要を見る。

ブライデル氏の告ぐる所のポリネシアの世界創造説に曰く、世界の初には天と海とありて地無し、天の神タンゴラ、即ち一片の土塊を天より下せしに凝て地と

なり、漸次擴張す(ブライテレル宗教 哲學第一卷四五〇)。又曰く、天神タンゴラ *Tangora* 天より絲を垂れて海底の地を釣る、然れども絲常に半ばにして切斷す。故にポリネシアの群島成れり(上全)。前者は天の瓊牙の滴りによりて成れる、淡能基呂島の傳説に似、後者は隱岐風土記にある本島と隱岐との接絲斷絶せりととの話に似たらずや。是の如く、其神誌の始めに、地質上の發達を混淆せるものは、ポリネシアと我邦とあるのみ。
(Peschel, Physische Erdkunde S. 369)

南太平洋のマンガリア群島の最古の傳説なりとして、キリアム・ギル氏の告ぐる所によれば、天の神なるワテア *Vatea* は、一個の大なる眼を有す。其一は天上に輝きて太陽と呼ばれ、他の一は暗黒界 *Avaihi* を照して月と稱せらる(Gil, Myths of N. Pacific, p. 40)。是れ伊弉諾尊の左右の眼より日月の生れたると酷似せるに非ずや。ギル氏は又日月の蝕に關して須佐之男命が天照大御神を惱ませると多少相似たる神話を掲げたり(Ibid. p. 47)。

其他傳説に於てポリネシアのと日本のと相似たるもの二三あるを見る。例へばギル氏が擧げたるチナ *Tina* とイナ *Ina* との話は、舊事記に傳へたる大物主神と

王依媛との話後に三輪神社の縁起となれり(に似、又ラター王 *Tata* が海上にて種々の大難に遇ふて能く是を遁れし話は、日本の俗間に傳はれるものと甚だ近く、又ブライデレル氏が擧げたる)タンゴラが善兒を賞し惡兒を罰したる話は、八十神と大國主命と菟との話と多少似たるを見る。是の如き類似は、是等南太平洋の古民族と日本民族との間に多少の因縁あるを證せるものに非る乎。

(四) 印度吠陀の神話と古事記の神話との類似が是設想によりて説明せられ得べき事。印度の神話と古事記の神話との間に類似の點ある事は、現今日本にありても有識なる學者の認むる所也。例へば諾冊二尊のヤマ、ヤミに於けるが如く、又須佐男之命の因陀羅に於けるが如き、是れ也。且つ他方より考ふれば、印度の如き熱國なればこそ嵐の神なる因陀羅を崇拜する因縁もあらめ、氣候和平なる南洋中の島嶼に住せる民族にとりては、是の如き嵐を経験する事さへも稀なるべく、隨て崇拜する理も無かるべし。されば須佐男之命によりて代表せらるゝ嵐の神を印度に起原せりと想像するも、強ちに理無きに非るべし。若し印度と日本とは神話上に於て同一系統を有すとせば、次に起るべき問題は、是二者を媒介せる第三者は

何處にありやにあり。日本民族の起原を南太平洋に存すとせる予の設想は、是問題に向て最も明瞭なる解釋を與ふる也。其要點を擧ぐれば左の如し。

人類學者ミルレル氏が研究の結果によれば、ポリネシア人の故郷は亞細亞大陸の西南部にあり。それより印度多島海に蔓延し、更に遙に東南を指して今日の所謂サモア及びトンガ群島に殖民し、是二群島を中心としてポリネシアの全躰に繁殖せしならむ (Miller, Allgemeine Ethnologie S. 325 f.)。若しミルレル氏の説にして信に信憑すべきものならば、ポリネシア人は、恐らくは其の東南亞細亞に在りし時、印度アリアン人もしくは印度アリアン人に接觸して其の追ふ所となりたるドラビダ人より吠陀の神話を收容せしならむ。是の如くにして、日本民族の神話に吠陀の分子を包含することを認むるは、寧ろ自然の數のみ。印度學者ホブキンス氏の吾人に告ぐる所によれば、ドラビダ人がベラーペンヌス (Bella Pennu) とタリーリ (Tari) に關する傳説は、伊弉册尊が黄泉國より伊弉諾尊を追ふ一條に酷似するを認む。防禦の爲に物を投じ、又其人民に死あらしめむと咀ひしが如き、彼此殆ど符契を合するが如し (Hopkins, Religion of India, pp. 529-530) 若しポリネシア人が亞細亞の故郷に於てドラビダ

人と交通し、吠陀の神話と共にペラペンヌスの傳説を受け取り、自己の神話と共に是を保存したりしとすれば、古事記神話の説明も一層明瞭となるべき也。然れども是の如きは極めて貧少なる資材によりて推察したるに過ぎず、加ふるに言語上の系統等より見れば、恐らくは幾多の反證を擧げ得べきやも測られず、故に暫く予が一家の設想として學者の參考に供すべきのみ。

是を要するに、予が古事記研究の結果として推察する所によれば、日本民族の起原は今のシツフル群島、即ちサモア、トンガ、群島の邊りならむか。是等群島は南緯十四度より二十度、東經百六十八度より百七十度の間に延蔓す。若しミルレル氏の説を證權とすれば、東南亞細亞のチュニアン人種一派は、印度多島海を経て是に移り、是を中心として全ポリネシアより北方に遷移せるもの也。即ち所謂北太平洋の大潮流に乗じて、ミクロネシアよりフリキピンに到り、更に日本海流に駕して是土に遷徙せしものに非る乎。若し夫れ古事記傳ふる所の出雲民族並に天孫民族は、既に是南太平洋の故郷を離れて今のフトリ群島の北部に留存し、更に其殖民地を北方に求めしや、亦想像し得べき也。

ジャンヌ・ダルク

一 はしがき

凡そ國家の興亡に際しては、古より奇しき事のいと多かり。是を説くもの或は神佛の威靈と云ふ或は鬼神の魔力など稱ふるめれど、所詮は時運のおのづからなる勢に外ならざるべきか。さるにてもジャンヌ・ダルクの事蹟こそ、いとく怪しき事の限りなれ。

今を去る四百年前、佛蘭西國は英吉利國と事ありて干戈を交へしが、佛國の武運や拙かりけむ、連戦連敗土地侵され、城壘陥れられ、國王は邊陲に蒙塵し、誰ありて興復の偉業に當るものあらざりき。今は佛軍の唯一の頼みとせしオルレアン城も存亡旦夕に逼り、さしも雄大なりし是の國の社稷も、今を限りとぞ見えにける。若し此時に當りてジャンヌ・ダルク微りせば、佛蘭西は永く英吉利の屬國と成り果てしならむ。

而してジャンヌ・ダルクは貴族にもあらず、武士にもあらず、又男子にもあらず、教育

もなく門閥もなく、渠が其大事に當るまでに、佛蘭西中に其家族隣人の外は、何人も其名をだに知らざりし一女子にして、其年さへも僅に十八の妙齡なりき。斯く言ひたるのみにては、誰れかそを實なりとすべき。されど佛蘭西國の運命を一身に擔ひて、回天の偉業を遂げしものは、實にこの十八歳の一少女、ジャンヌ・ダルクなりしなり。さらばジャンヌ・ダルクは如何なる人ぞ。

二 おひたち

ジャンヌ・ダルクの生れたるは、佛蘭西の片田舎ドムレミ、とて、羊飼の多く住へる村なり。時は一千四百十二年の正月にして、英佛の戦方に關する頃なりき。其父母は正直なる農夫にして、貧苦の中にも其子の養育に心を盡しけり、ジャンヌは十三歳までは、羊の群の見張りに何事もなく田舎の一少女として暮しにき。

然るに奇しくも又驚くべきことこそ、渠の身の上に起りたれ。或夏の日のことなりき。渠れ常の如く後園にありし時、寺院の方に眩き光の見ゆると同時に、何處ともなく聲ありて『ジャンヌよ、善良なれ、怠りなく寺院に詣てよ』と告げぬ。渠れはい

たく驚きて四邊を見廻せば、遙かあなたの空より、三人の聖者無数の天使に圍まれて、ジャンヌの傍に來り、親しく渠と種々の物語をなしたる末、「ジャンヌよ、汝は佛蘭西の難に赴かざるべからず」と云ひければ、渠は恐れ且驚きながら答へぬ。「聖者よ、妾は助けなき愚なる田舎娘にて侍り。馬に騎る事だにかなはぬ身にて、如何てかざる事のあらるべき」。聖者は「否とよ、憂ふる勿れ、唯將軍ロベールの下に行け」と告げぬ。ロベールは佛軍の一方の大將にてありけるなり。

ジャンヌは是時より屢々かゝる幻影を目撃し、聖者は其度毎に「佛蘭西の難に赴き、將軍ロベールに行け」と渠に告ぐ。渠は初めの内は唯事の奇異なるに思ひ惑ひしが、追々其心に一種の自信を喚び起し、終には母國の危難を救ふをば、己れの天職の様に確信するに到りぬ。父母は其子の様子の年毎に異様になりまさるを見て、さまざまに諫めしかど其効もなく、果ては狂氣じみたる行ひをさへ現はしぬ。

「オルレアン城危し」との警報は、是時渠の耳に達しぬ。ジャンヌは「時到れり、時到れり」と叫びつゝ、其の父母の呆れて止むるを聞かず、單身にして、ヲ、クルユールと云へる所に陣取れる將軍ロベールの下に急ぎぬ。十七歳の少女が赤手を揮つて其國

難を鎮めむと望む。渠を知れる人、何れも渠を狂したりと云ひしは、實に理なりけり。

三 オルレアン城の救助

今や佛蘭西國の運命はオルレアン城の上に懸りたり。是城にして陥らば佛軍は其最後の根據を失ひて、佛蘭西の社稷は永く其祀りを絶たむ。されど大厦の覆らむとするや、一木の支へ得べきにあらず。所在の將士意氣沮喪し、其敗軍を擁して徒に憤慨の日を送りける。

將軍ロベールはヲ、クルユールと云へる所にあり、一日佛國の前途を想ひて憂慮に沈みける折柄、容貌秀麗なる一少女鄙びたる衣裳を着けたるが、佛蘭西の救ひの爲に來れりと告ぐ。これぞジャンヌ・ダルクなりける。

將軍は飽く迄ジャンヌを一狂女なりと思へり。引見して試に其故を問へば「妾は神の示現によりて、佛國の危きを救はむが爲に來れるなり」と答ふ。其舉止動作は強ちに狂人とも見えざれば、重ねて其の求むる所如何と問へば、ジャンヌは次の如く

答へぬ。

將軍よ、妾の言を信せよ、神は數年前より妾の前に現はれて、幾度となく「佛蘭西國の危難に赴き、是國のまことの王なるシャルルを助けよ」と告げ給ひぬ。將軍願はくは、妾に假すに一隊の兵士を以てせよ。妾はそを率ゐて直にオルレアンの城の圍を解かむ、將軍疑ふなかれ、是れ神の命する所なり。

熱誠面に顯れ、一種の神采人の心を壓して、さながら古の豫言者もかくやありけむと思はるゝばかりなりければ、將軍をはじめ並居る人々は、そゝろに畏敬の情をぞ起しける。されど教育なく門地なき牧羊者の小娘子の身を以て、よしや神通の威力を具へたればとて、今日の危機を如何かすべき。雲の如き英將猛卒も敗衄の餘弊を如何ともするなき今の時、ジャンヌ何者なれば、かくは神命を負うてこの不敵の言を爲すや。言ひおはせねども、誰しも斯く思はざるは無かりき。されど苦しき時の神頼み、百方計盡きて望失せたる時は、甲斐なしと知りつゝも萬一の僥倖を頼みて、人の助けを求むる、亦已み難き人情なり。將軍ロベールもジャンヌの言を信せりとはあらねども、言はゞ物の試しにとて、言ふがまゝに一隊の兵士を貸し與へ

且曰ひけらく「少女よ行け、汝の身の上に何事の起るも予の知る所に非ず」。

一千八百二十九年五月五日、ジャンヌは軍装して馬に跨り、將軍ロベールが貸し與へたる一隊の兵士を率ゐて、オルレアンの救ひに赴きぬ。道にシノンと云へる村を過ぎりて、國王シャルル七世の恰も是村に留まれるに遇ひぬ。シャルルはジャンヌの不測なる力あるを聞き、其實否を試みむと欲し、一從者と其服を換へ、自らは王座遙に從者の群に入り、而して後ジャンヌを引見せり。ジャンヌは神の聲に導かれ、直にシャルルの前に跪きぬ。シャルルは「予は王にあらず」と答へ、かの從者の王座に着けるを指して「シャルル王こそ彼處にお在するなれ」と告げぬ。ジャンヌは頭を打振りて曰へらく「否、佛蘭西の眞の王たらむもの、陛下を措て何處にか求むべき。是れ神の命なり」と。王はジャンヌに其名と何の爲めに來れるかと問ひぬ。ジャンヌ答へて曰く「賢明なる王よ、妾の名はジャンヌ。陛下の戴冠式をランにて行はむが爲に神の送り給へる處女にて侍り」と。ランは歴代の佛蘭西王が戴冠式を行ふ所なり、されど多年の戦亂の爲めに英軍の手に入り、シャルル七世は尙ほ未だ是大禮を行はせ給はざりしなり。

ジャンヌの評利は日を追うて遠近に傳はりぬ。或は狂と詆り、或は聖と稱へ、褒貶の聲一時に喧しかりき。されどドムレミの一少女が佛蘭西國の救ひの爲に起てしてふ事は、均しく國民の耳目を驚かせり。僧侶の或者はジャンヌの信仰を試みしが、何れも其の燃ゆるが如き熱誠に感激して、神の威靈の眞に其身に宿れるを思ひぬ。加ふるに其頃佛蘭西には、『佛蘭西は一女子に救はるゝの時あるべし』との流言、久しき前より傳はりければ、その一女子こそジャンヌならめとの信心は、何時しか多數國民の胸中に起りぬ。

さるにてもジャンヌは、如何にしてオルレアン城の圍を解くべきか。是れ萬人の均しく危み且憂へし所なり。

ジャンヌの叢爾たる小軍隊は、當時英佛兩軍の規律なきに比して、實に驚くべき整正と純潔とを保ちたり。其先鋒には常に僧侶あり、嚙腕たる音楽につれて壯快幽玄なる讃歌を誦し、ジャンヌの統率せる中軍は、肅々として其後に繼ぐ。ジャンヌ自らは白馬に跨り、長劍を横へ、銀甲の燦爛たるを着け、威風あたりを拂うてぞ見えにける。部下の兵士は、何れも先には輕侮の念を挟みしが、何時しか敬仰の情に打たれ、是

少女の爲に、喜んで身命を抛たんと誓はざるは無かりけり。

同じ年の四月の末日、ジャンヌはオルレアン城の下に達したり。所在の將士風を望みて相會し、愈々五月一日を以て英軍攻撃に着手せり。は一軍は道にジャンヌの故郷なるドムレミの傍を通過せしが、渠は其舊友なる村の娘等と會し、事もなげに嬉戯して一夕を費やせしとぞ。あはれ佛蘭西國の教主も、干戈匆忙の間に一村娘となりて、牧羊犁耨の往日をしるべるは、如何にあやしき計りに旨味深き事ならずや。若し豫めジャンヌにして、將に來たらむとする悲惨なる運命を知りたらんには、其腸如何に九回したるべき。

オルレアン城の攻撃は實に目覺ましきものなりき。援軍の爲にとて來れる將士の中には、ジャンヌを戴くを好まざるもの少からざりしが、一度びジャンヌの働きを見たる後は、何人も渠が非凡の威力を信せざるは無かりき。ジャンヌの身戰場に立つや、一挺の軍旗を掲げたるのみ。未だ嘗て劍を抜きて人を斬りたる事あらず。渠は自ら公言して曰く、『吾れは是れ神の天命によりて此國の危難を救はむが爲に、是世に出でたるなり。吾前には及も矢も其力を失ふべし。是れ我體は是世の物

に造られざればなり」と。かくて渠れ戦に臨むや、常に全軍に先ち、矢石亂飛の間を馳騁し、叱咤督勵到らざる所なし。渠に從へる前列の兵士、敵丸に中りて數十百人立地に仆るゝが中に、奇しき哉、ジャンヌは身一丸一矢を受けず、悠然として干戈の間を周旋する様は、眞に人業ならず見えにけり。

英吉利軍が七ヶ月の間續けたるオルレアン城の包圍は、ジャンヌ十日にして是を潰やせり。是のめざましき勝利は、素より部下將士の忠烈に因ると雖ども、是を統率し鼓舞したるジャンヌの勢力、其主因なること、掩ふべくもあらず。實に是れ驚くべき勝利なりき。當時佛蘭西は國を擧げて英吉利軍の蹂躪に委ね、一向屏息して其鋒を避けむことを務めたり。オルレアン城中に圍まれたる佛の將士だに、ジャンヌの援軍に重きを置かず、是を包圍にして、今後一月も續きたらむには、何人も苦節を維持し得べしとは思はざりき。ジャンヌが一擧して得たる是勝利は、敵も味方も奇蹟の如く驚けり。是に於てジャンヌの名は驚駭と恐怖とを以て喧傳せられ、一時絶望の淵に沈みたる佛軍の士氣は、打萎れたる草木に春雨の漲げるが如く、忽ち一道希望の光に打たれ、猛然として振ひ起れり。凡そ百年の間、向ふ所敵無かりし英軍

も、是より後勢頓に挫け、さながら颯颯の日光に消ゆるが如く、漸く國外に退去しぬ。七月の中頃、シャルル七世は凱歌歡呼の中に、ジャンヌを伴ひてランに入り、盛なる戴冠式を行ひぬ。ジャンヌが天より受けし使命は、是の言の如く、茲に其の全きを告げぬ。

四 最後

扱ても佛蘭西國の救主、シャルル王の恩人、ジャンヌ・ダルクの最期こそ痛はしけれ。渠は古今に稀なる、かゝる奇功を奏したる後、英吉利軍の手に渡りて火焚の刑に處せられたり。

その由來如何にと尋ぬるに、オルレアン城の圍みを解き、シャルル王の戴冠式に臨みたる後、ジャンヌは自ら渠が天より受けたる使命の終りを告げたるを宣言し、王に乞うて再びドムレミの田舎に歸らむことを求めぬ。されど英佛の戦ひ尙ほ未だ熄まず、佛蘭西が渠を要するの時機未だ去らざるの故を以て、其願ひは許されざりき。時恰もコムピュニと云へる城尙ほ英軍の圍を受けしかば、ジャンヌは王命により援軍を帥りて城内に投じたり。或日の戦ひにジャンヌは城を出で、散々に敵を惱

まじ、凱歌を揚げて引還さむとしけるに、こは如何に、城門の懸橋は既に撤去せられ、ジャンヌは其の僅なる手勢と共に城外に残され、遂に英軍の爲に擒にせられぬ。斯く城内の佛軍がジャンヌの歸路を絶ちたるは、偶然の錯誤なるか、又は叛逆人の所爲なるか、其事實今に至るも定かならず。されどジャンヌは其の以前より、自己の運命を覺りしものゝ如かりき。そは『聖ヨハチの祭日の前には、己れは必ず敵軍に擒にせらるべし』とは、渠が常に知人に物語りし所なり。唯何故に、又如何にして擒にせらるゝかは、渠れ自ら知らずと云へりしとぞ。又生擒せらるる數日前、教會の祈禱の後、渠は周圍の人に公言して曰ひけらく、『吾が親愛なる朋友よ、是城内に吾を敵に賣るものあらむ。斯くて吾は死に處せらるべし。されば友よ、吾が爲に神に禱れよ』と。恐らくはコムピ、ニの城内に叛逆人ありて、故らにジャンヌを敵中に陥れしならむ。

ジャンヌ既に敵の手に渡りぬ。げに此一少女ありてオルレアンの圍みを解きたればこそ、英軍の勢頓挫して振はざるに到りしなれ。ジャンヌは英國人が其肉を食ふも飽き足らずとする所なり。是に於て形ばかりの軍法會議は開かれ、直に火

焚の刑に處せられたり。是れ一千四百三十一年五月三十日にして、處はルアンと云へる市、ジャンヌの年は僅に十九なりき。

これ不幸なる女丈夫ジャンヌ・ダルクの生涯なり。歴史は永く、人物は多しと雖も、田舎の一少女子を以て、かゝる偉大なる功業事蹟を止めしもの、他に何處に求むべきや。ジャンヌは佛蘭西を救ひて其天の命を全うせり。されば其二十年の短生涯は、やがて佛國千年の社稷にあらずや。ジャンヌまた以て瞑すべきなり。

(三十二年十二月)

ハイチが事

◎抒情詩人としてはゲテにも劣るまじきハイチが、詩人に就いての述懐こそ面白けれ。かつて以太利に旅行してマレンゴの戦場を過りし時、彼は奈破翁の大勝利を憶ひ起して喟然として歎息し、其身が一個の詩人と稱せられむよりは、寧ろ人道の義戦に仆れたる兵士たらしむことを望みたりき。彼れ其の「Tullien」中に是のころを述べて曰く、「詩は予にとりて言ふに足らざるのみ、人若し予に與ふべき名譽あらば、願くは予が柩の上に劍を置け。そは予は人道の自由の爲に戦ひたる勇敢なる一兵士なりければなり」と。

◎ハイチが諷刺は人のよく知れる所なるが、「ハルツ旅行記」中にゲッチングンを証れる一段の如きは其の最も奇矯なる者の一なるべし。彼は是の府の住民を残りなく嘲りて最後に左の如き言葉を添えたり。ゲッチングンの婦人の足の大なることは昔よりの言ひ傳へなれども、予は此の邪説を正さむが爲に少からず苦心せり。或は圖書館に入りて所藏の珍書を探索し、或はエンデル街に立ちて通行の婦

人を観察し、ありとあらゆる手段を盡したる後、辛やくにして研究の結果を得たり。其目次は(一)足の概論、(二)舊世界に於ける足、(三)象の足、(四)ゲッチングン婦人の足、(五)最後に能ふべくむば、ゲッチングン婦人の足の實物大の銅版を附する積りなり、云々。

言ふまでも無く、是の嘲罵はゲッチングン府民を甚しく怒らしめたりき。

◎英吉利も亦ハイチの嘲罵を免れ得ざりき。曰く、予は英吉利を好まず、其處には、石炭の煙と英吉利人とあればなりと。

◎ゲッチングン大學教授ザルフェルドと云ふ人、奈破翁一世を手痛く攻撃せしことありき。奈破翁崇拜家たるハイチは一矢酬ゆる所なかるべからず。

即ち曰く「奈破翁の三大反對家の齊しく悲惨なる最後を遂げたるは奇ならずや。カッスルリィグは自ら其喉を突けり、ルイ十八世は其王位の上に仆れたり、大學教授ザルフェルドは依然としてゲッチングン大學の教授たり」と。

◎ハイチとゲテとの會談は人よく知る所なり。「ワイマルの麥酒はげに勝れたるものなりき」と伯林なる友に言送りたる外、一言もゲテに就て言ふ所なかりしなり。彼が其後間もなく其友に送りたる書翰は以て是間の消息を窺ふに足るべし。

曰く、「ゲイテは現世の寵兒なり、現世の中に最高の幸福を求めむとする人なり、彼は理想を解せず、争てか其の中に生くるを得むや。是に反して予は飽く迄理想の子なり、現世よりも理想の世を重ずる人なり。斯かる性格を有する二人の並び立たむこと果して望み得べきことなりや。」

◎ハイチがゲイテを誤解したるが如く、ゲイテも亦ハイチを誤解したりき。「ハイチは愛の外の凡ての物を有せり」と評したるゲイテは、是の諷刺家の腦中に如何なる情火を藏めしかを知らざりき。

(三十三年六月)

東北物語

◎東北と一口に言ふけれども、其の習慣、氣風、言語は素より、其の根本たる人種までも非常に懸隔せる幾多の異分子の是の一語の中に含まれて居ることを忘れてはならぬ。我輩の見る所によれば、東北は一個の地理的名辭の外に多くの特別の意味を有つて居ない。事業や黨派の上で東北人が互ひ一致せねばならぬ様に思ふのは大きな間違である。

◎先づ其の氣風の上から言ふならば、會津と福島とは同じ岩代の國でも長崎と蝦夷ほどの相違があるてはないが。山形縣と云ふは決して高知縣と云ふの類ひでない、其中の米澤と山形と庄内との間に何處に類似の點があるか。仙臺と岩手とは隣國でありながら其の氣風は互に百里も隔たつて居る。一言すれば、九州は九州の氣風があり、四國には四國の特色があるが、東北には別に東北の特質として見るべきものがないのである。

◎會津の人は朴訥にして堅實の氣風を有つて居る。が、福島地方の人には全く商賣人の風がある。是れは伊達、信夫地方が昔より養蠶の土地であつた爲と、一方の氣風を作るべき大藩の無かつた爲であらうか。二本松人は會津と福島とを折衷した様な人である。

◎東北で會津の氣風に近いのは檜山越一つ隔たつた米澤であらう。然しながら是の米澤は鷹山公以來勸業が土人の間に行はれた餘風として、朴訥の外に一分の狡味がある。維新の際の去就は是の地方人士の弱點を示して居る。

◎山形、新庄は米澤のやゝ變化したもので、兎角はコセツイテ狡猾な風も見えぬ

ては無いが、概しては朴訥を特色として居る。庄内は米澤、新庄と同國でありながら、其地理的分界の全て別國を爲して居る所から、却て越後、秋田の氣風に近い處がある。質朴剛毅の風は十分にあるが、因循姑息と偏僻嫉妬は其の明かな弱點だ。

◎仙臺は流石六十二萬石の領地だけに、何處となく大様な所があるが、其の士風は決して貴むべきものではない。イヤに尊大で、可なり法螺を吹くことに上手で、そして狡猾な所もないではない。勿論是は弱點であるが、大藩の士風としては遙かに會津、庄内の方が優つて居る。岩手、秋田の風も仙臺よりは好い所がある。

◎岩手と秋田とは妙に似た氣風を持つて居る。眞面目で、悪く言へば鈍間で、そして氣概があり、随分堅實な美質にも富んで居る。將來の東北より人物の出るのは是の二地方を最とすべきであらう。

◎言語の上から言へば、東北には明に四つの系統がある。一つは東海岸通りの言語で、水戸を發足點として三春、棚倉から相馬の中村邊に餘波が明に分る。是れが上州、野州より今の日本鐵道の幹線のある地方を通過して居る第二の語系を合して、仙臺語を成して居る。岩手、青森は仙臺語の更に東北化したもので、青森とな

つては蝦夷の分子が大に混つて居る。第三の系統は越後より西海岸を傳ふて庄内、秋田の地方語となつて居る。第四の系統は會津より米澤、山形、新庄を経て、羽後に入り、こゝで西海岸の越後系と合併して北出羽の地方語を成して居る。

◎人種も大概言語と同一系統の上に分派されて居る。例へば庄内、秋田の人間は最上や仙臺の人間と毫末の關係もない。之れは古の所謂越の國の民族が西海岸に沿うて植民したもので、旅行者は其骨相の上に明に認め得る所である。其の他家屋の構造にも、杉皮の屋根に石を上せ擔下を通行し得る様にするなどは越後以北は大抵同じだ。女が夏になると乳房もあらはな袖無しと云ふものを着、又十六の娘、六十の婆さんも共に島田を結つて居る所など、丸て同だ。

◎以上は獨斷の説の様だが、東北地方の旅行者、研究者は必ず我輩と見る所を同じうするであらう。精しい説明の如きは茲に述ぶるには餘り長いので、已むを得ず略するのである。

世界の四聖

生まれて一代の宗師となり、死して百世の儀表となる、聖人にあらずんば、誰れかこれを能くせむや。釋迦、孔子、ソクラテス、基督の四人、世呼んで世界の四聖と稱す。宜なるかな。

釋迦は、西曆紀元前凡そ五百年の頃、印度迦毘羅城の王家に生る。父は淨飯王、母は麻耶夫人、其の本名を悉達多と云ふ。釋迦は迦毘羅王家の族名にして、佛陀は其の出家成道後の尊號なり。釋迦身は一國の太子に生まれけれども、夙に思を人生の問題に潜め、二十九の歳、其の妻子を捨て、王城を逃れ、山林に隠れて、道を修むること六年、終に人生の奧義を極め、無上の正覺に徹底せり。爾來五十餘年の間、中天竺の各地に巡錫して、教化を布き、年八十餘歳にして跋提河の邊に歿しぬ。今の佛教は即ち釋迦一代の教訓に本づく。蓋し釋迦の當時、印度には幾多の哲學ありき、されど、徒に思索の高遠を欽びて、人生の疑問に適切ならず。偏に幽玄なる談理と、慘憺たる苦行とによりて、安心の道を求めたり。其の流派を樹てて相争ふ所は畢

竟名目上の優劣のみ。未だ一世の元々をして歸命の大道に就かしむるに足らず。釋迦この間に生まれ、其の浩大なる慈悲と、無邊なる智慧とを以つて、一世の木鐸となり、民をして其の歸依する所を知らしめたり。

孔子、名は丘、孔子は其の尊稱なり。今を去る二千一百餘年の昔、支那の魯國に生まる。幼にして學を好み、禮を習ふ。壯年の頃より、魯國の官吏となり、傍子弟を教へて、夙に令聞あり。學徳愈進む。魯の定公の時に至り、擢てられて大司空の職に就く。治績大いに擧がり、内外其の風采を想望す。時に齊王、魯國の日に盛大に赴けるを嫉み、謀を構へ、定公をして孔子を用ゐざらしむ。孔子時運の非なるを見、五十六歳の老軀を挺し、門下の高弟を率ゐて、四方の遊説を試みぬ。當時の支那は、所謂春秋戰國の亂世なり。周の王室は名のみにして、君臣の大義は蕩然として地を拂へり。或は臣にして其の君を弑するものあり、子にして其の親を害するものあり。強は弱を食み、大は少を併せ、權力の外に道義あるなし、教化の凌夷、風俗の頹廢、未だ曾てこの時の如きはあらず。孔子既に志を魯に得ず、乃ち慨然として故國を出て、大義名分を天下に唱へて、廻瀾を既倒に翻さむとす。志や高且大なりと謂

ふべし。是くの如くにして、四方を漂浪すること十三年、時非にして道容れられず、世又耳を名教に傾くるものなし。ここに於いて、已むを得ず、老脚蹉跎として再び魯に歸り、歎じて曰く、嗚呼吾が道遂に窮す。世遂に吾れを知るもの無きかと。門弟子貢慰めて曰く、何ぞ夫子を知るもの無からんや。孔子對へて曰く、天を怨みず、人を尤めず、下學して而して上達す。吾れを知るものは夫れ天か。君子は歿して名の稱せられざるを病む。吾が道行はれずむば、吾れ何を以つてか後世に見えむやと。幾もなく歿す。時に年七十三。

ソクラテスは、希臘の雅典府に住める一彫刻師の子なりき。其の生まれたるは、凡そ紀元前四百七十年の頃にして、釋迦、孔子と年を隔つること、二三十年に過ぎず。東西の聖人殆ど時を同じうして世に出てたるは、奇なりと謂ふべし。希臘の當時は所謂の詭辯學派の跋扈せし時代にして、知識は名目の争に留まり、道德は空文の上のみ貴ばれたり。其の狀猶釋迦當時の印度の如く、學問は人生社會の實際に關して、殆ど裨益するところ無かりき。ソクラテスは慨然として、時弊の救済を以つて自ら任じ、盛に道を講じ、理を談じ、諄々として倦まず、詭辯學者の輩に遇へば、

則ち其の獨得の論法を以つて辯難攻撃して、一步も假借せず、侃諤の正義、其の稀代の雄辯と相伴ひて、一世を風靡せり。然るに、喬木は風に折らるゝの喩に漏れず、群小のソクラテスに快からざるもの相計りて、國法に背けるものとして、ソクラテスを讒訴せり。其の訴狀に曰く、ソクラテスは國教を信ぜずして異教を擧め、以つて人心を惑亂せり。宜しく國法によりて死刑に處すべしと。ソクラテスは是の讒訴に對する抗議は、實に壯快を極めたるものにして、慨世憂國の至誠を以つて國民に訴ふるところ、語々百世の真理ならざるは無し。然れども、判官は、ソクラテスを以つて傲岸不遜なりとなし、死刑を宣告せり。ソクラテス泰然として驚かず、曰く命のみと。其の獄中にあるや、常に其の門弟子を集めて、生死、靈魂、未來の事を説き、人の脱獄を勸むるものに對しては、輒ち答へて曰く、予は唯正義に導かれむのみ、死又何爲るものぞ。人生の幸福は靈魂の上在るを知らずやと。終に從容として毒を仰いで歿す。將に歿せんとするや、弟子遺言を求む。ソクラテス曰く、爾一雞を以つてアスクレピアスの神に捧げよと。蓋し曾て病みし時、平癒を祈りて、謝を致すことを忘れしなり。希臘の聖人ソクラテスは、是の如くにして逝きぬ。年七

十。

基督は本名を耶蘇と云ふ。基督とは、膏灌がれたる者と云ふ義にして、教徒の奉りたる尊稱なり。猶太のベテレヘムに生まる。其の生後四年を以つて西暦紀元第一年となす。父はヨセフと呼べる賤しき木匠にして、母の名をマリヤと云ふ。長じて三十歳の頃豫言者ヨハネの洗禮を受けて、初めて傳道の生涯に入り、爾來三年の間猶太の各地を歴遊し、諸の迫害に屈せずして、其の福音を傳へたり。抑當時は羅馬帝國の榮華其の極みに達し、禍亂の萌芽其の中に胚胎し、災異荐りに至りて、天下寧日無し。殊に基督の故國たる猶太は、久しく暴君の收斂に疲れ、異邦人の侮慢を被れり。民衆は徒に珍奇の淫祠を崇拜して、益放縱の俗に流れ、學者は詭辯を弄し、形式に拘泥して、空しく人を惑はすのみ。是に於いて、一世の人心は缺焉として、偉人の現出して、是の暗黒の社會を照破せむことを渴慕せり。基督是の間に生まれ、自ら救世の使命を負へる神の子と稱し、昂然として其の偉大なる新教理を宣傳せり。遠近靡然として是れに赴く。僧侶、學者、官吏等是れを喜ばず、以つて、狼りに新法異説を唱へて、民を迷はすものなりとなし、基督を捕へて磔殺の刑に處す。

基督豫めこの事あらむを慮り、晏然として騒がず、靜に祈りて曰く、神よ、彼れ等を許せ。彼れ等は其の爲すべき所を知らざればなり」と。其の刑場に赴くや、路傍に哀哭する女子を顧みて曰く、エルサレムの女子よ、吾が爲に哭く勿れ。唯己れと己れの子との爲に哭け」と。是の如くして基督が三十三年の短き生涯は、十字架上の露と消え去りぬ。基督の死後、其の弟子等は、激烈なる迫害に抵抗して、其の教を天下に弘めぬ。基督教即ち是れなり。

以上は四聖の略傳なり。其の人物事蹟の高大にして雄偉なる、永く後人の景慕し、崇拜すべき所なり。四聖の内、釋迦を除いては、何れも轉軻不遇の中に、其の生を終りたり。孔子は志を四方に得ず、其の經綸を抱いて、空しく咏歎の間に歿せり。ソクラテスと基督とは、何れも讒奸の手に罹り、或は毒を仰ぎ、或は盜賊と並びて十字架上に釘殺せられたり。慘憺なりと謂ふべし。然れども、是れ等の人々の志す所は、天下後世にあり、現世の禍福と一身の安危とは、毫も其の顧慮する所にあらず。故に、其の死に就くや、晏然として猶ほ歸するが如し。孔子は其の身の不幸を憂へじして、却つて、吾が道行はれずむば、吾れ何を以つてか後世に見えむと嗟嘆せり。

釋迦は衆生の爲に其の妻子と王位とを抛ちて、食を路傍に乞へり。ソクラテスは死罪の脅迫に遇うて、揚言して曰く、正義を信ずるものにとりて、死將た何爲るものぞ。吾れをして一日の生あらしめむか、其の一日即ち國民の迷を覺まさざるべからずと。基督は己れを罪に陥るゝものゝ爲に、神に祈りたり。嗚呼何ぞ其の慈悲の浩大にして無邊なるや。

四聖は其の生まれたる處と時とを異にす。故に其の教理にも亦多少の差違無きを得ず。今其の要略を擧ぐれば左の如し。

釋迦の教理は、煩惱を斷滅して、涅槃に達するを主旨とす。夫れ人生は苦に始まりて苦に終る。生老病死孰れか苦に非ざるべき。故に吾人は現世を苦界と觀ぜざるべからず。而して苦の原因は情慾にあり、情慾の原因は、我の一念に執着するにあり。故に吾人は、我の一念を脱却して、無我無念の境界に達せざるべからず。是れ人生究竟の樂地にして、涅槃即ち是れなり。

孔子の教は、身を修め、家を齊へ、天下を治むるにあり。而して身を修むるの基は孝にあり、故に孝は百行の本なり。君臣の義、父子の親、夫婦の別、長幼の序、朋友の信

皆是れに本づく。人は生れながらにして美德を天に稟くれども、後天の氣質によりて、是れを完うする能はざるもの多し、教育の要ここに於いてかあり。既に教育を受けて、身既に修まらば、家自ら齊ふべく、家齊へば國自ら治るべく、國治れば天下自ら太平なるを得べし。故に孔子の教は、一身の修養に始まり、治國平天下に終るものと見るを得べし。

ソクラテスの教は、所謂る知徳合一説なり。以爲らく、眞正の知識は即ち道徳なり。故に行ふと知るとは素と一體のみ。知つて而して行はざると、行うて而して知らざるとは、共に知識、道徳の眞正なるものに非ず。眞理を確信し、其の實行を以つて最上の義務となさば、正義自ら其の中にあり。正義は靈魂の満足なり、而して靈魂は肉體と異なりて、不朽不滅なるものなり。故に、人の正義を行ふ時、現世の利害は決して顧慮すべきに非ず。道徳は富貴のために存せず、然れども富貴は道徳の中に在りと。

基督の教は、愛の教なりと稱せらる。所謂る山上の垂訓は、三年傳道の極意を包括するを以つて、左に其の大略を擧げむ。曰く、心の貧しきものは福なるかな、天國

は其の人の有なればなり。悲むものは福なるかな其の人は慰めらるべければなり。飢ゑ渴く如く義を慕ふものは福なるかな其の人は飽くことを得べければなり。憐むものは福なるかな其の人は憐みを得べければなり。心の清きものは福なるかな其の人は神を見ることを得べければなり。惡に敵する勿れ。人若し汝の右の頬を打たば左の頬をも轉らして是れに向けよ。汝の隣人を慈みて汝の敵を愛せよ。人に見せむが爲に義を其の前に行ふ勿れ。右の手に爲す所を左の手に知らしむる勿れ。僞善者の行に倣ふ勿れ。隠れたるを鑒たまふ神は顯はに報ひたまふべければなり。人は神と財とに兼ね事ふること能はず。人を是非する勿れ。人の目にある塵を見ながら何ぞ己が目にある梁木を見ざるや。汝等求めよ。然らば與へられむ。尋ねよ。然らば遇はむ。叩け。然らば啓かれむ。窄き門より入れ。沈淪に至る門は其の路大きく是れに入るものは多し。嗟呼いかに生命に至る門は窄く其の路は細く是れを得るものゝ少きぞや。凡そ是の訓を聽きて行ふ者は磐の上に家建てたる智者の如く、聽けども行はざるは沙上に屋を架せる愚人の如しと。基督教の精髓は、後世の人如何なる色彩を加ふとも、實に是の山上の

垂訓に基す。

是くの如きは四聖の傳記及び教義の大要なり。嗚呼四聖逝いて既に幾千年ぞ。而してこの教の、今尙ほ凛々として生氣あるを見よ。世界累代の幾億兆の民衆は、この教に憑りて其の道念を養ひ、其の安慰を求む。四聖の如きは實に人類の永遠なる救濟者なりと謂ふべし。其の遺徳の高大、夫れ何を以つてか是れに比せむや。

(廿四年十二月出版中學國語讀本卷七)

冠鑑日親

一 緒言

『冠鑑日親』とは本誌の讀者の多くにとりて恐らくは初めての名稱ならむ。されど予は望む、そが秀吉、家康の名の如く諸君に親しからざるの故を以て、小事實として輕むざる無からむことを。人を殺せる多少、國を取れる廣狹などによりて人物の大小を比擬せむは、少くとも吾等にとりては無意義の事也。苟も個人の勢力の深く、強く、若くは大きく現はれたらむ處、そこには必ず人生の眞の大きい事實あらむ。まことに吾人の心情を動かすものは實に是の如き事實に外ならざる也。げに冠鑑日親は秀吉、家康の如く人を殺さず、國を取らず、所謂史家先生には何處に何時生死したる何人なりやをも知られざる眇たる一僧侶に相違なけれども、而かも尙ほ吾人の見て人生の大きいなる事實とする所、亦この一僧侶の生涯に現はれたる。諸君は先づ予が本篇を述ぶるの趣旨を了解せざるべからず。

二 日蓮宗と迫害

古より宗教家はその信仰の維持の爲めに迫害を被りし事例は鮮からざれども我邦にては日蓮宗の僧侶に於て殊に多し。是れには種々の事情あれども、その主なる原因は日蓮宗其物の立宗の主旨のづから然らしむる也。その詳細は茲に述ぶる追無けれども、是の宗の主義たる素と折伏にあり。折伏とは己れを立てむが爲に他を破するの謂也。即ち日蓮宗は釋迦一代の説法中法華經を以て唯一究竟の眞理と立て、他の經典を擧げてすべてこの法華經を説明せむが爲めの方便なりと爲し、随つて是等方便の經典を典據とせる一切の宗門は權教にして釋迦の眞意に非ずと論ず。かの日蓮上人が立宗の際に大呼したる所謂四個の格言、即ち念佛無間、禪天魔、眞言亡國、律國賊とは是の折伏の主義を最も簡明に發表したる宣言にして、決して一時弘教の方便などに非ず、實にこの宗門の世に存せむ限り、その生命精神として護持すべき大主義なりとす。

かゝる折伏を主義とせる日蓮宗なれば、是の宗に屬する歴代の僧侶のこの主義

の爲に反對者の迫害に遭遇せる例し一にして足らず。而して迫害忍受の模範を示して後世の同門を策勵したるものは即ち宗祖たる日蓮上人其人に外ならず。實に上人が禪念佛眞言の諸宗が全盛を極めつゝある鎌倉時代に於て、法華經の眞理を弘通せんが爲に如何なる迫害を忍受したりしやは、言葉も心もなか／＼に及ばず。居處を追はるゝこと二十餘度、流罪に處せらるゝこと二度、其の間刀杖の難を被れること其の數を知らず。二十二年の長き歲月の間、一日も其の身の安きことなく、打撲の痕、刀杖の瘡身に絶ゆること無かりき。而かも上人は法華經の故に喜んで是等の迫害を忍び、此の臭き頭を法華經に捧ぐるは砂を黄金に代ゆるに等しとなし、假令ひ題目を捨て、念佛を唱へなば日本國の位を讓らむと誘はるゝとも、念佛を申さずば父母の頸を刎ねんと脅かさるゝとも、ビクともせじと誓ひ、その他の大難風の前の塵に等しと喝破せり。折伏逆化を以て宗門の主義とするのは非はもと佛教々理上の問題なれば、茲には暫く説かず、唯々身を抛ちて其の所信に殉し、嶄々乎として退讓することなき大丈夫の心事はまことに驚嘆の外無し。この日蓮上人が立宗の主旨と強毒逆化の模範とは、後世の日蓮宗の信者に偉大な

る感化を及ぼし、其の僧侶の中には其の信仰の爲に時の社會又は政府に反抗して慘憺たる迫害を被りし事例甚だ多し。是れ我邦の宗教史上に於て日蓮宗の外には稀に見る所の事實也。今茲に述べむとする日親の事蹟は即ち是の迫害中の最も慘憺たる者の一也。

三 忍力試験

日親の父母は審かならず。後小松天皇の御宇、應永十四年に生まれ、幼名を寅菊麿と呼べり。初めは上總國埴谷の妙宣寺に入りしが、年十四の頃同國中山法華經寺に赴きて日蓮上人の弟子となりて初めて日親と名のりぬ。少にして才氣人に勝れ、膽力あり。夙に宗風漸やく衰へ祖業將に地に墜ちむとするを見て深く心に決するところあり。年二十一の頃より、一身を以て妙宗の弘通に委ね、高祖日蓮上人の遺業を繼紹して一天下を法華經の檀下に歸依せしめむとの大願を起しぬ。さりながら今の世は正邪處を換へ、權實道を違へたり。この謗法の國土に於てさしきつて妙經の眞理を説かば他宗の僧侶皆怒りをなし、百千の危難到る處に身に

集まらむ。こは聖典の既に預め説き示めせるところ、高祖上人亦既に百世の龜鑑を垂れ給へり。吾れに於て素より悲み悔ゆるところ無し、寧ろ妙經色讀の行者として佛教のこの身に空しからざるを喜ばむ。唯憂ふる所は此身の忍力足らずして中道にして迫害の爲に其の所信を狂ぐるあらむこと也。故に吾れ教を弘むるに先ちて忍力を養成し、如何なる危害に遭ふとも泰然として動搖すること無き大覺悟を成就せざるべからず。

日親は是の忍力養成の手段として、殆どあらゆる苦痛を試みぬ。或は一日に一指の爪を剥ぎて針を其の跡に刺し貫き、十日に十指の爪を剥ぎ悉して、其の跡に針を刺すこと以前の如し。或は双手を沸騰せる熱湯の中に入れ、湯の冷ゆるまで是を忍ぶ。冷ゆれば復た新たに熱湯に入れて又冷ゆるを以て期となす。是の如く間斷なく双手を熱湯中に浸すこと一七日、皮爛れ肉解くれども彼れは毫も苦痛の色を示さず。是れ等の瘡傷また幾もあらずして舊に復しぬ。彼れは己れの忍力能くかゝる苦痛を甘受し得るを見、大に喜びて以爲らく、是等をしも忍ぶべくむば天下何物をか忍ぶべからざらむと。是より志いよく堅く決まり、偏へに時機の

到るを待ち、大折伏の法鼓を鳴らして妙經弘通の素願を果さむと期す。

四 一條戻橋の辻説法

時機は到りぬ。應永三十四年正月の末、日親初めて京師に上り、妙法七字の玄題旗を高く輦轂の下に掲げぬ。當時日蓮宗の風氣大いに衰へて人皆折伏を口にするものなし。嘗つて四箇格言を標榜して念佛者は無間地獄に墮すべし、禪宗は天魔の業ぞと叫びたる宗門は今や同席をも忌み嫉ひたる他宗の人々と往來し、彼等と同じく邪師勸請の神社に詣て、宗門に謗法の標札を押し並べ、因循姑息、偏へに一時の苟安を貪りて、かの高祖上人の樹立し給へる「一天四海皆歸妙法」の大理想を遺却し了りたり。日親京に入りてこの宗門の頹廢を眼前に視るや、憤慨に勝えず、大いに時流に反抗して折伏逆化の大法鼓を鳴らし、専ら高祖上人の遺風を紹述して一步も假借するところ無し。かゝる有様なれば自宗の僧俗と雖も日親を目するに邪宗を以てし、洛中を擧げて一宿を許るすものだに無かりしかば、彼れは已むを得ず、一條戻橋の邊りに於て路傍に傘を立て、其の下に立て、大音聲を擧げて四個

格言を絶叫し、諸宗無得道と呼號しぬ。往來の人は或は眉を揚げて怒るもあり、手を搏ちて笑ふもあり。或は瓦石を飛ばし、或は糞土を雨らし、狂漢よ、痴人よと罵りあひぬ。事の態ひとへに日蓮上人が初めて鎌倉小町の大通にて辻説法を開きしにも似たりけり。

素より法華經の爲に身命を抛ちたる日親なれば、かばかりの障害は風前の塵にも等しかりき。義を責めて言に典據あり、道を説いて論に條理あり。たま／＼法門を争ふものあれば喜むて是を迎へ、論難辯折、其の人を屈し、其の信を改めしめずむは已まず。熱誠面に溢れ、舌端火焰を吐くが如し。されば初めに嘲笑罵詈せるものも後には漸く敬尊の心を起し、連日法を聴くもの市の如し。攝州の富豪宇野、西村の兩人が彼れに歸依して一乗寺を建立したる等、感化の事例少からざれども、煩はしければ書かず。

かゝる間に迫害の歴史は漸く日親の身上に近づき來りぬ。

五 將軍義教への上書

日親京に居ること數年にして其の教漸く傳はり、遠近より來り聴き、或は勸誘して化導を望むもの頗る多し。されど一世を風化するには先づ時の勢力の中心たる幕府を動かさむことを要す、是を以て彼れは數々書を足利將軍に上り、餘他一切の邪宗門を禁制して一佛乗の法華に歸依せむことを勸め、一日改悔の實を擧ぐることに晚ければ一日國家の運命を縮むべきを極言しぬ。時の將軍は足利義教也。彼れ未だ將軍の位に上らざりし前には義圓と號して眞言宗の僧侶にして、又天台の座主となりしこともありき。そも／＼眞言宗と日蓮宗とは其の教理に於て氷炭相容れず、されば日蓮は眞言を亡國の宗旨なりと罵倒し、念佛、禪宗にも増りて大折伏を加へたりき。されば平素より日蓮宗の主義を快よからず思へる眞言僧侶たりし義教なれば、争てか辭令激越を極めたる日親が上書を喜ぶべき。幕下の大道に於て他に宗門無からむ様に四箇格言を唱道するだに、時の政府に對して傍若無人の振舞なるを、况してや直に書を將軍に上りて改悔を迫るが如きは、古今無双の大無禮と謂ひつべしとて、心に大に憤る處ありしが、流石に罪名なくして刑を加ふるを憚り、人をして日親に言はしめて曰く、汝が再三の上書、罪甚だ輕からず、而も

刀杖尙汝が頭に加はらざるは我未だ命を下さざれば也。汝若し悔ひ悛むることなく、今後重ねて訴ふるあらば、我れ必ず汝を捕へて斬に處すべしと。日親是を聞いて曰く、吾はこれ佛子法臣たり、豈一將軍の命に恐れて大覺世尊の告敕に違はむや。『わづかの小島の主等が威さむに恐れては閻魔王の責をば如何にすべき』と、高祖上人が吾等に下し給へる遺訓なり。吾れ豈身命を愛むの故に無上道を捨つるに忍びむや。吾れ今もし將軍の威嚇に恐れて諫争を已めなば、世人は必ず言はむ、日親こそは市井に傲語すれども將軍の一言には猫の如くなれるを見よと。是の如くむば何を以てか祖師上人の遺業を紹述してこの無上大法を後世に傳ふるを得むや。死は初めより吾が期待せしところ、吾れ斷じて死を以て將軍と争はざるべからずと。是に於て憤然筆を執りて立正治國論と題する一大論文を作る。この論文の主旨は日蓮が立正安國論に倣ひ、一代佛經に徵證して天下の治亂が宗門の正邪に依ることを證明し、法華經歸依の時機方に迫れる旨を述ぶるにあり。其の語激切にして明快、其の理着實にして透徹、日宗學者の永く感歎する所なりと謂ふ。

さはれ、この立正治國論こそは實に日親が迫害史の端緒なりき。

六 捕 縛

立正治國論稿既に脱し、將に淨書を幕府に上らむとす。この時日親を憎めるもの相謀りて義教に讒して曰く、日親台命を蔑視し、更に公庭に争訟せむと欲して此頃書一卷を作り、題して立正治國論と名づく。書方に成り、日ならずして閣下を驚かさむとすと聞く。彼れの不逞にして公威を輕むずること斯の如し、是をしも赦して罰せずむば、何を以て幕府の尊嚴を保たむや。閣下宜しく熟慮して計るところあれと。義教聞いて憤怒に勝えず、而かも事宗門に關するの故を以て世上の物議を招かむことを恐れ、故らに輒すく刑を加へず。先づ淨土、禪宗の諸名僧を召して告げて曰く、日親法師と云ふものあり、諸宗を折伏して法訴數回に及べることは諸師の既に知る所也。然れども我れ素より彼が言を信せず、去歲訴へし時我れ嚴かに彼れに告ぐるに、若し重ねて訴ふるあらば必ず斬に處すべきを以てせり。今聞くところに依れば、彼れ飽迄我が命を用ひず、更に公庭に争訟せむが爲に既に一

書を作り、剩さへ佛子法臣豈公命に恐れむやと公言せりと謂ふ。是れ明に幕府の威權を無視せるもの、法に於て恕すべからざるや明けし。然れども彼れ亦深く佛法に歸依して其の所信の爲に身命を顧みざるものなりと聞く。故に我れ今彼れを刑するに先ち、彼れと諸師とを相對せしめ、法華經と餘經との深淺勝劣を我が面前に決せしめ、以て彼れが折伏の邪法を摧破せむと欲す。如何と。

淨土、禪宗の諸僧は學識信行に於て素より日親の敵にあらず。皆彼れと對論せしめられむとを恐れ、聲を齊うして答て曰く、丸を八萬四千の教理、一代五時の說法は皆機に應じ根に隨ひて成佛の道を教へざること無し、何ぞ獨り法華の一經に限らむや。日親何者ぞ、みだりに私見を以て深淺勝劣の差別を立つ、其の説くところ全く佛法の眞意に違へり。何ぞ故らに相對して是非を争ふに足らむや。且夫れ佛法と王法とは固と一體たり、されば世尊亦涅槃に臨みて法を國王大臣に付屬せり。後世佛子なるもの豈獨り公命に背いて而かも佛敎に忠なるの理あらむや。想ふに日親は輕浮狂横の一増上慢のみ。妄りに怨嫉を抱いて諸宗を罵詈し、動もすれば身命を抛つと大言す。まことに一笑を發するに堪えたり。彼れ口に如何

なる強言を吐くとも、若し臨むに重罪者の責を以てせば立ちに題目を棄て、念佛を唱ふべきのみ。願はくは將軍熟く是を計らむことをと。

素より短慮偏見にして初めより日親を惡める義教なれば、忽ち是の甘言に惑はされて宗門對決の擧を中止し、直に日親を捕へて獄に下しぬ。時維れ永享十二年二月六日。

七 大迫害

日親獄に繋がるゝこと一年半計り。後世の人を戰慄せしむべき慘酷なる迫害は此の間に行はれたり。個人の意志が如何ばかり外來の勢力に抵抗し得るものなるか、將た一念の信力が人に如何に強大なる意志を與へ得るものなるか。讀者よ、日親が迫害の事例に就て深く自ら省みる所あれ。

恐るべきは先づ獄舎の構造なりき。高さ僅に四尺五寸、廣さ僅に疊四枚を布くのみ。而して特に日親を苦めむが爲に是中に投ぜられたる囚人は、獄吏の哀みて八人に減せしまでは實に三十六人なりき。四疊敷に三十六人、是れ既に忍ぶべか

らざる苦痛なるに、其の天井裏には長さ七八寸の大釘を隙間もなく逆打ちして、少しも頭を掻ぐる能はざらしめたり。然れども是の如きは彼れが是より受くべき迫害に比すれば言ふに足らざるのみ。

或時は赫々たる炎天の日に日親を獄庭に引き出し、薪を山の如く四方に積み、火を放ち、彼をして其の中央に坐せしめ、笞を擧げて叱して曰く、汝若しこの苦痛を免れむと欲せば宜しく題目を止めて念佛を唱ふべしと。彼れ答へて曰く、苦熱まことに忍び難しと雖も、謗法の罪を作る時は無間地獄に墮す。無間地獄の惡熱は三千世界の火炎を併すも尙ほ十の一にだも及ばず。吾れ何ぞ是の小苦に勝え得ずして死後無量劫の苦因を種うるの愚を爲さむやと。泰然として法華の首題を唱へて動搖すること無し。

或時は凛々たる嚴冬の中夜に彼を戶外に曳き出し、其の衣を剝ぎ、赤裸々のまゝにして庭樹に縛し、水を灑ぎつゝ、笞うつこと徹夜、而して叱して曰く、汝若し是の苦寒を免れむと欲せば何ぞ彌陀の稱號を唱へざると。日親答へて曰く、寒冷眞に骨に徹す、唯邪法を信ずる時は八寒地獄に墮するを如何。八寒地獄の寒苦は火を凍

らし鐵を碎く、吾れ何ぞこの暫時の凍寒を痛みて永世の苦因を作らむやと。又高声に題目を唱へて毫も怯辟する態無し。是の種の拷責幾度なるを知らざるも、自若として驚かず、身軀亦信念の力によりてかますゝ剛健を加へて、少しも衰弱の兆を示さざりしぞ不思議なる。

或時は日親をして浴室に入らしめ、戸を閉ぢて外より焼くこと凡そ半日許り。人皆彼れ既に死せりと謂ひて戸を開いて是を見れば、彼れ尙ほ熱湯中に端坐し、依然として小音に題目を唱ふ。人皆驚きて人間の業に非ずとなしき。

或時は彼を捉へて仰いで其の口を開かしめ、水を杓子に酌みて口に流し入る。三十六杯に到るまでは彼れ自ら是を數へ記したれども、其後は幾十回なるを知らず。而かも尙ほ死に到らず、從容として面に顰蹙の色をだに現はさざりき。

或時は竹の串を陰莖に貫き、或は赤く熱せる鉄を兩脇に挟ましむる等、殆どありとあらゆる危害と苦痛とを與へたれども、迫害の目的は一も其の功を奏せざりき。日親の信仰は口にますゝ其の強固を加ふるのみ。初めより天傷を期したる身命も亦何等の障害を受けず。奇きかな、容色亦ますゝ怡樂を加へて、人界の苦惱

を嘲り嗤ふものゝ如し。

八 冠鑑日親

是に於て「冠鑑」の名の由來せる一大暴行は彼れの頭上に加へられぬ。嗚呼是れ人間の想像し得べき最大の肉体的苦惱にあらずや。

もろくの苦責一も功なきを見るや、獄吏上命を受け、一の大いなる鑑を燒きて紅色に到らしめ、以て彼れが圓顛の上に被らしむ。平生酷烈の拷問に慣れたる無情の獄吏すら皆顔を背けて敢て正視するもの無し。然れども日親少しも驚かず、合掌唱題して是を忍受し鑑の冷ゆるまで毫も動搖せず。人皆驚歎してそゝろに畏怖の念を起しぬ。是れより京師の人彼を稱して「冠鑑日親」と呼びぬ。

冠鑑の責めも尚ほ日親の信仰を動かすに足らず。彼れ獄にありて日夜に正法を宣べ、且夕題目の聲を絶たず。其の聲遠く獄外に徹して、道行くもの覺へず足を止め、爲に信歸の念を起すものすらあり。義教乃ち命じて其舌根を抜かしむ。獄吏憐み、根を抜かずして少しく舌頭を切る。是より日親の言語往日の如くならず、

吃々として嬰兒の語るが如し。加ふるに冠鑑の後頭皮摺拘して赤禿となり、髪を剃ること能はず。已むを得ず。長ずるに随つて鑑を以て是を艾る、其の形童子の頭に似たり。日親乃ち戯れて曰く、俗諺に老いて再び小兒となると云へり、それ日親の謂ひかと。

九 義教の現罰

百般の苦痛は遂に法華經の行者を如何ともする能はざるのみならず、日親の凡人に非ざるを悟りて歸依の念を起すもの漸く多し。義教憤悶自ら措く能はず、使を獄中に遣はし、日親を詰問せしめて曰く、汝が奉ずる所の法華經の明文に據れば、法華の行者を惱ますものは必ず現罰を被ると。今我れ汝を苦むること年餘、而かも我身に於て一分の障害無し。法華經の明文妄語に過ぎるか、將た又汝は法華の行者に非ざるか、二者其の一に居らざるべからず、如何と。日親色を正して答へて曰く、經文何ぞ妄ならむ。吾れ將た眞に法華の行者也。あゝ將軍現罰を望むか、三年を過ぎずして必ず奇禍に陥らむと。義教聞いて笑ふて曰く、汝の言何ぞ爾かく

寛漫なる三年を経て禍に遭ふとも何ぞ必ずしも汝を惱ませるが爲ならむやと。日親乃ち答へて曰く、あゝ君三年を以て遅しとなすか、然らば則ち今より百日に満たずして必ず法華經の現罰に中らむ。其の期に及び悔悟して日親を呼ぶも時既に晚からむ也と。義教聞いて且つ怒り且つ笑ひ素より深く意に介せず。

されど偶爾か、將た必然か、日親の預言は果して空しからざりき。彼れが義教に答へしより恰も九十九日に當り、時は嘉吉元年六月二十四日、義教俄かに赤松滿祐の爲に弑せられぬ。誰れ言ふとは無く、是れ正しく法華經の行者を苦めたる現罰なりとの説、京洛の間に普ねく傳はりぬ。義教の遺族臣下等震ひ怖れ、俄に日親を赦して餘殃を免れむとす。然れども彼れ頑然として獄より出ることを肯ぜずして曰く、吾れ身命を捨て、重苦を忍ぶは一に將軍及び其の一族をして邪法を捨てて正教に歸せしめむが爲也。諸公もし日親の罪なきを認めなば、何ぞ直ちに法華に歸依せざる。吾れの赦さるゝと否とは又何かせむ。若し將軍の一門にして改悔の實を擧げて吾法に隨はずむば、吾れ永く斷じて此獄を出てじと。百方陳謝し慰諭すれども聞かず。是に於て義教の近親一人已むを得ず日親の門下となりて、

僅に出獄の諾を得ぬ。

是より後近畿の貴賤皆日親の威風に畏れ、信服するもの益々多し。幕府の力を以てして尙ほ且つ其言動を制すること能はず、天下又恐るゝに足るもの無し。是に於て折伏の法鼓いよゝゝ高く響き、逆化の幔幢ますますゝ廣く翻へりぬ。

十 餘 言

是より以降、八十二歳の天壽を以て其の終りを告げたるまでの日親の生涯は、法華經の行者として實に成功せるものなりき。世人は、冠鑑の一事を知つて未だ多く其の他を知らずと雖も、其の偉徳高行の世に傳ふべき甚だ多かりき。されど茲には暫らく『冠鑑日親』の迫害の事蹟を記するを以て足れりとせむ。

讀者よ。日親の生涯の如きは嘗に一宗教者として歎美すべきのみならず、そも一個人の信仰の力が如何に外來の障害に打勝ちて其の精神の自由と榮光とを保持し發揮し得べきものなるかを示す絶好の事例に非ずや。願はくは一日蓮宗の僧侶の行爲として卑むこと勿れ。個人の勢力が時としては地上の如何なる

權力にも匹敵して其の威嚴を保ち得べきことを現示せる人道上の一大事實として深く自ら省みる所あれ。諸君よ、貢を拂ふものゝみが臣下には非ざる也。吾人は吾人の心霊の支配の下に如何なる人をも、如何なる國をも征服し、其の上に君臨し得るものなることを悟れ。カイザルの物はカイザルに還せ、神の物は神に還せとはそもく何事を吾人に教ゆるか。諸君よ、自ら其中心の靈性に火を點じて古賢先聖の遺業を照せよ。個人は決して其の小弱を歎くべきに非ざる也。

予は是等の點に就いて熟考の料を供せむが爲に茲に諸君の爲に病餘の筆を驅りて『冠鑑日親』の傳を書きぬ。予をして無益に書かしめずむば幸ひ也。

(廿五年五月)

豪傑の半面

一 清正

天照大神、正八幡は申すも畏こし。人臣と生まれて死後に神に祭られ、遍ねく國民に拜するゝもの、まづ指を天満宮と清正公とに届すべし。天満宮のことは人皆知れば、茲には清正公に就いて世人の多く知り及ばざる事柄を談るべし。

清正公とは言ふまでもなく加藤清正のこと也。清正と云へば豊臣太閤の幕下に忠勇無二の臣にして、殊に朝鮮征伐にて、雷名をとゞろかせしことは三尺の童子も知る所なれども、世に稀なる法華經の信者なりしことは知る人多からじ。

よく繪圖に見る清正の甲の烏帽子は其長け三尺五寸ありと謂へり。この烏帽子は今も尙ほ熊本某所に保存せられ、先年伊藤侯の巡遊せられし時試にそを冠られしに、よろけて歩み難かりしと云ふ事實によりても、そが如何に重量あるものなるかを想像すべし。かゝる重量ある三尺五寸の大烏帽子は何物にて造られしかと尋ねるに、數部の法華經にて張り固められし也。即ち清正は其の烏帽子の材

料にとて自ら法華經數部を手寫し、そを漆もて固めし也。法華經は一部八卷二十八品の大經典なれば、そを數部までも淨寫せる紙數は莫大なりしに相違なし。分捕功名の外に餘念なかるべき戰國の武士にして、かゝる宗教上の心懸ありしは誠に珍らしき例なりと謂ふべし。

かく三尺五寸の大烏帽子は手寫の法華經にて固められしのみならず、傳ふる所によれば、是の烏帽子の内部の頂上には清正が平素信仰して措かざりし日蓮上人の黄金像を安置せしと謂ふ。法華經と日蓮上人とを頭に戴ける清正の志や貴しと謂ふべし。

頭に法華經と日蓮上人とを戴ける清正は、口に南無妙法蓮華經の題目を絶たざりき。傳ふる所によれば、清正は何時の頃よりか一日に數千遍の題目を唱ふることを立願し、行住坐臥、少しも是の大願を怠らず。戰場に臨み敵軍と戦ふ際にも、尚ほ一刀を下す毎に南無妙法蓮華經と唱へざるはなかりしとぞ。

斯かる熱心なる法華經の行者、日蓮宗の信徒なれば、清正が是の宗門の爲に盡力せし事少からず。例へば池上の本門寺、身延山の久遠寺、京都の本國寺など何れも

清正の手によりて造營修繕せられざるは無し。殊に池上の本門寺の如きは當時清正の手にて建立せられしもの、實に七十五間四面の大伽藍にして、落成の折には、清正かの三尺五寸の大烏帽子を冠りしまゝ直立して縁の下を通行せりと謂ふ。今の淺草の觀音様でも十八間四面に過ぎず、七十五間四面と云へばうそらしき程の大建築なりと謂ふべし。

世には朝鮮征伐や虎退治の清正のみ傳はりて、是の法華經の大信者たる清正は多く傳はらず。惜むべきこと、思ひたれば予の聞知せる大要を記せること右の如し。

二 秀 吉

清正の信仰につれて思ひ出ださるゝは秀吉の恩愛也。秀吉と云へば粗野不文智に長け、情に乏しき人の様に想ふれども、此頃の歴史家の取調べたるところにては、是の想像大に當らざる所あり。秀吉は如何にも大學者には非ざりしが、さりとて文盲者にはあらず。智者は大智者なりしが、恩愛の情に於ても靄然として糊

すべきものありき。文祿三年に吉野山の花見の折柄

吉野山たれとむるとはなけれども

今宵も花のかげにやどらん

と吟じ又

歸らじとおもふ家路を入あひの

かねこそ花の恨みなりけれ

と歌はれしなど殆と歌人のおもかけありて其風興のこゝろざし床しく覺ゆ。其
他九州征伐の途次或は小田原陣の往返にさまざまの詠歌ありしは古の英雄輩を
横へて詩を賦せし風流にも似たりとや云はん。その手紙なども三上博士の鑑定
にては自筆の傳はれるもの少からず。殊に小田原在陣の中に其の母君に送れる
書中に『そもじさま御ゆさん候て、きをも慰さみ、わか御なり候て給はるべく候た
のみ申候』の語の如き、博士も曾て讚嘆せられし通り、千言萬句を費すとも、子の親に
對する愛情は、此の『若くなり給はれ』の一語より適切なるはあらじ。かゝる消息文
尙他に多し。秀吉が恩愛の情に厚く、且つ其文章の天真を流露して自然の妙境に

達せしを見るべし。

* * * * *

序なれば消息文のことに就いて一言すべし。消息の文は日常往復の間に、不用
意にして成れるもの多ければ、隨うて其の人の真面目のおのづから字句の間に現
はるゝこと多し。普ねく世に示めし、又は後代に傳へむとして書ける文章は、良し
んば書く當人に於て別に修飾の意なしとするも、知らずくの間、天真爛漫の趣
を缺くことあるを免れず。況してや多くの凡人にありては初めより街矯の意あ
りて書くこと多ければ、真正の自己は邊幅の修飾に掩はれ、小人も君子に見え、鄙吝
の人も寛裕の長者に見ゆることまゝあり。消息文にはかゝる弊なく、書く人の平
生をありのまゝに書き現はす場合多し。されば後世史家傳紀家が古の人物を知
るには是上無き材料なりと謂ふべし。讀者諸子も古人を研究する際にはよくよ
く是點に注意する所無かるべからず。秀吉の消息文よりふと思ひつきたればか
くは一言の注意を申す也。

三日蓮

日蓮上人の事は予が本年初刊の本誌に寄せたる「鎌倉のはなし」の中にて鎌倉時代のみならず、日本歴史上の何れの時代を通じてたぐひ稀なる豪傑なる由を述べ置けり。實に上人は宇宙間第一の眞理たる法華經の大義を唱へて、滿天下の衆生を救はむとの大願を起し、是の大願の前には、假令へ法華の宗門を捨てなば日本國の位を譲らむと誘はるゝも、題目を已めて念佛を申さずば父母の頭を刎ねむと脅かさるゝも、ビクともせじと覺悟し、其外の大難は風前の塵に等しと傲語し、鎌倉殿の迫害に遇ふや、「わづかの小島こじまの主等ぬしらが威さんに恐れては閻魔王の責をば如何すべき」と宣言し、「法華經の爲にこの臭き頭を刎ねられむは砂に黄金を換へ、糞に米を代ふる也」と喝破し、眼中國家の權勢もなく、北條氏の威武もなき、眞に高天濶地獨立獨歩の大豪傑なりしが、さりとて豪邁なる膽氣のみありて溫柔なる人情に乏しきやと言ふに、大に然らず。日蓮上人が人情にあつく、恩誼に深く、其の情時としては禽獸の果にまでも及びしことは、後世の人をして感涙に堪えざらしむるものある

也。この事は上人の遺書を讀めば解ることなるが左に一二の例を擧ぐべし。

上人の信者に四條金吾とて江島遠江守の老臣ありき。是の人武士の身分ながら夙に妙法に歸依して上人の門下に列なり、不惜身命の覺悟を以て上人と共にもろくの迫害を被れり。上人龍の口にて斬られむとせし時は、路上に馬の轡をとりて慟哭し、刑場に從ひて殉死せむと決心せり。上人は深く是人の節義に感じ、後年幾多の消息文は常に靄然たる恩愛の情をたゝえ、殊に或時は「殿四條金吾を指すにしてみても、死後地獄に墮せられなば日蓮も亦共に地獄に墮すべし。たとへ釋尊及び十方の諸佛手をひき袂をとらへて淨土に迎ふるとも振り却つて必ず殿と共に地獄に墮つべし」との意を述べられしが如き、其恩情の濃やかなること喩ふべきもの無し。天下の威武を敵として一步も退讓することなき大丈夫の上人にして他面に於て是の兒女の涕涙ある、殊に貴むべきを覺ゆ。

上人が親を思ふ心の切なるは六十年の生涯を通して最も明に顯はれ、夙に本化門下の龜鑑となれり。殊に晩年「日本六十六箇國、島二つの内に五尺に足らざる身を一つ置處なく」して身延山の深谷に隠るゝや、九個年が間、五十餘丁の險山を一日

もかゝらず、一日に一度は必ず攀ち登りて遙かに上人の故郷なる房州を煙波の間に望み、經を捧げて父母の恩を拜謝せしが如きは、古今東西の如何なる孝子傳中の事實に比較し得べき美談なりや。

上人病あつくして甲州の身延より武州池上に移る時、身延所領の檀越波木井氏より乘馬一匹に舍人一人を添へて遣はされける。上人この馬をこよなく愛せられ、池上に着きて波木井殿に送る書中にも、是の馬のことをいろ／＼いたはしく思ふ旨を書かれ、終りに「知らぬ舍人を付けて候はゞ覺束なく覺え候罷り歸り候はんまで此の舍人を付け置き候はん」と存じ候」と遊ばされたるなど、自身の病苦を厭はず、ひとへに一匹の馬を慈しむの情、たとしへなく貴からずや。

眞の豪傑は人の爲し難きことを爲すと同時に、人情に篤く、恩愛に濃なるもの也。能く人に忍び、世に戻るをのみ偉人の業と心得るは豪傑の半面を遺れたるもの也。この情愛なくば、かの豪邁もあらじ。かの豪邁あればこそこの情愛もあるなれ。二者表裏し融會して茲に豪傑の全人格を造る也。かの美はしき薔薇の織物を見

ずや。表には花と刺と別々に織りなされるれども、其裏面を見れば、花を織る絲即ち是れ刺を織る絲に非ずや。
(三十五年七月)

日蓮上人孟蘭盆御書(治部房の祖母に)

靈牙、燒米、瓜、茄子等、佛前にさゝげ申候事。孟蘭盆と申候事は、佛の御弟子の中に目捷連……此人の母をば青提女と申す。其母慳貪の科に依て餓鬼道に墮ち候ひしを、目捷連尊者の救ひ給ふより事おこりて候。……藤は松にかゝり千尋をよぢ、鶴は羽を恃みて萬里をかける此は自身の力にはあらず。治部房も又かくの如し、我身は藤の如くなれども、法華經の松にかゝりて妙覺の山にのぼりなん、一乗の羽を頼みて寂光の空にもかけりぬべし。此羽を以て父母乃至七代の末までも弔ふべき僧なり。あはれいみじき御寶は持たせ給ておはします女人かな……

予の好める人物

一 はしがき

歴史中の人物で誰が一番エライかとは、恐らく少年諸君の間にしばしば繰返さるゝ問題であらうと思はれるが、それは人の好き／＼で、とても議論の干渉するものではない。そこで我輩は一つ日本の歴史中で我輩の好きな人物に就いて少しく諸君にお話しやうと思ふ。無論我輩が好きだからと云つて其の人が誰の目にもエライと云ふ譯は無いが、好きな我輩から見れば如何にもエラク思はれる。それには何の不思議も無い、エラク思はれればこそ好きにもなるのです。

二 聖徳太子

聖徳太子と云へば三尺の童子も其名を知つて居るから、こゝに事新らしく述べ立つるにも及ばないが、我邦の上代の歴史で此人位ひの大人物はあるまい。推古天皇の時代は丁度明治維新の時の様に、一方には佛教と云ふ新文明が外國から渡

りかゝつて居る、他方には是の新文明に反對する維新前の攘夷黨の様な頑固連も居る。太子この間に立ち、尙ほ年若の御身を以て斷然新文明の輸入を決行して、本邦の歴史に一大進歩の動機を與へた、その功績は實に千古不磨と褒め申しても決して溢美では無い。身自ら率先して佛道に歸依し、從來我邦固有の神道を差し置いて佛像寺塔を建造し、いろ／＼の御經の講釋などをし、且つ佛教の精神に本づいて十七條の憲法を作るなど、其の當時の人から見ただらば非常に急激な改革であつたに相違ない。すべての改革に免れざる不平や怨みは必ず此時にもあつたに違ひないが、是等の不平連を抑制し心服せしめて、是の歴史上の大改革を全うしたことは、一つは蘇我馬子の様な有力な味方のあつた爲でもあらうが、また太子其人の偉大なる人物の力に歸せねばならぬ。まことに珍らしき大徳の偉人と云はねばならぬ。

馬子が崇峻天皇を弑した時、其罪を問はなかつたと云ふ廉で、太子を攻撃するは今迄の歴史家の通例の議論であるが、これもさう手短かに斷案を下しにくいと思はれる。太子の聰明にしてかばかりのことを辨へ知らぬ譯は無論ない。知つて

而して是を爲さざりしは、通例史家の謂ふ如く蘇我氏の權勢を憚りての事か。我輩は聊かそを疑ふものだ。是れにはいろ／＼歴史上の小面倒な考證と議論とがあるが、今は言ふまい。唯諸君が是の問題に就いて研究を試みむことを希望して、一言の注意を書き留むるのである。

若し一言にして太子の人物を言ひ現はさうならば、我輩は答へむ、太子は推古時代のハイカラの大將なりと。無論このハイカラの意味は今時のもみあげを短かくして赤い襟飾を付ける連中とは違ふ。世間では往々伊藤侯をハイカラの元祖など、言ふが、聖徳太子はこの意味に於けるよりも遙に純良な高尚な意味に於ての大ハイカラであつたのです。謂はゞ太子は後世ハイカラの手本と稱しても好いでせう。

三 聖武天皇

我邦の天子様の中で聖武天皇ほど其精神に於ては理想が高く、其事業に於ては規模の大きい御方は稀であらうと思はれる。天皇の佛教信仰は非常に熱誠なも

ので、其の證據には、すべての政事を舉げて佛事に關するものが十中の八九に及んで居る。つまり今日の言葉で言へば、政教一致が天皇の大理想であつたのである。諸君よ、一口で政教一致と云へば何でもない様であるが、是れ程重大な、又高尚な思想は世の中に少ない。天地人生のあらゆる事はすべて佛意によりて支配せらるゝ、是の大慈大悲の佛意に適ひ、佛の宣傳し給へる眞理の榮光を此世に弘むるところ、其處に政治家帝王の職分がある、——少し難しい言葉だが、まあざつと斯う云ふ考へが即ち政教一致の根本の思想です。そこで聖武天皇が是の思想に基づいて凡ての政事を佛教上から行ひ、御身自らは三寶の奴と稱して佛弟子とならせ給ひ、治國安民の祈りにも、喪祭冠婚の禮儀にも、すべて佛式を用ひ、唐や天竺のはてからまでも有名な坊さんと呼び寄せて重く用ひた事などは、普通の歴史家が一言に事も無げに言ひ去る様に、決して天皇が佛に淫したと云ふ様な譯ではない。實に其根本には先に述べた様な高尚な、且つ重大な思想があらせられたのである。

天皇の事業の規模の大きい事を最も明かに示めすものは、諸君も定めて話に聞いて居らるゝかの奈良の大佛である。是の大佛は丈け五丈三尺五寸、是に要した

人はまづこの道長の外はあるまい。藤原氏の歴代には随分榮華を極めた人もあり、又藤原氏以外にも平清盛とか、豊臣秀吉とか、乃至徳川家康とか云ふ人は、何れも人臣の榮を極めては居るが、或は其生涯に曲折あり、奇軀あり、或は終りを全うせざるものゝみて、道長の様に満月の缺けたることなき様の榮えは無かつた。人間として是れぐらひ思ひのまゝに現世を送り得るものならば、先づ生き甲斐のある生涯と云つても好からう。

この世をばわが世とぞ思ふ望月の

かけたることも無しと思へば

こんな大々の氣焔をまことに吐き得た人は、日本歴史中に先づは道長一人であらうか。

それに道長は大抵の人の想像する様に優弱な貴公子では無い。當代第一流の人物であつたに相違ない。太平の時勢を粧飾したばかりで、艱難の場合に臨まなかつたから、其人物がどれ程エラかつたかは今日から分り難るが、その傳はつて居る事蹟によりて見れば、なか／＼の豪傑であつたらしい。その一二の例を挙げや

うならば、父の兼家が或時藤原公任と云ふ人の噂をして、吾が子供等は此人の影だに踏み得るものは無からうと歎息した。その時道長は、吾れは其影を踏まずして其面を踏まうと放言したとのことだ。又華山院が或時物すぎき雨の夜に侍臣をして暗い處に行かしめしに、他の人はいづれも怖れて空しく歸つた日に、道長のみは獨り大極殿に至りて其柱を削つて證據に持つて來たと云ふ話もある。又兼家の葬式の時に門外俄に騒がしくなつて、並み居る人は何事か起つたかと色を失つた。たゞ道長のみは少しも騒がず、徐ろに人を遣はして見せしめ、何れも騒ぎあるな、馬の逃げたるに候と申されたとの事だ。當時兵家の頭領源の頼光は道長の沈毅を歎美して眞に大將軍の氣量なりと云つたさうだ。こんな話で其の人物を想像しても、凡人でない事が分かると思ふ。

五 鎮西八郎爲朝

藤原時代の末から源平時代にかけて、武人の名あるものは随分多いが、鎮西八郎爲朝、あゝ是れぐらひ小氣味の良、男の中の男らしい快男兒は又とない。あゝ今

の世に八郎爲朝が居るならば、その二十八騎の中に加はつて五人張の矢聲に耳をそらせないものだ。

爲朝の傳記は精しくは分らないが、その分らない處に又云ひ難き面白味がある。まづ其の少年時代が鬼神の様だ。公卿天下の京都にはあまり人物が小供ながらに大き過ぎるので、十三歳の年に九州に勘當せられた。(諸君よ昔から親に勘當せられた人に大人物が多いものだ。)するとまあ何と云ふ驚くべきことであらうぞ、十三歳の歳の三月末から十五歳の十月までわづか三歳あまりが間に、大軍をしたことが二十餘度、城を落したことが數十個所、遂に九州を攻め落して自ら筑紫の總追捕使となり、鎮西八郎爲朝と稱した。諸君よ、これは十五歳の時だ。今時の少年ならば、まだ煙草も喫へない腕白ざかりで、やつと中學校の二年生位のものだらう。是の時爲朝は其の腕の力一つで九州の總追捕使となつたのである。

然しながら強いばかりが爲朝では無い。香椎の宮の神主共が爲朝の強勢に驚いて朝廷へ上訴に及ぶと、朝廷からは爲朝の上洛を促した。それにも應ぜぬので、朝廷では卑怯にも父の爲義をして其の子の咎として官を罷めしめた。官軍の討

手ならば何十萬騎でも驚かぬ爲朝も是の事を聞いては流石に驚かずには居られぬ。洛に上れば九州の權力を失ふことは分りきつて居るが、父の難儀には替へられぬ。遂に其の軍を解いて僅に二十八騎を召し連れて罪を階下に待つた。あゝ是のやさしい心ばへは九州の總追捕使よりも何程美事であるか分らぬては無いか。

爲朝の上洛した時、時しも例の保元の亂であつた。爲朝の計にして用ひられなば軍は事も無く勝ちであつたが、惜しや頼長の爲に敗軍となつて爲朝も遂に伊豆の大島に流された。父の爲義などの死際はまことに見苦しかつたが、爲朝のみは男らしく戦ひ、男らしく敗け、又男らしく捕はれて、男らしく流された。此末が如何に男らしかつたは、諸君は馬琴の弓張月で知ることが出来るのである。

伊豆の大島で爲朝は決して死なぬ。馬琴の書いた様に琉球に渡つたに違ひない。しかしそこに朦雲國師や鶴龜などが居つたや否やは分らないが、爲朝の後半生には實にいろ／＼の目覺ましい事蹟があつたに違ひない。是の快男兒の後半世を捉へて弓張月を拵らへた馬琴の着眼は流石／＼と褒むべきである。

六 清盛入道

源平時代には流石に人物が多かつた。平家の方では清盛を初めとして重盛、知盛、忠度、時忠などは何れも非凡の人で、またそれに次ぐ郎黨家従の面々にも少からず英物があつた。源氏の方でも一族の頭領頼朝を中心として、武勇たぐひ無き源九郎義經、木曾の冠者義仲、又それに従へる勇士の數々は平家にも劣らず賑やかであつた。今是の兩家の人物を通觀して予の最も好める人物を擧げやうならば、我輩は先づ指を平清盛と、平時忠とに屈せねばならぬ。

我輩から見れば重盛の如きは是れまで世人が崇敬する如き大人物とは思へない。謂はゞ義理人情に拘泥して一身の兩全に悩んだと云ふ境遇にいさゝか人の同情を招くの外、別に超脱非凡の才器と云ふものが少しも現はれて居ない。況んや其末路の如きは、其身の冥福を死後に求むるに急にして、此れまで折角忠孝兩全の道に苦心した帝室の事も己れの一門の事も抛却して顧みなかつた様な形跡のあるのは、氣の毒ながら前後矛盾の薄志弱行として批難しなければならぬ。知盛、

忠度等は要するに匹夫の勇士で、トテモ大局の經綸に任すべき者ではない。源氏の方では、頼朝は流石に人に將たるの器量はあつたが、一時の得失に眩みて永遠の計を知らず、其の襟度狭少にして、動もすれば讒奸の乗ずる所となり、自ら其の骨肉を害したる冷刻殘忍の性情は、人として實に忌はしき限りと謂はなければならぬ。良し彼れをして秀吉の雄圖あらしめ、家康の成功あらしめても、是の性情を以てしては、到底下劣の人物と評さなければならぬ。義經は梶原景時の評した如く、一介の猪武者として能く敵を殺し城を破たる、謂はゞ活ける武器の様なものだ。木曾の冠者はいさゝか其の人物に面白い所はあつたが、是れとても死ぬるまで己れの立場が解らずに、無意味に軍をして斃れた大將たるに過ぎない。是等の人々から見ると清盛は當代を超絶せる大人物と謂はなければならぬ。

單に事業の成敗の上から見れば、清盛は頼朝に及ばない。されど是の不完全なる、偶然の出來事の多き現世では、事業は兎ても人物を評價する目安とはならぬ。清盛の大きいなる點は、其の心事、その性格の上にあるのだ。

清盛の性格が如何に勝れて居つたかは此の短文に於てなか／＼説き盡す譯に

は行かぬが、畢竟は己れの意志を思ふ存分に發揮したと云ふことに歸着するのだ。彼れは從來のすべての習慣道德の以上に立ちて、己れ自らの自由と威嚴を保つことを一生の事業とした。されば彼れは其一生に於て己れの本志に背いて行つたことは殆ど一つも無い。他から見ると不忠と謂はうが無道と謂はうが、彼れは己れ自らの本心が眞實に認めない以上は決して己れの志を枉げたことは無つた。其胸には些の偽りも飾りも無く、眞に小兒に見る如き赤誠と眞情とがあつたばかり、其心事は常に清朗快濶で、未だ曾て後暗き衷情に疚しき事などは無かつたのだ。後世の歴史家は皆不忠不義を以て彼れを批難するけれども、皆是れ從來の倫理上から見た陳腐な議論で、是の從來の倫理を超越して己れ自らの新倫理を有てる清盛其人の眞性格の批評としては、少しも當つて居ないのである。

此邊の精しい所は我輩が曾つて少年諸君の爲に「平相國」と題する書物を書いて東京堂から出版してあるから、それに就いて了解して貰ひたい。茲に書き盡すには餘り問題が大き過ぎるのである。

七 平時忠

平家の一族で清盛に次いで我輩の好きなのは平大納言と通稱されたかの平時忠だ。是の人の事柄は平家物語や源平盛衰記などに、處々に出て居るばかりで其の傳記の精しいところはとんと分らないが、其の歴かながらに傳はつて居る事蹟から考へれば、一風變つて時流を抜いた、一種の面白き人物であつたに違ひない。少い時に叡山の坊主の騒ぎを一片の辭令で鎮めた頓智、さてはかの一門都落の匆劇に際して、人々の心も空に顛倒して居る時に、己れのみは獨り泰然として供奉幽薄の煩はしき事共を落ちもなく指圖したる沈毅、或は又平家世盛りの頃に、此の一門に非れば人にして人に非ずと廣言せし傲慢、——是等の事蹟を合せ考へて見ても、時忠は一種の立場のある、世の褒貶などには頓着せぬ我執のあつた人に違ひないと思はれる。況んや都落以來、一門流離の間に周旋して毅然として大節を維持し、安徳天皇を飽まで正當の天子ともり立て、亡びるまで大義名分を辱めなかつた其の勤功は、平家の末路に萬丈の光焰を放ちたる見事な事柄だ。例へば西國を追

はれくゝて九州の大宰府に行つた時に、緒方の三郎が使を遣はして、法皇の宣旨なれば已むを得ず敵對する旨を言ひ送つた。其の時、時忠は衣冠束帯して使者を引見し、一天萬乗の天子は今茲にお在しますのに、法皇の宣旨とは何事ぞ。況してや緒方は累代平家の郎黨にして故内府殿の蔭により九州の追捕使となりし者ならずや、恩を忘れ義に背く不忠の者共、やがては天罰其身に報はれむと、大喝して使を睨み還した。此時の時忠の態度は毫も敗殘の一族を代表するの状なく、堂々たる王者の權力を挟むものゝ如くてあつた。見事なる遣りかたではないか。

一の谷で意氣地なしの重衡が生捕にされた時、狡猾なる後白河法皇は、三種の神器を都に戻せ、さらば重衡を還してやらうと、其の時は屋島に籠つて居た平家の本陣に言ひ送つた。其の時の平家の答は有名なる屋島請文とて、眞に平家の没落史の終りのページを輝した崇大雄麗なるものであつた。此方の代表者は勿論宗盛ではあるが、愚昧の宗盛に何んで斯んな立派な考へがあらうぞ。恐らくは知盛の意見か、さなくは概ね時忠の思想に出でたるものに違ひない。我輩は前後の事情に考へ、且つ平家の外交文書を司つて居た人が時忠其人に外ならざる點から見

十中の八九は是の案文をば時忠の意見と想像するものである。是の請文の大意は、平家物語や外史を讀んだ人は誰も知つて居る通り、一の谷で死んだり生捕られたりした一門は重衡のみに限らない。彼れたゞ一人生還を希ふ理由は無い。法皇にして若し當家に同情を寄せられ乃至忠盛清盛三代の忠勤をお忘れなくば、一日も早く西國に御幸ありて共に關東の逆賊を追討せられよ。御申越の三種の神器は正統の天子一日も御身を離すべきものではない。鸞輿都に還らざる以上は神器も永く邊土にさすらふ外は無い。不幸にして當家の武運拙なく、官賊成敗處を異にしたらむ時には、洵に殘念ながら高麗契丹乃至天竺の端までも行幸の御供をしなければならぬ。悲しい哉、人皇八十餘代の間傳承あやまり無かりし日本國の靈器は、一朝にして異邦の寶とならむとは。——とまあ斯んな意味の文句であつたと思ふが、區々たる興亡成敗を意に介せず、飽くまで大義名分と共に斃るゝの決心を示したことは、實に平家の滅亡をして其榮華よりも大ならしめたものだ。かゝる崇大なる思想を抱ける時忠は、まあどんな人物であつたらうか。惜しい哉、歴史は彼れに就いて多くを語らないが、我輩には「ド」も心ゆくばかり床しく思はれ

るのである。

八 文 覺

サア今度は文覺上人の番だ。是れは又一種奇怪な日本の歴史中には極めて例の少ない性質を有つた荒くれ坊主であつた。

何んで其様な荒くれ坊主が好きなのかと讀者は問はれるであらうが、我輩は何も故らに奇怪を好む譯では決して無い。我輩の文覺に惚れたのは、清盛に於けるが如く、其の我執の一念の強くして、其の意力情熱の遙に尋常人に優れたる點にあるのだ。その事蹟によりて想像するに、文覺は清盛と同じく小兒の如く無邪氣な、天真爛漫な、己れの欲する所必ず是を行ひ、行ひたる所必ず是を仕遂ぐる底の大煩惱心、大執着心のあつた人に違ひ無い。從來の習慣に本ける當代の道徳から見れば、其行ひには随分亂暴な事はあつたが、自ら顧みて毫も疚しい處がなく、臆面なく、躊躇なく、何事でも其所信を斷行した事は殆ど清盛と其性格を同じうして居る。我輩の眼から見れば、斯う云ふ風の人は普通の人よりも神に近づいて居る。そし

て神に近づくとは人は必ず悪人として罵られ、狂人として嘲けられる。文覺なども不完全ながらに此種の人物中の一人であつたのだ。

諸君は我輩の言を怪まずに、一つ彼れの傳記を考へて見るが好い。亂暴なのは彼れの子供の時からであつたが、幼にして父母を失つたので、人が其の親のことを話しをすると聲を立て、泣いたと云ふことだ。彼れが至情の人であつたことは明かだ。かの有名な袈裟御前の一條なども、天真爛漫の至情の人でなくては、如何してあの様な事が出来やうぞ。さて坊主になつて、高雄の神護寺の爲に勸進帳を提げて法皇の御所なる法住寺殿に出掛けた時、恰も管絃の御催しがあつて、文覺の願意は顧みられなかつた。スルト文覺は躍り上つて奥庭の中に入り込み、兩手に勸進帳を捧げて天も震へよと計りに大音聲に讀みあげたので、折角の管絃も腰を折られて了つた。衛士等聲々にその無禮を責むれども動かず、右手に短劍を抜き、放ち、眼を瞑らして殿上を睨みて、珍らしくも無き管絃に氣をとられて王法擁護の大勸進帳を疎外にするは、以の外の御不覺ぞや。我れ誓つて皇家の資格によりて此の大願を果さむと欲す。願ひ叶はずむば死すとも此塲を動かじとぞ呼ばはつ

た。斯んな事てとう／＼捕へられて牢に入れられたが、彼れは少しも當初の意氣を撓めず、口を極め聲を限りに朝家皇室の無道を罵り、且つ咀つたと云ふことだ。其れから前に述べた様な罪で伊豆の國に流された。出發際に清水の觀音に文を書かせたことや、天神の鳥居の柱に金を埋めたと云ふことや、番兵共にからかつて遊んだ事は、前號の本誌に出て居つたから、讀者も記憶して居らるゝであらう。遠流の途すがら、遠州灘で暴風に遇つて船が覆へらうとした時、文覺のみは平氣で嘯ひて愉快々々と叫んだ。そこで船中の人が出家の身で居ながら人の難儀を面白がるのは怪しからんと怒つたので、それでは一つ龍神共を叱りつけて遣らうと彼れは舷頭に立つて、龍神共よ、文覺の乗れる船なるを知らずやと高聲で呼はつて海上をぐつと睨んだ。スルト不思議や風波も忽ちに鎮まつたとの事だ。これは耶蘇の傳などにもある例で、文覺の豪膽と自信とを證するものだ。自ら佛天の上の威力を有つて居ると自信するもので無ければ、斯んな真似は出来るものでは無

50. 文覺一生の事蹟で尤も名高いのは、例の頼朝に兵を擧ぐることを勧めた一件で

あらう。これには色々歴史上の議論のある事だが、要するに文覺の力によりて源氏再興の緒の啓かれた事は争はれぬ事實で、取も直さず文覺は其赤手を以て天下の風雲を捲抒したものと云はなければならぬ。いろ／＼考へて見るに、ドーモ文覺は謀叛氣に充ち／＼た、平和の嫌ひな人物であつたに違ひない。頼朝に謀叛を勧めたばかりではない。己れ自からも仕舞には守貞親王を擁立して廢立を謀つた。事現はれて佐渡に流さるゝや、始終洛の方を睨んで、物も食はずに罵り死に死んだとの事だ。六代御前との關係なども、或は其間に例の謀叛氣がからんでは居なかつたかと想はれる所がある。

然しながら、如何様の缺點があるにもせよ、彼れの如きは實に珍らしい人物だ。如何にも狂氣じみて居る、然し斯う云ふ人物が境遇次第で所謂天下の大豪傑大偉人となるものだ。そして境遇と云ふものは誠に偶然なもので、同じ種子でも山の上に生へるものと谷の底に生へるものとの間に非常に相違のある様なものだ。人物の眞價は境遇などには無い。その人物の人物たる所の眞價は如何なる境遇にあつても不變なものと云ふことを吾々は悟らねばならぬのだ。

因に云ふが、文覺の傳記は源平盛衰記にあるのが一番精しい様に思ふ。そして源平盛衰記は文覺傳の有無に拘はらず、是非少年諸君の一度は讀まねばならぬ本である。

九 西行法師

これは富士見西行の書や銀の猫の譚で、諸君のおなじみの西行法師である。昔から公卿や武家の出家した例しは數へきれぬ程にあるが、この西行の如く、其の心事の高邁に情操の清朗な人はまたと二人はあるまいと思はれる。

或は戀の爲に、或は利祿の爲めに世を遁れて悟り顔をした人はいくらもある。

例へば熊谷蓮生坊の出家の如きは古今の美談になつて居るが、其の原因は、同僚の武士と領地の境界争ひをして訴訟に負けた爲めであるとすれば、一向に有り難いとは思はれない。斯んな例と較べると西行の出家は實に高尚なものであつた。

身は田原藤太秀郷の嫡孫として代々名譽の武家に生まれ、夙に北面の武士となりて弓矢のほまれ一時に轟き、加ふるに和歌の道に秀て、鳥羽上皇の御覺も一通

りては無かつた。されど義清(西行)の俗名は早くより人生の無常を感じて運世の志已みがたく、其心がけ一つで如何なる榮華にもありつき得べき身をば、わづか二十三の壯年で妻子を捨て、祿位を抛ちて一朝圓頂緇衣の人となつた。其の昔し印度の悉達多太子の遁世と較べて、事に大小はあらうが、悟れる道に高下はあるまいと思はれる。

遁世後の西行の生涯ばかり高潔なるものはなかつた。桑門に家なし、須らく抖擻して身を終るべしとて、爾來五十年の間身を雲水に托し、東國、西洲、地として到らざる所無く、到る處風月に會して其の意を得れば嘯咏自適して自ら樂む。其の樂みや、恐らくは天地人生の外に超絶したものがあつたらうと思はれる實に羨まじき境涯と云はなければならぬ。彼れは又能く歌を作つたが時に感じ物に觸れて自然に其の天真を吐き出したので、世の歌人の如くに題を設け句を探りて故らにありもせぬ感興を造り作すの類では無かつた。されば其の後世に残せる歌集山家集を見れば、吾等は行雲流水の姿の如く、自然其物のひびきに接するの想ひがある。歌も茲に至ては直ちに天地の心である。

更に當時の時勢如何にと見ると、鎌倉覇府の出来たばかりで、東夷の時を得顔に跋扈した時だ。武士の外に人無く、弓矢の外に譽れ無き有様で、一世を擧げて利祿にあこがれ、功名にかつゆる人のみであつた。かゝる時に西行が其豪宕の雄心を一双の篋笠に托し、飄然として天地の間に高踏せる有様は、風神實に千古の偉觀と云ふべきである。天下は取つても俗物は免れぬ頼朝が、是の高士を提へて射御の法を問ふだに魯かしきに、餞別に銀の猫を贈つたなどは、實に滑稽の極みと言はなければならぬ。鎌倉に西行の見えたのは、恐らくは掃溜に鶴の降りた様なものであつたらうと想はれる。

西行は建久元年二月十六日、即ちささらぎの望月の頃に死んだが、不思議なことには其前に詠んだ歌の心によく協つて居る。曾つて櫻花を詠じて

願はくは花のもとにて我れ死なん

そのささらぎの望月のころ

あゝ西行の生涯にくらぶれば、所謂英雄豪傑の名を成し志を遂げたるなどは多く語るに足るまい。人生是の境地に安住することが出来るならば、功名富貴は風

前の塵の如きものであらうと想はれる。

一〇 日蓮上人

日蓮上人のことは、此の正月の本誌に鎌倉のはなしを述べた折りにも一言したことがあるが、其の人物に於ても、事業に於ても、鎌倉時代はをろか、日本の全歴史を通じて上人に匹敵し得べき人は、幾人も無からう、否、全く無いかも知れぬ。

少年諸君よ、此世の中で眞に偉大なる事業を云ふのは、何も人を殺したり國を取つたりするとのみでは無い。少年の心にも兎角頼朝や太閤の様に天下を取つたり外國を征伐したりするのが、眞に英雄の事業の如くに思はれ、文藝や宗教の上の成功などは左程に尊むに足らぬことの様に思はるゝてあうが、是れは大いなる誤りである。人を殺し、城を屠ることも難事ではあるが、人の精神を征服し、千百年の後世までも其の勢力を有するとは人間の事業としては更に大きく、又更に尊むべきとではあるまいか。諸君よ、歴山大帝の遺業も、羅馬帝國の覇權も、其時々榮落に過ずして、今日に於ては何の跡かたも無いが、アリストトルの學術や基督の教は

今日も尙ほ昔の如く人の心を支配し感化して居る。春秋戰國の王霸の争ひも支那の歴史に空しき文字を留めたばかりであるが其の當時に陳蔡の野に飢えた孔子の教は今も尙東洋文明の根據となつて居る。世に所謂英雄豪傑の事業は壯快は壯快であるが畢竟一時の野心家の野心を満足せしむる外に多く後世に影響を與ふるものには無い。是を喩へるならば丁度仕掛花火の一時人目を眩まして覺えず快哉を叫ばれるが間もなく消え去つて素の暗黒に立ちかへる様なものだ。是れを文藝や宗教の勢力の深大にして且つ永久なるに較ぶれば事業の價值何れか大なりやはおのづから明かあてらうと思ふ。されば英國の哲人カライルと云ふ人は英吉利が一人のシキスピアを有することは印度帝國を有するよりも尊いと言つた。

又人物の上から見ても眞に大なる人物とは其理想高尚にして品性驚く、且意力情操の絶大純潔なる人を謂ふのである。世の所謂英雄豪傑と呼ぶるゝ人の中には其の表面の仕事こそ人並以上に大きい但其品性の是に伴うて高潔なるは極めて乏しい。つまり彼等の多くは境遇の幸なりしが爲に己れ眞に是に當るべき

才器品性なくして偶然に大事を成し遂たものが多い。例へば高山の上に吹き上げられた種子が其處に生長して亭々として天際に聳ゆる様なものだ。もし禪一貫の赤裸にして突き出したならば東家西家の權兵衛入兵衛同様の人間でないものが幾人あるであらうか。一言すれば彼等の多くは所謂時勢の寵兒であるからである。

日蓮上人は其人物に於ても其事業に於ても眞に偉大と稱せらるべき人であつた。先づ其事蹟から考へて見ても安房の一漁師の子に生まれ幼より出家して清澄に上り後叡山に學び十二年の游學の後當時に行はれたる佛教諸宗門の何れも教祖なる釋迦の佛意に違へるものなることを悟り其故山に歸りて初めて法華の新宗門を開きしが聞くもの皆狂として取り合はず却て在來の宗門を罵詈雑言を怒りて彼を殺さむとせしものすらあつた。日蓮通れて鎌倉に至り淨土や禪宗の全盛を極めつゝある是の大覇府の大道に立つて念佛者は無間地獄に墮つべし禪は天魔の業ぞと大呼せしかば執權北條氏の怒にふれて一度は伊豆に流され二度は佐渡に流され其間或は暴民の爲に庵室を焼かれ或は龍の口に引かれて首斬ら

れむとし、或は敵人に要撃せられて命を落さむとし、其他刀杖瓦石の災難其數を知らず、前後凡そ二十二年の間、席煖まるに追なく、生疵の身に絶ゆる間は殆ど無かつたとの事である。諸君よ、日蓮の受けた迫害は實に慘酷極つたものであつた。そして其時間も一年ならず、二年ならず、三五年乃至十年ならず、實に廿二年の長い間であつた。彼は是の長い廿二年の間、絶えず自己の信じたる眞理を飽くまで宣傳し、生死の間に出入して泰然として動かなかつた。常に是の臭き軀を法華經に捧ぐるは、砂を黄金に代へ糞を米に換ゆる也と言ひ、假令日本國の位を以て誘ふも、父母の頸を切らむと脅かすとも、我は決して是の眞理をば捨てじ、其の外は大難風の前の塵たるべしと宣言して、天下何の恐るゝ所なく、憚る所なく、聲の根の枯れざるかぎり、筆の毛の續かむかぎり、正々堂々と天下に呼號した。法然や親鸞の様に朝家權門に知己あるては無く、天上天下介然、孤立の身を以て、滿天下の僧俗を敵として折伏しやくふくの法鼓を鳴らし、時の執權たる北條氏を逆賊と呼はり、僅わずかの小島の主と卑しみ、七大寺の寺塔をば焼き拂ひて、彼等の頭を由井が濱にて斬らずば日本國必ず亡ぶべしと極言して、一世の耳目を警醒せし其の態度の雄々しさ、勇らしさは、實

に我邦の前後の歴史に類例の無い事であつた。

諸君よ、古人の語に一義を執つて十年を踰ゆるものは必ず眞面目也と云ふことがある。日蓮は二十二年の長い月日の間、常に生死の間に出入しながら其の眞理と信奉せる法華經を説いた。これ程の眞面目が又と世にあるであらうか。されば天も人も次第に是の至誠の聲になびきて、其教は漸く都鄙に擴がり、俗人の皈依するものは言ふまでも無く、淨土、禪宗等の僧侶共も追々と改宗して念佛の代りに唱題の響きがだん／＼と高くなつた。北條より足利の時代になつてからは、是の宗門の勢はますます盛大となり、戰國時代にありては、天下の寺院の中にて法華その中ばを占めたとのこと。後年に至つて色々の事情から追々衰微して、今日では眞宗の全盛に壓倒されて了つたが、其れでも堂々として尙ほ日本國の大宗門たるを失はぬ。是れ皆日蓮上人の遺業の餘澤である。

それで日蓮の人物は如何であるかと云ふと、決して世人の多く信ずる様な剛情我慢一方の人では無い。「七大寺の寺塔をば焼拂ひて、彼等の頭を由井が濱にて斬らずば日本國必ず亡ぶべし」など痛言せられたあたりは、實に辛竦激越の極みて

はあるが、其の裏面に温潤玉の如き愛情の春の泉の様に溢れて居つたことは、「御書」を讀んだ人、讀んで解し得た人の必ず認むる所であらう。女性に對しては常に親切を極められ、夫婦の愛情に對しても常に深厚なる同情を寄せられて、孝順の情に至つては實に後人を感動するに足る美蹟を遺された。即ち六十近き老境に到りながら、尙ほ父母を懷慕するの情に堪えず、身延の山に引籠つてからも、毎日五十餘丁もある險山を攀ぢのぼりて、遙かに生國房州の空を拜まれたとのことは、實に孝行の鑑と云ふべきではないか。是れが一日二日や、一月二月の事ではない、雨の日も雲の日も、九年の長い間、一日も缺かさなかつたと云ふに至つては、眞に驚嘆の外は無いては無いか。斯う云ふ慈悲愛情の話しが上人の生涯には外にも甚は多い。世人が折伏の側の上人を見て、單に強情我慢の一狂僧と思ふのは、全く上人の人物を知らぬことを自白するに等しい。されば史傳の中にも、一たび上人を拜したばかりで、其の慈光に射られて其のまゝ、皈依したと云ふことは度々出て居る。是を要するに上人は知識に於ては當時の如何なる碩學にも匹敵し得べき深大なる素養を有し、又た其の意力に於ては生死を顧みずして其の信念所志を貫徹する

の大勇猛心を有し、又た其の感情に於ては温潤閑雅、所謂る大丈夫の俠骨は婦女子の柔腸を妨げざる底の人情を有たれたのである。

上人の教學、上人の信念、乃至所志は如何。是の問題は今茲に述ぶるには不適當であるから凡て略す。所詮かゝる偉人を雜誌の一小文で讀者に解らせやうとするは、初めから無理なことであるから、我輩はただ上人に就いて見る所の十の一を記し、少年諸君が後日の研究の助けにしようと思ふのである。

(附) 日興、日持が事

日蓮上人の事をお話した序に、我輩は是非諸君に其の二人の弟子の事に就いて話したい。坊さんの事ばかりで煩さいであらうが、暫らく辛抱して聞いて下さい。日蓮上人に六人の高弟があつて、通例六老僧と呼ばれて居る。日興と日持とは是の六老僧中の二人であるのだ。

東海道の鈴川の停車場から五里あまり、大宮からは三里もあらうか、富士の裾に大石寺と云ふ寺がある。是の寺は餘程の大伽藍で、日蓮宗富士派と稱する一派の

本山で、其の開祖が即ち茲に云ふ日興上人である。

是の寺を日興が起てた因縁が甚だ壯快だ。元來法華經といふお經には迹門と本門とがあつて、前者は學校で言はうならば豫科、後者は本科の様なものだ。日蓮宗の人に言はせると、此の本科は日蓮上人が初めて開いたので、其の以前には豫科即ち迹門ばかりであつたのだ。そこで日興上人の考へたには、昔し傳教大師は法華經迹門の戒壇を起す爲めにすら、比叡山に三千房を建てた。今我祖師日蓮の開かれた本門の戒壇を建てるには、須らく一萬坊を造るべしと。そこで土地を日本一の富士山にして、一萬坊を建築する繩張りまでした。其の跡が今でも萬坊が原と云つて名前だけではあるが日興上人の大計畫を後代に語るべく殘つて居る。今の大石寺は日興の當初の考では書院位の積りて、本堂は別に大々的なものを造る筈であつたとのこと。是の事は別に何でも無い話の様ではあるが、日蓮上人の教理の廣大なる一つの感化として見ると、頗る面白いのである。

それから次は日持上人の事であるが、是の人の事蹟は日蓮主義の發表としては更に痛快だ。元來日蓮の理想は、其の妙經の眞理を以て先づ日本國を歸依せしめ、

それから十方世界に及ぼして全天下を統一するのであつた。日蓮の死んだ後に日持上人は是の大目的を継ぎ、日本國內の事は他の諸老僧あれば事足りなん、予は是より國外に布教して祖師上人の遺志を繼ぐべしと唱へ、弟子僕從等は危難に勝えざるべしとて一切謝し去り、己れ一人にて今の北海道に渡り、それから北方亞細亞大陸に渡つて遂に其の行術を失つたとの事である。近來或探檢家の話には、浦鹽の附近で六百年前に日本僧の虐殺せられた遺跡を發見したさうだが、或は是が日持の最後ではあるまいかと想像されるが、何分確かなことが明かでない。

諸君、昔から海外から僧侶が來て我邦に布教した例は非常に多いが、我邦から海外異教の蠻族に布教に出かけた人は日持の外に誰があるであらうか。死は素より覺悟の前である、たゞ其の蠻族に妙經の福音を傳へ、一人でも二人でも眞理の光に救いたいと云ふ其の大慈悲心は實に廣大無邊と云はなければならぬ。諸君よ、我邦に六宗十宗と宗旨の數は非常に多いが、日持の如き海外布教の爲に死したる高僧を出したる宗旨は日蓮宗を除いて何處にあるか。日蓮上人の宗教的理想の廣大なることは其の一つの感化たる日持上人の行動を見ても、よく解かること

と思ふ。

(三十五年八月十一日)

日蓮上人日女御前御返事(五二四頁参照)

御布施七貫文送り給ひ畢。屬累品の御心は、佛虚空に立たせ給ひて、四百萬億那由他の世界に、武藏野の芒の如く、富士山の木の如く、簇々と膝をつめよせ、頭を地につけ、身をまげ、掌を合せ、汗を流し、露しげく、おはせしに、上行菩薩等……に法華經を譲らんが爲めに、三度目まで頂をなてさせ給ふ。譬ば悲母の一子が頂のかみを撫づるが如し。……實塔品の御時は、多寶如來釋迦如來十方の諸佛、一切の菩薩集まらせ給ひぬ。この實塔品は何れの處にか、只今ましますらんと、考へ候へば、日女御前の御胸の間、八葉の心蓮華の内に、おはしますと、日蓮は見まいらせて候。……凡夫は、見ずといへども、釋迦多寶十方の諸佛は、御覽あり。……女人の御身として、法華經の御命をつがせ給ふは、釋迦多寶十方の諸佛の御父母の御命をつがせ給ふ也。

文藝評論補遺

戯曲に於ける悲哀の快感を論ず

芝居の愁嘆場程不思議なるものはなし。吾れ人が只悲しき運命に陥らざらんが爲に、只泣かざらんが爲に平生營々として勞苦するにも係らず、其の貴重なる貯蓄金を割て喜て泣きに行くとは、抑も解すべからざる事に非ずや。最愛の、悴が御役に立つたるは、何故に吾人に樂しきや。焦る、夫のあるぞとも知らず、焦る、盲目の佳人は何故に吾人に快きや。情と義理にひしがれて、いつそ殺して下さんせとも、がく可憐なる貞女を見、胸、慾な母様覺えて居、さつしやれと泣き出す薄命の孤兒を見、去年の秋の、煩ひに死に果せざりしを悔む節婦の、繰言を耳にし、其のひとり子の、なぶり殺しを、現在に傍に見て居し、慈母の述懐を聞き、吾人は何故に言ふに言はれぬ快感を覺ゆるや。願ふに愁嘆場なる者はいかなれば、吾れ人の苦しき、つらき、悲しき涙をして、斯くまで快く甘露の如く流れしむるにや。之れ吾人にとりて頗る面白き問題なりとす。

昨年の春文學士大西祝氏は「悲哀の快感」と題する精細なる一論文を「國民の友」に

掲げられき。又數月前に至り「城南評論」と云へる一雜誌に此問題に關する一小文を見しが只大西氏が説の一部分を敷衍したるに過ぎざるが如し。吾人の記憶する所によれば、此二者の外我邦の學者が此問題に就て論究を試みたる者なきが如し。大西氏は其の該博なる學識と流麗なる文章とを以て略々満足なる解釋を與へられたるが如しと雖も、吾人は未だ以て首肯する能はざるものあり。予は我議論を行ふの便宜の爲に、先づ氏か説の大要を批評し、然して後我説を述べんと欲す。大西氏の論文は一般に悲哀の快感と題せしを以て、今予が題目とせる戯曲の悲哀よりは其範圍廣し。然れども氏が論旨の十中八九は戯曲の悲哀にありと云ふも不可なし。氏は悲哀の快感の主なる原因を以て左の五種に分てり

- 一、對照作用
- 二、變換作用
- 三、想念の符合
- 四、社會的性情
- 五、道德的觀念

氏は一、二、三、を以て第二位の原因とし、其主因を以て終りの二項に歸せり。今氏が説の大要を擧げんに

一、對照作用 とは、他人の悲哀を見て我身の悲哀なき現狀に對照し、比較的其身の幸福なるを思ひて快感を生ず。然れども之れ他の不幸を見て喜ぶものなるを以て、或る限を越れば吾人の徳義心を害し、却て不快の念を起さしむべしと。予は之を以て何人にも普遍なる説となす能はず。無情無慈悲なる人はいざ知らず、少くとも予は予が悲哀の快感を以て對照作用に負ふ所ありと思ふ能はざるなり。

二、變換作用 は吾人が新奇を好むの情に歸因するものにして、其の新しと言ふ一點に於て已に幾分の快感を與ふるものなり。大西氏は假令へば阿古耶の琴責、オフェリアの發狂に對する快感を以て、醜態たる世間の俗務を打忘れ、壯大異常なる悲哀の中に我心を埋没せしむるに依ると言へり。予は此説の普遍ならざるを疑ふ也。何となれば吾れ人は此浮世にありて經驗する所の多くは悲哀にして快樂は極めて罕なればなり。

三、想念の符合、此點に於ては予は全然大西氏の説に同ずるものなり。氏の説

に曰く、悲劇を見、或は詩人小説家の名著傑作を讀て愁嘆悲哀の陳述に至る毎に、成程我身も斯かる場合にあらば斯の如き悲愁の情を起せしならん斯の如き嗟嘆の辭を發せしならんと思ひて、我想念と妙に相符合するが故に、我心中言ひ難きの愉快を感じ來る也と。予は大に此説に賛成なり。讀者が茲に注意すべきは、大西氏が成程斯かる場合にあらば、我身も斯の如く悲愁の情を起せしならんと言へる語の中には、其戲曲の工みなることを暗に包含せること也。想ふに我が言はんと欲して言ひ得ざりしことを言ひて、吾人が眠れる理想に符合するは審美的目的の一端に非ざるか。大西氏が此説は予が後に論ぜんとする審美的觀念の一部を言ひ表はしたる者に非るなきを得んや。

以上の三は大西氏の寧ろ枝葉視したる處のものにして、氏は次の社會的性情と道德的觀念とを以て其議論の本領となせり。予は當世評論家の卑劣手段なる引用の錯誤を避けんが爲に左に原文の儘其主意を轉載せむ。

試に婦女子が芝居の愁嘆場見に行て涙を流して悦ぶ時の心を想像せよ、こは如何なる性情の作動に基ける乎、他の悲哀を見て落涙して憫れがるは之れ側

愼の心より出づる者に非る乎。他人の悲哀を想念して、之が爲に、一滴の涙を、だも瀧ぐ時は、我心は恰も或壓束を脱したるが如く、譬へば堰かれたる水の、其堰を取り去られたるが如き感なくはあらず。此感覺は即ち吾人の性情の發せんと欲する所に發して満足を與へたるの心識なり。此同感又惻愼の心は、即ち之れ社會的性情と名くるものにして、而して此性情の満足する所に一種高等なる快感を生じ來る也。彼の他人の悲哀を想ふて自らも共に悲哀なる所に一種無類の快感の存するは、即ち主として此社會的性情の満足に起因するものに非る乎。我れ他の爲に泣く時は、我が狹隘なる窮屈なる利己の壓束を脱して、我が心は人類の大なるが如く大に社會の弘きが如く弘きを覺ゆ、之れ我心の一時の救に非る乎。狹隘なる利己の心は、我が本眞の性に非ず、他人の爲に涙を流して他と我との差別を忘るゝ時は、是れ我本性の光明を放つ瞬間なり。吾人は其本性に復らんことを求む、是れ之れによりて假我を去りて實我を得ればなり、是れ眞に我に復るなり。彼の社會的性情は即ち此復我の一片のみ。詩歌と云ひ美術と言ひ此大目的に向て進む者に非る乎。

氏は又道德的觀念が悲哀の快感を構成するを説て曰く

吾人の感覺する悲哀の情が若し道德的の感情又觀念と相團結する時若くは其悲哀の情あるが爲に猶一層道德的の觀念又感情の光輝を表はす時は、其悲哀の情は多少道德的の愉快を來すの緣由となるべし。假令ば高節廉潔の士が堪え難き艱苦の中にありながら、猶能く其節操を守るの有様を見れば、一方には素より悲痛辛酸の情あれども、然し却てそれあるが爲に、又一方には(即ち其艱苦悲痛にも猶能く耐え得るの點に於て、道德的の心識の満足を發揮せしむ。故に悲壯なる戯曲の主人公が正義公道を守て終にそれが爲に非命の死を遂ぐるの様を見る時は、悲痛慘憺の狀は固より之に過ぐる者はあらざれども、然れども其慘憺たるが中にも尙一種高等なる快樂の存するを覺ゆる也。

大西君が此論は、一見すれば委曲明晰殆ど餘蘊なきが如きも、退て沈思すれば吾人の胸中尙幾多の懺焉たらざる者ある也。理論の聲は如何程高きにも係らず、吾人の經驗と天性とは吾人をして容易に首肯せしめざるなり。社会的性情と道德的觀念とは、各々悲哀の快感を構成する要素の一なるは予の認むる所なり。然

れども予は氏が言ふ如く之を以て主なる原因なりと思ふ能はず、否其最大要素に非ずして寧ろ對照變換等と共に第二位の原因を成すものに非ざるかを疑ふ也。

夫れ悲哀なる事物の吾人に快感を與ふるに要する所は種々あるべしと雖も、其悲哀が假在のものにして實在のものに非ざること第一の要素ならん。吾れ人は其悲哀なる事實の目前に實在せざることを確信するが故に、其悲哀より快感を享くるを得る也。小説詩歌の中に苦める少女義人を見て、快感を覺ゆるは此少女義人が現在我が目前に苦むに非ずして、只我が想像中の幻影が苦み悲めるに過ぎざる事を確信すれば也。演戲は想像の活潑なる者に過ぎずして、吾人が胸中に描ける幻影に假の實在若し斯く言ふを得ばを與ふる者のみ。吾れ人は現に號泣の聲を聞き、現に愁嘆の形を見る、然れ共此悲哀の間に快感を覺ゆるは之れ模倣に過ぎずして、實の人が實に號泣し實に愁嘆する者に非ざるを、知れば也。若し舞臺上の判官が眞の判官にして、眞に腹を切り眞の顔世御前が眞に髪を切り眞の由良の助の無念が眞に五臟六腑に浸渡らば、忠臣藏四段目は徒に殺風景を呈せんのみ、何の快感か之れあらん。要するに悲哀の快感は、只想像の場合に於てのみ起るもの

なることは争ふべからざるの事實也。

大西氏の所謂社會性情とは、他人の悲哀に惻愷の情を起し他人と共に哀樂する同情同感を云ふ。十分他人の悲哀に惻愷同情の念を起すには、其人の受け居る悲哀の實情の極めて明晰に、極めて酷切に、我身に感じ我身自らが其境遇に立てるの思なかる可らず。而して眞に他人の心事を理解するには、想像中の假設的人物を夢みんよりは、現在事實を目撃するに如かざることを素より言を待たず。然らば則ち大西氏が社會的性情は詩歌戯曲に於てよりは、實際の事實に於て最も多く發揮せらるべき理なるを以て、隨て悲哀の快感は詩歌戯曲に於てよりは、實際の人物が實際に悲哀するを見る場合に於て一層大なるべき理なり。即ち大西氏の説に従へば、芝居の忠臣藏四段目を見んよりは、實際の判官の切腹を見る方遙に愉快なるべき理なり。之れ全然吾人の經驗と天性に背反するものに非ずや。芝居なればこそ朝顔の物語も面白ろけれ詩歌なればこそオフェリヤも楽しけれ、實際薄命の盲女狂婦を見て何の快感あるべきや。

道徳的觀念も亦同理にて其誤謬なるを認むるを得べし。佛蘭西革命史中のロ

ベスピールが最後の演説は如何に快きも、愛蘭士義士傳中のエメットが刑臺上より其國民に訴ふる辭は如何に壯なるも、實際斷頭臺上に立て慷慨する義人を見れば、吾人いかてか孤燈の下節を打て三嘆するの快感を覺えんや。

難者或は言はん、歴史は想像の虚誕にあらず、只過ぎ去りたる現在ののみ。而して吾人が例令へば「平家」を読み平氏没落の段に至て俯仰今昔の嘆に堪えざるの間、壯大異常なる一種の快感を覺ゆ。之れ子が現實の悲哀には快樂なしと言へるに矛盾するに非ずやと。善哉問や。バルクも嘗て過去の「オーセンテック、ヒストリ」を以て現在の「リアル、フハクト」に混じ、難者と同一の論法を用ひたりき、然れども之れ一を知て二を知らざるの言のみ。

予は言はん、と欲す、現實は、現在のみに存し、過去は、猶未來の如きなり。吾人自ら經驗したるに非ざるよりは、過去の歴史は、只一の想像に過ぎざるのみ。吾人は、今日よしや敦盛と熊谷とを以て、小説的人物にして其「オハイ、ク」の如きも皆作者の「曰く」なりと信ずるも、將た實際青葉の笛と共に存在せりとするも、少しも平家物語の趣味を増損せざる也。

又爰に道德的觀念に就て一言を要するものあり。若し道德的觀念が正義の人物の悲哀に苦めるものに向て同感を表し、此同感によりて悲哀の快感を生ずるものとせば、吾人は此と同理によりて佞奸邪惡の人物に向て惡感(アンチパシー)を呈することによりて不快の感情を起さざるべからず。然るに詩歌戯曲の中に於て吾人が經驗する所は、之に全く反せり。いかに師直は惡くとも、吾人は渠が蛇の如き眼を光らして本性なりや御身やどうするかと叫ぶ時に於ては、實に言ふに言はれぬ快樂を感ずるに非ずや。

之を要するに大西氏は重きを社會的性情と道德的觀念とに歸し過ぎたるの餘り、百尺竿頭一步を進めて其説を大成することをなさず、徒にバルク、シベンハエルの間を脱する能はざりしは氏の爲に惜む所なり。氏が社會的性情は要するにバルクが他人の悲哀を見て苦痛を感じたる時は、吾人は悲める人を救ふによりて、吾等自らを救はんことを務むと言ひしに歸すべく、又氏が復我を論じて、人間最終の目的は假我を去りて實我に復るにありと言ひしはシベンハエルが個人的小意志が無意識となりて宇宙的大意志に混入するを以て最上の樂境なりと説け

るに歸せんのみ。

以上は本論に入るに先ち、略々大西氏の説を批評して我論點の在る所を明にしたるのみ。いでや是より一躍して我が本論に説き入らむ。

予は悲ふ、悲哀の快感の主要なる原因は各人が固有せる審美的觀念に存すと。何を以て之を謂ふ、予は其理由の茲に説明するには餘り簡短に過ぐるを思ふ。望むらくは讀者の予が解説を聞くに先ちて其心に顧みられんことを。

抑も審美的觀念とは何ぞや、之れ本論を解説するに當て確め置くべき極めて必要なる問題なり。若し讀者にして十分予が所謂審美的觀念の性質を理解せば、庶幾くは予が説の誤らざるを知らん。

審美的觀念は主として「美」と「崇高」とより成る。予は本論に關係ある「美」のみに就て言はん。「美」の本體に關してはプラト、アリスト、トル以來ハルトマン、ロッツェに至るまで哲學者の説く所多少の異同あれども予はシベンハウエルと共にプラト、が理想説を取る者なり。曰く「美」は現實世界の萬物に對しては其模倣型なり、吾人が或特殊の物に於て美の標準となすものは其物の模倣型なり。同じ種類の物の美に

多少の差あるは此模型に近くことに多少の差あればなり。例令へば吾人が理想的美人は只一個の抽象的模型のみ。吾人は之を想像中に描く能はず、之れ吾人が知らざるに非ず、之を知る吾人の理想の眠れる也。今若し絶世の佳人に遇へば、眠れる吾人の理想は忽ち覺めて、直ちに其模型に似たるを認識し、之を美なりと感ずる也。之れ猶忘れて自ら想ひ起すこと能はざる朋友の名が、他人の我れに告ぐるに逢へば、忽ち其意中の人なるを認識するが如し。斯の如く絶對の美は現世界の事物に對しては、其事物各自の模型となりて、吾人の理想中に存するなり。ハルトマンが美を以て單純なるものに非ずして、複雑なる理想より成れるを主張せしは、絶對なる美と事物の模型とを混同せしに非ざる乎。美の本源に關すること少きを以て之より轉じて、審美的事物が吾人に及ぼす感化力を述べん。

審美的事物が吾人を樂ましむるは主として、吾人が利己心を奪ひて無心識の大世界に吾人を埋没すれば也。苟も「自己」なる觀念が胸裏に存する間は、吾人は人間の天性として決して「自己」てふことを忘るゝ能はず、幾多の慾望は蛇の如く吾人を苦むる也。一慾充つれば一願來り、一願足れば一望來る、一刹那一彈指の間も吾人

は希望なるものに離るゝ能はず。彼の希望なくして生くる能はずとは實に悲むべき人生の真相なり。而して誰か知らん、吾人が希望は一種の迷信に過ぎざるを。是れを得たるの後に於て之を想ひ見よ、之を求むるの勞苦に値する者果して幾何かある。且や之を求むるに當ては得ざらんことを之れ恐れ、之を得たるの後に於ては失はんことを之れ憂ふ。吾人は只役々として憂苦の一大波瀾に浮沈するに過ぎざる也。況や吾人が希望の十中八九は失望落膽の中に終るを常とするをや。之を求めて苦み、之を得て憂へ、之を失ふて悲む、是れ現象世界の真相にして、吾人の意識に纏ひ形影相離るゝ能はざる所の者なり。

要するに自己てふ觀念ある間は、吾人は現世現身の有限有碍なるを忘るゝ能はざる也、其最後が死に終ることを忘るゝ能はざる也。山を見ても、川を見ても、如何にして自己を利せんてふ思想を脱却する能はざる也。美人を見、美形に接するも、如何にして之を我が有となさんてふ慾望に離るゝ能はざる也。此思想や此慾望や、吾人の依て生活する所以にして、又吾人の依て不幸なる所以なり。吾人は茲に至て厭世主義に合調するを覺えず。

審美的事物の吾人に快感あるは此自己て、觀念を消却し、吾人を抜て美の理想中に導けばなり。故に眞に美に感じたるの瞬間にありては、吾人は意識を失ひて純然たる知覺のみを存する也。故に只物あるを知りて自己あるを覺えず、恰も目の如く能く他物を見るも自己を見ざるなり。此境地にある吾人は身を以て外物中に没了し、遂に主觀客觀の差別を失ひ、渾然として絶對の理想中に浮遊する也。シッペンハウエルは審美的に事物を觀ずる二個の要素を指摘して「(一)個々別々の物として之を見ずして、其物が屬する種類の摸型、即ちプラトールが所謂理想として之を見ること、及び(二)之を見るの人は意志慾望を離れ、純然たる知覺のみを有すべきことなりとせり。

實に然り、是を以て自然を愛する詩人の眼には、蕭颯たる冬の枯野も、凄寥なる夜半の月も、岩根に咽ぶ流泉の響も、天半にかゝれる斷虹の影も、咲く花も、鳴く鳥も、山も海も、木も石も、其理想中の美に於ては共に別つ所なき也。美術を愛する技藝家の眼には、輪奐宏壯なる「パルセノン」の殿堂も、半身斷離せるアゼンスの古像も、左甚五郎の京人形も、圓山應舉の幽霊も、其心に感ずる主觀的美に至ては共に異なる處

なき也。此二要素の結合する所即ち審美的快樂を生ず。

以上は美を認むるの人に就て言へるのみ。然らば則ち美なる物の要する特質如何。之れ次に研究すべき問題なりとす。

予は美なるものが具ふべき特性の主要なるものを以て「容易に人をして理解せしむること」なりと云ふを躊躇せざる也。此の容易に人に理解せらるゝことは極めて卑近なる性質なるが如しと雖も、想ふに美術の要領を擧ぐるに斯の如く簡にして盡せる者はあらざるべし。予は天上天下有形無形を論ぜず、吾人の尤も容易に理解し得るものは即ち「美」なるを信ずるものなり。一に一を加へて二となることを知るは實に容易なるに相違なしと雖も、然れども個數なる觀念が連續なる觀念と連結するに非ざれば之を能くせず、恐くは吾人が赤子の際に於ては尙解すべからざる問題なりしならん。然れども襁褓の中にも紅色なる草花を見て之を採らんと欲せざる者はあらざる也。萬物は皆智力の判斷によりてか、若くは極めて簡單なる場合に於て意識の直覺によりて理解せらるゝ也。然れども美は智力の判斷を要せず、否意識の直覺さへも須ひず、吾人は無意識中に於て猶之を認

むる也、美の觀念は恰も人心の單一なるが如く單一なる者なり。彼の科學の複雑なるものは、何が故に吾人の多數に不快なりや、之れ他なし、吾人か單純なる本性を枉げて強て晦澁煩雜なる理論の中に導けば也。然れども美を理解するに、吾人は些の盡力を要せざる也、目の見るが如く、耳の聞くが如く、些の障礙なくして、直に吾人が胸奥の理想に浸透し得るなり。吾人は其の何くより來り、何くに向て行き、又何か故に然るかを知らず、只其の美なるを現に認むる時に當て、吾人の心は言ふべらざるの快感を覺ゆるなり、之れ他なし、吾人が單純なる本性に適合するが故のみ。然り美なる者は尤も容易に吾人に理解せらるゝを要す。凡て容易に理解せらるゝ者には素より幾多の要素ありと雖も、吾人の經驗せる事實に適合することも其の一要素なるは疑ふべからざる也。何となれば若し吾人が少しも見聞せざる事は之を理解するに當て自ら多少の盡力を要すべければなり。是事は後に至て吾論旨の一部を助くるものなれば、讀者の預め記憶し置かれむことを望む。

以上は予が悲哀の快感の主因なりとする審美的觀念の性質に就て畧言したるのみ。此審美的觀念が何故に悲哀の快感を起し得べきやは、爛眼の讀者の既に推

知したる所なるべしと雖も左に其要領を陳べむ。

(一) 既に戯曲の審美的なるを認めながら、而して又審美的事物の吾人に快樂を興ふることを認めながら、戯曲より生ずる快樂を擧げて、大西氏の如く、全然他の全く異なりたる社會的性情に歸するは、一見して其の不當なるを見るべきなり。顧ふに大西氏が所謂「窮屈なる利己の歴束を脱して、我心は人類の大なるが如くに大に社會の廣きが如くに廣きを覺ゆる」は、其原因の社會的性情に在らずして、寧ろ審美的觀念の満足によりて、吾人が利己心を失ひ、外物と合轉する状態に非ざる乎。

よし一步を譲りて之を考ふるも、予は有限有碍なる人世を目的とせる社會的性情は果して吾人をして無意識中に絶對の理想を仰がしむるが如き宏大なる靈力ありやを疑ふものなり。

(二) 何故に悲哀の快感は同感の情の薄弱なる詩歌戯曲に於て却て強大に同感の情の強大なる現在の事實に於て薄弱なりや。是れ社會的性情及び道德的觀念の共に閉口したる問題なりき。然れども審美的觀念を以てする時は、明に其理由を知るを得べし。何となれば美は素人世の利害得失に關せざる、即ち現實ならざる

理想中に於てのみ存在する者なればなり。

(三)若し、單に社會的、道德的の性情によりてのみ、悲哀の快感を生ずる者とせば、演劇の快樂は、一に俳優の技藝に頼り、其容貌如何の如きは、少しも影響する處なかるべき理なり。吾人今「朝顔日記」の「宿屋」を見たりとせよ。若し次郎左衛門にして容姿彼が如く秀麗なるの代りに醜惡なること岩代の如く、深雪にして其顔貌渠が如く婉妍可憐なるの代りに坊間を「吹き流す」女按摩の如くならしめば如何。吾人が感ずる快樂は極めて小少なるべき也。吾人は他の容貌の美なるが故に之を憐み、醜きが爲に之を惡むの理由あるか。是れ豈悲哀の快感は主として審美的觀念に存するの一證に非ずや。

社會的性情に十分の感觸を受けながら、之によりて生ずる快樂の極めて薄弱なるの例は吾人の平生演戯に於て實驗する所なり。試に見よ、彼の「志渡寺」の、辻の如き、「天下茶屋」の伊織の如き、一は其の養ひ君の爲に一身を犠牲に供し、一は父の仇を狙ひて却て仇の爲に殘殺せらる。社會上より見るも、道德上より見るも、其事情の愁傷感嘆すべき之より甚しきはなし。吾人は之れを見る毎に殆ど悲惨酸鼻

の情に堪えざる也。然れども之が爲に感ずる快樂の極めて薄弱なるは如何なる故ぞ。之れ豈に、辻と云ひ伊織と云ひ、一は暴露に過ぎ、一は殺伐に失し、共に只、吾人が社會的性情を感動するに止りて、吾人が快樂の本源なる審美的觀念を満足する能はざるが爲に非ずや。斯の如き例は少からず、讀者若し「伊賀越」の平作の死と「太閤記」の十次郎の死を比較せば他の一例を得べき也。

(四)演劇中の惡人が何故に吾人をして不快の念を起さしめざるや、は道德的觀念の説明する能はざる疑問なりき。是れ道德的觀念は只好惡の情を左右し得るも、不快の情には少も關涉する能はざれば也。吾人は信ず、戯曲中の人物は其性質の善惡正邪を論せず、動作にして審美的ならば、吾人は其美なるの點に於て必ず多少の快樂を覺ゆる也。是を以て吾人は、師直を見て、惡みながらも、快樂を感ずる也。(五)吾人は信ず、悲哀の情と之に伴ふ快感とは全く其起原を異にする者なり。斯く結論すれば、難者或は問はむ、戯曲詩歌にありて悲哀の情大なると同時に快感の之に伴て大なるは何故ぞ、其起原を異にし、個々獨立せる悲哀と快感の二物が、兩々相關するが如き狀あるは何ぞやと。此疑問を解くに非ざれば予が議論は完全な

りと云ふ能はざらむ。吾人は信ず是れ他なし吾人が先に讀者に注意し置きしが如く美なるものは最も理解し易き者なるが故に能く吾人が経験せる事實に適合せざるべからざればなり勿論美を傷けざるの範圍内に於て。同感の情は吾人が嘗て自ら経験したる事情に於て最大なるもの也。彼の悲しき戯曲ほど快きは是れ美なる即ち樂しき戯曲の中には自ら吾人が社會的性情を興奮すべき寫實的分子の含有しあればなり。故に吾人は悲しきが爲に樂しきに非ずして寧ろ樂しきが爲に悲しき也。

結論。之を要するに戯曲に於ける悲哀と快感とは各其起因する所を異にす。前者は主として社會的性情に本き後者は主として審美的觀念に存す。決して悲哀其物が快きに非ずして悲哀なる戯曲中に存する美其物の快きのみ。吾人は美なるものを見ては只之を樂み悲哀なる美即ち悲劇を見ては其悲哀を悲むと同時に其美を樂む也。

(二十五年十二月)

日本民族の特性と文學美術

國運の隆盛と共に吾人は世界の一大國民として自己を認識し同時に世界人類に對する關係的位置を知らむを望む。我民族特性論の今日に喧しきは敢て怪むに足らざる也。然れども其所論は概ね過去數十年の歴史若くは現時の社會状態より歸納し來れる一種の功利的見地の上に立つ。或は感激的氣質を謹むべしと云ひ(大西祝氏)或は運命に狂屈し易く順逆轉倒の境に安心するの大勇猛心に乏しと謂ひ(姉崎正治氏)或は武士道は柔腹剛骨を兼備し禪學と儒道とを圓融和合せる我邦人の長所なりと説き(重野博士)或は我邦は支那の怯懦退縮に流れず西洋の放恣横暴に偏せずよく東西の長所を兼併すと論ず(加藤博士)。皆之れ有用必須の文字なるには相違無しと雖も未だ數千年の歴史を貫通してあらゆる國民的活動の中心となれる根本的特性に説き及べる者にあらず。予輩は世界歴史の精神に曉通し優に歴史的はた比較的研究を爲し得るの學者が弘く東西古今の民族に對比して吾邦人の世界的位置を案定せむ事を望むや切なり。予輩亦平生是點に向て

多少の意見を有するもの、試に其研究の例一二を述べて讀者の注意を惹起せむか。凡て民族の特性は其民族の原的狀態に於て最も明白に顯はるゝもの也、而して其發表の形式は一にして足らずと雖も其主なるものは宗教、文學、美術、哲學の四なるべし。而して是等特性を規定するものは之を内にして、民族の資性及び其物質的影響の二者に歸すべく、之を外にしては各民族の文化の範圍の伸張に關すべし。而して其歴史的活動の實際的根據は土地風土の上にある。今

宗 教

に就て一例を取らむに、印度の吠陀と波斯のアエスタは共に原的アリアン族の宗教思想に本けるもの、而も彼は冥想的にして此は活動的なり。彼はデハウスの原神を忘れてインドラ、アグニの外面的表象に走り、此は常に自然有形の域を超て善惡邪正の根本主義に入る。アフラマヅダとアングラマイニユの二主義はアエスタの終始を貫通す、彼を以て東洋に於ける希臘とせば、此は獨逸にも似たらむか。是差別は如何にして起りしぞ。マクスミューラー氏がいみじくも分てる宗教發達の三大期、即ち自然的人視的及び心理的は是等アリアン族の宗教に於て恰好なる

應用を發見すべし。然るに之に反して希伯來の宗教は何故に第一期を缺き支那の宗教若し宗教と名くるを得ばは獨り直に心理的狀態に達するを得しや、はた又パレスチナに源せし三大宗教は國民的、はた人種的宗教として如何の差別を有するや。希臘思想が猶太主義を抱合して新プラトン派より基督教に到るの推移と交替一神教の吠陀が吠檀達以下の婆羅門哲學となりて遂に佛教の無神論に達せる發展とは如何に各々民族の特性を發揚せるものなりや。更に

美術文學の例

を取らむに、セミチック若くはハミチック民族として埃及若くはフェニシアの美術は如何に自由想像の精神と宗教的趣味とに乏しきや。同じく東洋に邦せりと雖も印度波斯の美術は全く之と趣を異にし、其守護天使に於て其フェロヘルに於て其の富贍なる想像と宗教趣味とに於て如何に明にアリアン族の特質を顯はせしか。而も其妄想誇大なることに於て、其塔婆と精舎とバゴダとに於て如何に遙に希臘の優美閑雅に遠ざかれるか。埃及の三角塔とブリエネのアテ、テ堂

と、ス、フ、ハ、ン、ク、ス、と、ニ、オ、ベ、とは、何故にしかく其風尚を異にせりや。ラ、ハ、マ、ハ、ナ、と、イ、リ、ア、ス、とは如何なる點に於て同じく、又如何なる點に於て異なれりや。ダ、ビ、テ、の、讚、歌、と、四、吠、陀、とは其思想に於て如何に根本的に異なれりや。宗教無く神話なくヘルド無きの國民として支那民族の文學は如何に印度希臘に異なる所ありや。金藤の冊祝は、ヨブの兇言と如何に其情思を異にせりや。はた又詩經三百篇は支那四千年の歴史に對して如何に其解釋を與ふるや。——是等は學問上頗る興味深き研究の題目に非ずや。知識は歴史の上に立ち、歴史は關係の上に基く。眞に部分を悟了せんと欲するものは全體を洞察するの明を要す。比較的方法によりて各國民族の特質を案定し、更に人類歴史の一部として之を達觀するに非ざれば世界に於ける一國の關係意義を明にするを得ざるべし。是れ嘗に過去の歴史の鍵輪たるに止らず、依て以て國民未來の運命に向て經綸の光明を放つを得べし。然らば則ち獨り學者の閑事業のみに止まらざるなり。予輩は斯の如き方法を以て日本民族の歴史を研究する學者の出でむことを切望す。是れ即ち日本を中心とせる世界歴史を編するなり。

(廿八年十二月)

「青年小説」を讀む

「青年小説」は、「今の青年小説家が着想筆力を世に紹介して當代文運の色彩を添えむが爲に」公にせられたるものなりと曰ふ。萃むる所曰く鏡花曰く天外曰く青軒曰く宙外花袋曰く玉茗風葉。皆是れ當今新作家中の錚々たるもの、明治文學の未來は是等の諸子に負ふ所甚だ多かるべし、批評家の輕々しく看過すべきものにあらず。流石に青年は前途を重ず、是れ一卷の收むる所佳作甚だ多し。勇健なる青年諸子が想を構へ筆を執るに臨みて、將來の効丕を是一篇に卜したるの意氣潛に想ひ見るべきものあり。鏡花が「化銀杏」天外が「改良若殿」青軒が「可憐兒」宙外が「ありのすさび」花袋が「無名草」皆是れ作者が特色と長所とを瀝盡せるに庶幾きもの、中には桐生愈虐が「仲左」の如き甚しき劣作無きに非れども、さすがに「閨秀小説」の採擇の杜撰なるの比にあらず。蓋し清新奇警の世評は、未だ以て青年作家が小説壇に於ける確乎たる立脚地を造るに足らず。新奇を以て博したる世好は、幾くもなく陳腐を以て遺却せらるべければなり。今や新奇に倦みつゝある社會は、新奇

以外に青年作家が本領を叩かむことを望む。幾多の批評家は既に是風潮を預告せり是時に當りて『青年小説』出づ。彼等はやがて文壇のプロ・ベに彼等自身の生命を托したる者に非ずや。

泉鏡花の『化銀杏』

は『外科室』と共に彼が作中の最も佳なるものとして推薦するに躊躇せざるべし。鏡花は素善く骨髓を捉るも未だ善く皮肉を附すること能はず。彼は人を描くよりはむしろ人の想を描く、現實の人間を取りて現實の社會に活動せしむることとは彼の素善く爲し能はざる所。彼はげに所謂の觀念小説家の摸型として見るべきものにして、其の作る所は殆ど常に理想化の極點に達せるものなり。彼れの想を構ふるや短刀一揮其精粹を刺りて直に讀者の理想に訴ふ。故に其肉を振ひ其血を絞り吐露し來る所往々赤條々の骨架に終るものあり。彼は血肉なき精神の遂に活動する能はざること猶油なき燈火の燃ゆる能ざるが如きことを忘れたる也。事物萬千の複雑なる形象を抽離して直に其活動の中心を抉剔せる彼が醇

化力は洵に一種の天品に出づ。而かも彼は單に目的を以て手段を遣したる者也。是を以て彼が作は餘りに簡截にして又餘りに抽象なるに過ぐ。驚拔新奇とは畢竟油無き燈の新奇を稱えしものにして未だ燈の油なくしてあり得べからざることに想ひ至らざるの評なりしのみ。鏡花が從來の作は實に新奇なるものにてありき然れども『化銀杏』に於て彼は慥に一步を進めたり。彼は骨と共に肉を捉へんと試みたり而して彼が企の幾分は美事に成功したりき。鏡花はたしかに健全なる發達を爲したりと謂ふべし。彼は是の『化銀杏』に於て愛情の一致を缺きたる夫妻の如何に不幸なるものなるかを示し柔婉なる女子も其愛情の自由の爲には如何に恐るべき決心と行動とを作為し得べきを寫さんとせり。お貞及び其夫の性格は概して首尾よく描かれ對話の調子の活々せる中には作者の苦心顯はれたり。『ちよいとこ』を點出せるも妙なり。只お貞が話相手に煩はしたる御禮として少年芳三が爲に結末の掉尾的警句を設けたるは徒に巧を弄ぶものにしてむしろ全篇の餘情を殺ぎたるは惜むべし。

光を厭ふこと斯の如しされば深更一燈の燈をもお貞は恐れて吹消し去るなり。

是れ心狂ひ情亂れても胸奥一物の微奕々として尙恒に良心を苛責する、憐むべきお貞の運命を一結し、讀者をして低回の情に堪へざらしむるものあり。鏡花は須く是一行を以て全篇の結尾となすべかりしなり、自餘の文字は蛇足ののみ。

然れども其姿をのみ見て面を見ざる諸君は、嗚な本意無からむ、然りながら諸君より十層二十層、なほ幾十層こゝに本意無き少年あり云々。

と言ふに至りては、勉て照應の妙を銜はんと欲して、偶々讀者をして其の纖巧補綴に鑿眉せしむるに終る。本篇に於ける少年芳三は、決して斯の如き因縁を有せざるなり。お貞の性格は作者の尤も苦心せし所なるべし。第十五以上のお貞は洵に自然のお貞なり、唱隨十年一兒をすら生みたるのお貞が依然として其夫を嫌忌す、實に潜に其死を希ふまでに厭忌す。是れ願ふに常人の以て不自然とする所のもの、而かも吾等は鏡花が女性の幾微を穿ちて能く是大膽なる意思を構へ得たるを多とするものなり。然れどもお貞が運命の大旋轉の樞軸たる十五回の初めに於て「時彦を嫌忌の極其死の速かならむことを欲するの念は、良人に薬を進むるの時も、其疼痛の局部を擦る隙も須臾も念頭を去りやらざる程のお貞は、果して」云の

幾年の壽命を縮め身を以て神佛に供へて合掌し、瞑目して良人の本復を祈ることを得べきか。鏡花が妻として夫に對する義務と、女子として愛情に殉せんとする感情との不斷の闘争を、一個お貞の胸中に描かんと務めたるは甚だ喜ぶべし。然れども彼は之を描く所以を知らざりき。憐れなるお貞が甘心して其夫を殺すに至るまでの徑路は、幾多の矛盾を以て充たされざるを得ざるに至りき。あはれ鏡花の筆は其想よりも短かりし也。遮莫吾は宙外の「ありのすさび」と共に鏡花の作を以て「青年小説」の双絶となさむと欲す。

(中略)

後藤宙外の「ありのすさび」

を吾等は「化銀杏」と共に「青年小説」の白眉なりと稱えむ。曾て早稻田文學紙上に紅葉露伴、美妙、三家の細評を讀みて、吾等は初めて宙外の名を知りき。今や批評家なる宙外が「ありのすさび」の著者なるを想へば、吾等は氏が心理的解析に長じたるの偶然にあらざるを見る。吾等の宙外に於て得難しとするもの茲にあり。

其觀察の周到なること一なり。其文字の着實なること二なり。猥に新奇を求めず、幽玄を衒はず、日常の人事に資りて、人生の裏面を表はさむとするもの新しき作家の中にて一葉と宙外とあるのみ。蓋し年齒弱く、閱歴乏しき少壯作家が蔚勃たる功名心を抱きて文壇に立たんとするもの、其筆自ら警奇ならざるを得ず、其想自ら嶄新ならざるを得ず、彼等は平淡なる行路の上に於て到底老練なる舊作家と競争すること能はざればなり。然れども其徑を捷にして其歩を窘にせざるもの、彼等の中幾何かある。夫れ權變は久しきを得ず、世故を閱すること漸く多く、思想亦漸く老成すれば、彼等の作も亦漸く坦常和平に近く、是れ自然の勞なり。若し夫れ宙外は少しく之と撰を殊にす。吾等は彼が處女作なる『ありのすさび』を讀みて、近頃まで専門學校の學生たりしかを驚き、其筆路の老實平和なる、殆ど青年未熟の客氣を印せざるに感じぬ。宙外は青年作家の群にありて一種の異彩を放つものと謂ふべきなり。『ありのすさび』の尤も勝れたる所は、清太郎の母が信夫妻に對して妬心を起すの條、即ち第四章以下にあり。舅の心情を描くに於ては未だ盡さざる所あれども、偏狹なる女性の弱點を寫し來りて、甚だ精緻を極む。底を叩け

ば何事にもなき、些細なる感情の衝突より、遂に一家の波瀾を起し、春風和煦の庭は、一朝秋霜悲惨の野となり、夫悲みて狂し、婦恨みて死し、老母が一念の妬骨は遂に一家團樂の幸福を殺却するに終る。宙外が才筆は這般の情理を曲盡して殆ど遺憾なきに近からむとす。

高月村の田村の家にては七日の間に夫婦の葬式二つ出して其夕より廣き奥の間には老母獨り残りぬ。

との一結は無限の感愴に包まれ塊然として立てる憐れなる舅が心事をほのめかして餘情掬すべし。

(下略)

(二十九年三月)

喜ぶべき文壇の一傾向

宗教、文學を問はず、哲學、美術、政治を論せず、其の活動のあらゆる種類に於て數千年の人間歴史は、今日最高級の發達を爲せる吾人の意識の上に紛ふべくもあらぬ一の光明を抛ちぬ。何ぞや、道德の理想てふ觀念是れなり。因果の外に目的を認

めざる器械主義はいざ知らず、最も健全なる最も眞摯なる思想の根據は道德の理想にあり。之れを内にしては良心の命令となり、之を外にしては信仰の懷慕となり、人生のあらゆる關係の上にはたあらゆる人々の行爲と思慮との上に、常に絶大の勢力を有すべきものは即ち是れ也。歴史は之によりて其の光榮を増すべく、文學、美術は是れに依りて其の品位を高むるを得べく、宗教哲學は之に依りて其の天分を全ふするを得べし。世人往々道德を以て卑近なる功利と同一視し、文學、美術を以て由來之と相關せざるものとなし、文學者、美術家亦多く爰に注心せず、偏に人心の弱點に投じて爲にする所あらむと欲す。一世道念の匪薄なるの致す所、獨り當事者をのみ責むべからずと雖も、予輩は明治文學百歳の爲に仲々の情に堪えざるものあり。七月以來の本紙に於て或は青年文士の厭世觀を難じ、或は美術と道德との關係を説き、或は文學者の道念を論じ、危言世を驚かせしもの洵に已むを得ざるに出づ。頃來退て傾聽すれば世上吾人と感を同うする者漸く多く、道德と文學との關係に就て立言したるもの少からざるが如し、之れ予輩の大に喜ぶ所也。今其の二三を例せむに、元良博士は「人跡の美醜と善惡との關係」と題する卓抜なる

論文に於て以爲らく、

美は眞性質上前後左右を顧みざる者なりと雖も、人は美の爲にのみ左をせらるゝもの、に非ず、此より尙廣大なるものあり、幾多の不都合あるをも顧みず、美術の爲に一身を犠牲に供する、と能はざる也。美術の爲に社會の風俗を顧みざるは、社會發達の好祥に非ず。

(帝國文學第七)

同じ雜誌同じ號に、芥舟漁郎と名のれる人がヨルダンの近著の部を抽譯して「戯曲と道德」と題せる一文を掲げ、期せずして元良博士の所説を贊せしも、強ち偶然のみに非じ。是等は純ばら學理上より立論したるもの、而かも其の道德的理想の點に説き及ばざりしを恨とす。短刀直截當代文學の流弊を抉摘し、積極的に道念の文學に缺くべからざるを唱道したるもの、尙是他に少からず。桐生悠々庵と名のる人の如き其の一例なり。是人小説家の責任を論じて曰く、

人或は言ふ、美は最終の目的なり、故に美を以て生命となす所の詩歌は唯夫れ美を表顯するを以て足れりとなすと。然り、然りと雖も是等の詩歌は宇宙最終の世界に於て凱歌を奏すること能はざるなり。且夫れ唯美のみを描くを

以て詩歌の職分と思惟する時は往々兒童婦人を娛ましむる所の玩具となり了るの恐れあり。蓋し造化が人間に詩歌を與へたるは單に耳目を娛ましむる所以にあらずして、幽玄不朽の理性と意志とを發揚し、兒童を導き婦人を導き、又健全熟成せる男子を導きて以て、天命宇宙の真相を知らしむるにあり。

(十月七日、讀覽)

其の意見の妥當ならざるものありと雖も亦當代の文學の弊所に適中する所無しとせず。「國民の友」記者は常に一種功利眼を以て文學を觀るもの、其の言往々偏僻に流るゝを免れずと雖も、一個不拔の見地を有するの點に於ては儘に一面の批評家たるを失はず。去月上旬現時小説の内容を論じて曰く、

吾人は日々出版せらるゝ我幾多の小説に就て其内容を閱する毎に未だ嘗て我文學界の寂寥なるを歎ぜずむばあらず。彼等の大部分に於て吾人は濟世救民の猛志を見る能はず、不朽なる人生の眞趣を寫したるものを見る能はず。獨り斯の如きものを見る能はざるのみならず、單に其調子の平正にして其思想の健全なるものを求むるも亦甚だ稀なるを覺ゆ。一言にして言へば我小

説の内容は國民教化の資として甚だ稀薄なりと曰はざるべからず。

又曰く、

莊子の盜跖を讀むもの、誰れが其議論の餘りに極端にして人を驅りて盜賊たらしめずむば止まざるの勢あるを危ぶまざらむ。現時の我小説家が社會の罪惡を鳴すこと多く、個人の責任を説くこと少なく、感情に同情すると多く、道義に謀叛すること甚しきの一事は、吾人をして轉た此の如き書を我家庭に供するの危難を感ぜしめずむばあらず。

(國民之友、二六八號)

其の矯激過張なるは暫く措き、其の言堂々、其の意切々、當代不徳の文人をして慚死せしむるに足る。今は罵ることを止めて言はんとを務め居る内村鑑三君が粹人は社界に賤視せられて其頭を擡げ得ざるに及んで、風流人は月花に愚歌を呈するを止めて、國人悉く誠實を尙び、品性は之に優りて尊敬さるゝに及んで、始めて世界を風靡すべき大文學は吾人の中より望むべき也。……愛と正義とに動かされずして大文學の世に出てし實例ありや。

と喝道せるは君が勃々たる道義的精神を躍らせたる筆端に幾多當世文士の漸汗

を絞らるべきか。證書の不備を奇貨として其の著を重賣したる小説家、詐僞取財にて入牢せる小説家、數へ來りて明治文學の道念の基礎の如何ばかり強固なるかを想はゞ誰か憤激の情に堪ゆべけむや。『罪を容るるものは罪なり。』予輩はかゝる罪惡を寛假して其の著を歡迎し隨喜するは社會の品位徳義を維持する所以に於て大に恨無き能はず。されば社會人心の道義的意識の漸く覺醒し人道と文學との關係に就て多少留意する所あらむとするは、我文壇の一大慶事として予輩之を特書するに躊躇せず。然れども茲に一事の注意すべきあり。

予輩は文學美術を以て道德の奴隸と爲さむとするものに非ず。只人世實際の指導者として道德の支配を待つべしと云ふのみ。人は實際を離れて生活する能はず、生活其の物は素より人生の第一義なり而して吾人の實際的原理となすべきものは目的と命令とを兼有せむことを要す。『美』は性質あれども目的なし況んや命令をや。之を兼ね具ふるものは道德あるのみ然らば則ち道德は人生の第一原理に非ずして何ぞや。然れども文學美術は常に之に隸屬し其鼻息を窺ひ其願使を受くべきものに非ず。苟も道德に背反せざる限りは十分其れ自らの獨立と自

由と價值とを保持すべき也。唯夫れ道義を障害する時若くは障害せむとするの虞ある時吾人は實際的產物として之を迫害し壓制するの權利を有するのみ。夫の民友記者の偏に道義に關してのみ文學の價值を認むるが如きは遂に文學の何物なるかを解せざる者と言ふべし。蓋し寸を矯めむと欲するものは尺を枉げざるを得ず議論の中正を得むことも亦難い哉。

(廿八年十二月)

吾文學界に於ける道義的意識

吾等は前號に於て『喜ぶべき文壇の一傾向』と題して道義てふことに世の評家の眼の向ひたるを述べしが是頃にいたりて是傾向は更にや、明になり行けるが如し。諸種の新聞に是の趨勢を認むるものから『毎日新聞』なる御荷録山人と名のる人の所論は殊に最も妥當にして吾等が心を得たり其の説に曰く、

彼等詩人が情火炎々として詩心動き而して美神と抱擁せむとするの時何ぞ前後左右を顧念するの違あらむや。何ぞ倫理と道德とを問はむ又何ぞ實利と實益を思はむ。然れども彼等は到底社會道德の批判を否む能はざるなり

倫理、禮法と相反するを容さざるなり。吾等は詩人を縛するに鐵鎖を以てせむとするものに非れども、詩人は詩人として立つと共に個人として國民としての責任を重ずべきを見るなり。

是の論道徳と文學との關係を説き得て餘蘊無きに庶幾し。是れ現今の文學批評家に於て道念の漸く成熟したるの證なり。殊に喜ぶべきは、地方有爲の青年が文學に就て都會文學者の聞かば漸汗すべき潔き志を持てることなり。博文館先に『少年文集』の讀者に「文學者の本領を問ひしに其の大多數の尤も力を盡して論じたるは當今文學者の道念薄弱にして、其の作多くは淫靡殘忍、たま／＼世を墮落に導くに過ぎず、文學の本領は世道人心の推獎にありと謂ふにありき。是れ青年客氣の口吻を含まざるに非れども、其の思想の健全清潔なるは吾等の太だ喜ぶ所なり。吾等は是等の有爲なる地方青年が文壇に馳聘するの日には我文學の氣格の如何ばかり高まるべきを思ひて、深く屬望する所あり。地方青年諸士乞ふ努力せよ。

(廿九年四月)

古寺院の寶物

凡ての國には寶物と云ふものあり、こは其國の過去の文明の最も醇粹なる遺物なれば、永く後昆の紀念として傳ふべきものなり。そが何人の手に成り、何人の手に保存せらるゝやは措て問はず、かゝる寶物は、よしや私人の財産に歸するとも、國民全體の寶物として見るべきもの、されば適宜の處置によりて、其保存の目的を達するは國家の事業に屬す。

我邦にも寶物と稱すべきものは種々あれど、就中古寺院に保存せられある者の中に、は文藝政教の歴史上最も貴重すべき者多きは、争ふべからざる事實なり。こは本邦寺院の縁起久しく、且つは多くの時代に於て一國文教の淵源となれりしにも因ることなるべし。何は兎もあれ本邦の最も貴重すべき寶物が、是古寺院の中に保存せられあることの事實なりとすれば、そを一人一寺の私財として見ず、國家の公寶として永遠に傳ふるは、まさしく國家が當に爲すべき事業の一なりと謂ふべし。

さればにや、我政府先には寶物取調委員を全國に派遣して古社寺の寶物を取調べ、近くは第十議會の協賛によりて古社寺保存法を實施し、是目的の爲に多少の力を効したり。これは實に然かあるべき事なり。されどかの寶物取調委員なるものは、其名の如く取調べたるに止りて、其保存の方法に及ばず、古社寺保存法も社寺の建物を美術として保存するを旨とするなれば、其庫裏に藏せる所謂寶物の保存に關しては、多く規定する所無し。されば是れ皆吾等が茲に説ける寶物保存の目的を達するに遺憾無しと謂ふべからず。是れ吾等が是説ある所以なり。

如何にして古寺院の寶物を保存すべきや。是れ他の珍案あるにあらず、適當の方法を以て政府是を博物館裏に蒐集する事是なり。是方案は今日に於て是を唱ふる寧ろ陳言に類す、されど是事を唱ふるの急は日に増し加はり來るを想はゞ、陳言必ずしも陳言にあらじ。吾等は政府の當局者が吾等の陳ぶる所に就いて三思する所あらむを望む。

寶物保存に就いて最も恐るべきは火災に如くは無し。本邦の寺院は盡く木造にして、風雨にだも堪えず、其建物已に不斷の修繕に待つも保存の命數に於て限り

あり。素是れ炊烟の家居に非ざるが故に、火災に罹るの憂は普通の人家に較ぶればやゝ少しと雖ども、たま／＼祝融氏の次る所となれば、千年の古刹一朝にして灰燼となり、累代蓄積し來りたる寶物も忽焉とし跡無し。而して傷むべきは是の如き火災の、短きは數十年、長きは數百年にして必ず一過することなり。されば百數の古寺院にして其の元のまゝに残れるは全國中指を屈するに過ぎず。斯く火災の度毎に、其中に藏せる寶物の大部分は焼失する事なれば、日本國の寶物は、古寺院にて保存せらるゝ限りは、遂に滅盡せざれば已まざるべし。如何に慨はしき事に非ずや。

例を遠きに求むるまでも無し、去月の末、寺院にはあらねど伊勢太廟の炎上を初めとして、大坂なる大念佛寺、播磨なる書寫山圓教寺の消失より、近くは本願寺の將に烏有に歸せむとしたるなど、まのあたりには是危險を見たる人、誰か吾等と憂を同じうせざらむや。殊に書寫山及び大念佛寺の消失は、古來有名の古刹の事として、貴重なる寶物の共に失せたるもの最も多しと聞く。かゝらむは寺院僧侶の不幸のみ、に止まらずして、日本國民全體の不幸なり、そを何とて國家の傍觀して已むべき

事ならむや。古寺院の焼失や、素より番僧の不注意、放火などの災難にも因ることなるべけれども、本を糺せば、古寺院、其物の建築の性質上にある。されば、寶物保存の目的は、所詮今の寺院の建物より、それを分離し、別に火災、其他の危難の憂無き處に安置するに非ざれば、到底達するの見込無かるべし。

さらば如何にして寺院の建物より分離すべきか、吾等の意見によれば、政府、須らく相當の代價を以て是を買上げるか、又は是寶物より生ずる収入額に等しき金額を年々寺院に下附し、是を政府に於て保管すべし。斯くし分離したる後、そを何處に安置すべきか。吾等は帝國博物館、もしくは地方所在の博物館を以て最も適當なる場所なりと信ず。

佛像を博物館に移せとは、既に世人の往々唱へたる所なり。されど何等の條件無くして佛像を寺院外に出さむとは、決して實行し得べからざる事なるべし。何となれば、佛像、もしくは寶物は、寺院収入の主なる財源にして、僧侶僧尼が依て以て衣食住を仰ぐ所なればなり。今の多くの僧侶がまことの信仰心に乏しく、宗教を見ることさながら一の商賣の如く、俗化墮落の極に達し居ることは、争ふべから

ざる事實なり。彼等の多くは、佛教々理の宣傳によりて、衆生濟度を目的とする如き宗教心の一片だに有せず、唯己れの先祖代々、皆僧侶の職に居り、己れまた是職を紹ぐにあらざれば、他に活計の道無きを以て、寧ろ己むを得ず、其願を圓にし、其衣を緇にするのみ。されば彼等が其佛像寶物を手放すことを肯ぜざるは、商賣人が其株を手放さざると同じ理由により、特に佛像寶物、其物に何等愛好心の執着するあるに非ず。故に、若し彼等に與ふるに、佛像寶物より生ずる収入以上の金額を以てせば、彼等は喜て是に應ずべし。斯くて其寺是が爲に廢るゝことあらば、彼等は寧ろ其の窮屈なる生活を捨て、俗界に入り、公然肉食妻帯の人となるを徳とすべし。是れ寶物保存の爲に利あるは勿論、彼等僧侶も亦利便とする所なるべし。加ふるに同時に、迷信排斥の效力もある事なれば、國家道德の側より見るも、最も望ましき事なり。所詮、孰れの點より見るも、佛像寶物を寺院より分離することは、政府が斷然是を實行しても、然るべき事ならずや。

扱て斯くして寺院より分離したる寶物を博物館に陳列し、若しくは光線中の暴露に堪えざるものは、蘊藏する事は、保存の目的を達する外に、幾多の利益あること

は言ふまでもなし。歴史家は是を見て珍奇の史料を得べく、美術家は是を觀て古人の典型を學ぶべく、文學家、宗教家、考古家亦それ〴〵他に得難き利益を享くべく、數十百里を旅行し、幾多の日子を消費するを要せず、一堂の下に觀覽し得べければ、學術の進歩知識の普及には缺くべからざる事なり。もし又迷信者あり、偶像遺物を巡拜せむが爲めに毎年莫大の時間と金額とを消費するを憚らざるもの、茲に來らば、一日の中に天下の名山古刹を巡禮すると同一の功德を受け得べし、豈便ならずや。西洋諸國にては、希臘、羅馬の古美術は猥りに私人の所有に歸せしめず、是を國有となして博物館裏に陳列して、以て公衆の觀に供ふるは、最も寶物取扱の法を得たるものなり。吾等は一日も早く我が政府が是の方法を取らむことを希望して已まざるなり。

(三十一年六月)

新聞雜誌の時代

假りに社會を有機體と見做し、交通機關を以て其循環機能に比するを得ば、新聞雜誌は儘に其神經系統に相當する者なり。新聞雜誌は人類の共同生活を統一し、

進捗するに於て、至大の效力を有すること言ふまでも無し。

故に社會の進歩繁榮は即ち其新聞雜誌の進歩繁榮なり。若し新聞雜誌にして時代の精神を解し、其社會の希望に適ふものならば、そは必ず時代と共に進歩し、其社會と共に繁昌せむ。是れ獨り理に於て然るのみならず、歐米各國何れも事實に於て是眞理を證明せざる無し。

然るに近時我邦に於て二三雜誌の仆れたるを見、直に今の時を以て「雜誌極衰の時代」なりと云ふものあり、是れ何のタハ言ぞ。進歩の社會に新紙衰微の時代あるべき筈無し、唯時代の精神を解せず、社會の希望に適せざる新紙にとりては何れの時代か極衰の時代ならざらむや。

社會は進歩せり而して雜誌は依然たり、社會は多方面となれり而して雜誌は依然として單調なり。人文開け趣好移れり而して雜誌の記者は依然たる吳下の阿蒙なり。是の如くにして衰亡せざらむと欲するも豈得べけむや。

試に「國民の友」を見よ、彼れは其十年の生涯に於て幾何の進歩を效し、か。明治二十年の日本に於て成功したりしもの、彼れ尙ほ執て是を三十一年の今日に施さ